
Skills Cross ~ Another Life ~

火桜芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S k i l l s C r o s s \ A n o t h e r L i f e \

【Nコード】

N 2 2 1 5 T

【作者名】

火桜芙蓉

【あらすじ】

これは、『Skills Cross』で語られなかった登場人物たちの物語……。と、色々を入れようと思っていた学園らしいものがぎゅっと詰まってこのお値段!!（注：値段はついてません）過去編学園編、あわせた『Skills Cross』の裏側、ハイドでアウト、リバーサイドなこの話、どうぞ!!

く久しぶりの学校。く（前書き）

この話は『Skills Cross Cross』の続編となっております!!
『Skills Cross』を読んでからこちらを読むと本気で
理解できると思います。

というか、こっちだけ読んでも多分理解できないと思うのでー、
気になった人はGO! ですよ!!

く久しぶりの学校。く

ゴールデンウィーク明けの5月8日(月)。

学校に向かうと、校門に驚くべき人が立っていた。

「ほらー、袖口のボタンはちゃんと締めるよ」

そこには体育教師の桜島が何食わぬ顔で立っていた。

「!? “痛”^{ペイン}!?」

紅と俺は身構える。

「そう身構えるな。もう俺は戦ったりする気は無い。後もう俺はただの桜島だ。“創造主”の潜入任務でしてた仕事だがな、結構気に入ってるんだよ。それに、この校長はかなり気さくな男だな。OKはすぐに出た」

「でもよ。警察とかからはどうしてるんだ？ アンタがやったことは償うべきだ」

「言わせてもらうけどよ、人殺しはしてないし後遺症も残すようなことはしてない。気絶とかはすぐに直るし、酷くても1ヶ月くらいは怪我だけだぜ？」

「いや、そういうことじゃなくてな……」

「奉仕しろ。簡単に言うならボランティアだな。今回のごたごたを回収しろ、とか。この校長が自分からはたらきかけてくれたらしい。焰先生が警察のトップってのもでかかったけどよ」

本当にいいんだろうか？

一応悪の組織の幹部だったわけなんだが……。

「ねえ、あなたなら知ってるはずよ。“創造主”はどこに行ったの

「？」

紅が桜島に聞いた。

「ん？ ああ、お前らを飛ばした瞬間移動者がいただろ？ アイツの才能で俺を含む大体の幹部をビルから出した後、“月”の飛行機でちよつとヨーロッパにな」

「ヨーロッパ？」「“月”の飛行機？」

そんな簡単に飛行機なんて出ていないだろう。

それに“創造主”は左腕が切られているような怪我だった。

おいそれと普通の乗客に混ざっては飛行機に乗れないはずだが。

「あー、その“月”っていうのが普通に貴族ってやつらしい。だからプライベートジェットも用意できたんだろ？ それでも、準備にはかなり手間取ってしばらくここには居たんだがな」

「「貴族!?!」」

今時貴族なんているのか!?

「そこで驚くなよ。城持つてるってくらいだ」

「「城!?!」」

そこでもう一回驚いた。

「おいおい、ここでそんな騒ぐな。ほら、他の生徒が寄ってきちまつただろ」

桜島にそういわれ周りを見渡すと、生徒がこちらを見ていたりしていた。

「しょうがないわね。でもいい？ まだあなたを信用したわけじゃないから」

「あー勝手に疑つといてくれ」

紅の捨て台詞を軽く受け流して、桜島は他の生徒の指導に当たり

でした。

そして、約一週間ぶりとなる2 - A。
その教室に入ると

「お前らすごいな!!」

「一体何したの？」

「何があつたんだっちゃん？」

「くそっ!! 叶先生が悪のテロ組織と戦つてたつて言うのに、俺は何てぞまだ!!」

「落ち着けて樹野。お前は実は患者だった桜島先生が叶先生にとどめを刺そうとするときに身を挺して守つてたろ？」

「そうそう、その速報ニュース。実はあれは桜島先生の弟さんだったんだつて」

『な、なんだつてー!!』

「で、桜島先生と入れ替えさせられてて、本物の桜島先生のほうは部屋で閉じ込められてたらしいよ？」

「へえ。あの生きる最強みたいな先生も閉じ込められるなんてあるんだな」

赤井と紅が入ると、すぐにクラスメートが取り囲んだ。

途中までは質問攻めなのかな? と思つてたけど。

よく話が脱線するクラスだなここは。

もし質問攻めされたらまずかった。

守秘義務でまだ事件のことは何も喋れないのだ。

「赤井、今の話聞いた？」

「ああ。成程な。校長の話がうまいんだろうが、こんな嘘本当にはれないものなんだろうか？」

桜島の処分については、どうやら偽者だった、ということにした

らしい。

勝手に話した人垣を抜けて、席に向かった。

「おー、赤井と紅、ラヴラヴ登校じゃん？」

「うらやましー」

すると、席に向かうとよっと手を挙げてくる男と、席に座ってトロンとした目線を送る二人の男子が。

「染山、これは違うって

」

「否定はよくないじゃん」

「あのね十島君、私達はそういう関係じゃ

」

「いいんだよー、別にー」

二人は染山と十島だった。

「で、こんなことはともかくじゃん。質問攻めされなくてよかったじゃん」

「そうだな。こんなクラスで助かった」

「僕達もー、そうだったー」

「やっぱり？」

そうして四人で話していると、後ろからまた話しかけてくる声が。

「お前ら、元気してたか？」

「久しぶり……、ですネ……」

藤崎と天音だった。

「ったくよお、手前は事情聴取が楽でよかったじゃん!!」

「ありがとうございー」

「素直に感謝してんじゃねえじゃん!!」

染山がこんなに怒るのにも訳がある。

藤崎に関しては“創造主”達のいたビルに行っていなかった。だから、事情聴取も短く終わったのだ。

確かに染山からしたら警察から同じ賞状をもらっているだけに怒るかもしれないが、藤崎からすればその怒りは困ったものである。

「まー、落ち着こー、紫瀬」

十島がどーどー、と落ち着けていた。

そうしてようやく平和的な学園生活がスタートしたのだった。

く桜の強さの秘密。く (1) (前書き)

では、今回からあの桜の秘密を!!

という訳で、どうぞー!!

く桜の強さの秘密。く (1)

「では、SHRを始めちゃいます ん？ 篠崎さんはどうしたんですか？」

2・Aでは、SHRを始めていた。ショートホームルーム

富士叶はクラスを見渡すと、空席があるのに気がついた。そこは篠崎の席だった。

「篠崎は気分が悪いとかで休みみたいですよ」
紅は事情を知っていたようで、説明した。

「そうですか……。大変ですね」
叶先生はそこまで言うのと、たわいもない話を終了させた。

「篠崎さんはあの事件の途中からずっと気分が悪そうでしたね。大丈夫でしょうか」
休み時間、相馬が紅に聞いた。

「じゃあ、今日お見舞いにも行きましょうか？」
紅は相馬にそう提案した、はずだった。

「心配だな、俺も行くこう」

「じゃ、俺も行くじゃん」

「紫瀬が行くならー、行くー」

その話に赤井と染山と十島が急に乗っかってきた。

「うわっ！ びっくりするわね。急に話に入ってこないでよ……」
横槍のような声に紅は少し驚いていた。

「別に楽しいものではないと思いますが……。というか、こんな大人数でいいのでしょうか？」

「まあ、大丈夫じゃないかしら」

紅は一応OKを出した。

そして昼休み。

赤井、紅、染山、十島、藤崎、天音、相馬が集まって食堂で食べていた。

「毎回思っけど、染山君はよく食べるよね……」

紅が観ているのは染山の弁当。

それは重箱のような大きさを三段あった

れ重箱じゃん！！

ってこ

「ん？　すごい腹減るんでな」

「多分ー、紫瀬の才能のせいー」

染山の才能“体温自在”カロリーコントロールはその名の通りカロリーを消費するのだ。

その才能の影響も大きいのもかもしれない。

「うらやましい才能ね……」

「何か言ったか、紅？」

「何でもないわよ」

紅が何かをボソツと呟いた気がするが、教えてくれなかった。

「ところで紅さん、質問があるじゃん」

染山が弁当をがつつがと食べながら紅に質問してきた。

「どうしてお兄さん、桜さんはあんなに強いじゃん？」

「確かに……」

ここの男子の声が一つになった。

桜さんはなんとというか、チートみたいな。
ありえない強さだよ、あれ。

「なんでって言われたら、私のおじいちゃんが関係してるのかな…」

紅は昔を思い出すように説明を始めた。

く桜の強さの秘密。く (2)

「おじいちゃん？」

「ええ。時雨^{ときなめ}おじいちゃん」

「その人が、どうかしたのか？」

「おじいちゃんがお兄ちゃんに武術を叩き込んだのよ」

あの桜さんにも師と呼べる人がいた？

「待つじゃん！」

「ん？ どうかしたの？」

と、話が核心に入る前に染山が止めた。

「紅で、時雨^{ときなめ}って言ったじゃん？ 時間の時に、雨で

「ええ」

「嘘^{うそ}たる！？」

染山がとても驚いていた。

「どうしてそんなに驚いているんだ？」

赤井が聞く。

「だって昔、世界最強とまで言わしめた人だぞ！！」
『？』

全員が頭に？を浮かべた。

いや、ひとりは思い出したような顔をする。

「そつえば……」

相馬はその姿が頭に浮かんでいるようだ。

「そつだ相馬！！ 柔道空手合気道から剣道槍術等の日本の武術か

ら、カンフーに太極拳、ソバットにフェンシング、パラクールや古武術等の移動法ですら極めたと呼ばれる生ける伝説と呼ばれていた男じゃん!!」

「えええええええええ!!」

そんな凄い人なのか？

紅と相馬を除いた全員が声を上げて驚く。

「その割にはそこまで有名じゃないようなー。だって知ってたのも紫瀬と相馬君だけだったしー」

そうだ。

そこまで強い人なのに何故？

「だって、昔はやったチープな都市伝説だもん」

染山はこともなげに言う。

「はあ!?!」

今度は染山に食って掛かるような勢いで詰めた。

「お前、そんなことをよく堂々と言えたもんだ……」
ちよつと呆れかえる。

「そうは言ってもよ、名前と漢字がまったく一緒だったじゃんよ？
とはいえ、こんな都市伝説のタイプも珍しかったから、覚えてたじゃん。人を無意味に怖がらせるようなものじゃなくて、ただそう人がいるって話だったじゃん。ま、済まなかったじゃん。さ、話を進めてくれ」

悪かった、と両手を合わせて謝る染山。

「へえ、都市伝説になんかあったんだ、おじいちゃん」
「ん？」

今、なんか話が傾いたような……。

「その話本当だよ?」

『なああ!?!』

これには全員が驚いた。

「マジで?」

「ええ。じゃなけりやお兄ちゃんみたいな強さを手に入れられないでしょ?」

「嘘だろ……、そんなマンガみたいな人が……」

全員がぼかんとしていた。

「じゃあ、ようやく本題に入れそうだね。それで、おじいちゃんが自分の経験から編み出した、あらゆる武術の良いところ取りをした複合の型、『戦法：千』サウザンドタクティクスつてのがあるんだよ」

「へえ……」

ちよつとさっきの驚きから開放された。

「で、おじいちゃんは早くからお兄ちゃんの才能に気がついていて、小学生の頃から戦法：千を教えたの」

「桜さんの才能?」

「そう。お兄ちゃんは普通の人とは違う骨格、筋肉、血管、五感をして、それでなおかつ尋常じゃない努力をする、そういうところをおじいちゃんは見抜いていたの。つまり特殊な力はないけど、人間としては最上位の固体って感じの説明なのかな? 進化形とも言うのかも。元々おじいちゃんは”此の型は普通の人間には出来ない”って言うって、自分の代で終わらせる予定だったもんな」

やっぱり、桜さんは普通の人とは違う存在だったってことか。

「それに、おじいちゃんは“お前に此の戦法：千をやる。サウザンドタクティクスだから、これを完結させてくれ”って言ったんだ。そして、お兄ちゃんは完

結させたの」

「完結？」

「皆の前でも見せていたはずよ。戦法・千からさらに簡略、複合、消去、作成をした、歩法、攻法、防法、剣法、拳法、槍法、銃法、そして戦法。締めて108の『天法』」

「縮地、とか言ってた？」

「そうそれ。とにかく、おじいちゃんが関係してるの」

そんな話が裏側にあつたのか……。

全員（なんだかんだで桜の強さを見ていない藤崎を除く）がへえと言った。

そのとき、昼休み終了を告げる予鈴がなつた。

く桜の強さの秘密。く (2) (後書き)

なんだかんだでこの話、1く2話で終わるような話が連立する気がします。

「篠崎にお見舞いへ。」

「桜さんにそんな裏話があったとはな」

放課後、篠崎の家にお見舞いに行くということで赤井、紅、染山、十島、相馬が集まっていた。

「本当ー、都市伝説みたいなー、強さだもんねー。本当に都市伝説みたいなー、おじいさんがいたつてのもー、あつたんだー」

「そうだ、都市伝説といえば新しいのがあるじゃん」

染山がまた言い出した。

「お前そついうの好きだな」

「そついうなじゃん。最近この辺で、化物が出てるらしいじゃん？」

「なんで俺達に聞いた……」

「とにかく、出てるんじゃない。そいつは夜現れて、眼光を赤く光らせて人間とは思えない速度で人に襲い掛かろうとするんじゃないよ」

「それ都市伝説なのか？ ただの殺人鬼的なやつとか、重犯罪者とか」

「だーから、“都市”の伝説みたいな話、都市伝説じゃん」
「ダジャレかよ。」

「人を襲ってるならニュースに出るはずですが」
「今まで静かだった相馬が聞く。」

「それがな、人を襲おうとして目の前くらいまで近づくとさうだけど、ぎりぎりのところで逃げるそつじゃん」

「信憑性の低そつな話ですね。実質的な被害は出ていないそつですし」

「でもよ、実質その赤き目の化物はよく目撃されたりしてるとそつじゃん」

「そのでの噂は尾ひれ背びれがつき物よ。本当は赤い光を反射した目を見た人が化物と思っただけとか、そんな感じでね」

紅が都市伝説をばっさり切る。

「うー、まあ俺もそこまで信じてるわけじゃないけど、結構信憑性高いものだったんじゃない？」

む、とふくれる染山。

「分かった分かった。じゃあぼちぼち、篠崎の家に行こうぜ」

赤井が話を切り上げて、篠崎の家に向かうことになった。

「篠崎、みんなで来たわよ」

紅がみんなを連れて、篠崎の寮の扉の前に着いた。

そしてインターホンを鳴らす。

「紅？ 別にこなくて良いって……」

インターホンの向こうからは小さな声で篠崎の声がした。

「みんなが来たといって言ったから。篠崎、どうしたの？ 大丈夫？ かなり調子悪そうだけど」

「うつん……。いや、そうね……。みんなに……。うつるから……」

その声はかなり弱々しかった。

「感染系の病気、なのですか？」

相馬も尋ねる。

「え、いや、そういうわけじゃ……。とにかく、日が照っているうちに、帰って！」

ちいさな声ながら、その声は拒絶していた。

「しょうがないですね。ここまで言われては。ここは帰りましょう。篠崎さん、申し訳ありませんでした」

相馬は一礼すると、みんなを引き連れ帰っていった。

「あ、メール」

みんなと帰っている間、紅の携帯にメールが届いた。

「今日はゴメン。相馬くんが悪いわけじゃないから。私は明日も休むと思う」

と、簡略なメールだった。

「しかし、篠崎さんの声と態度が少しおかしかったですね
メールを見た相馬が、改めて不思議に思う。

「お前の女に対する勘ってやつじゃん？」
「かも、しれませんが……。とにかく、何か隠しているような感覚がしました」

相馬は自分の見解を述べる。

「よく分からなかったなー、僕らにはー」
十島は感心したようにいう。

「ま、考えすぎってこともあるんじゃないか？」
確かに怪しい感じではあったが、そこまで心配することだろうか。

「そうかもしれないんですが、少し胸騒ぎがするんです。そうですね、もう一度戻って話を聞いてみます」

相馬はそういうと走って篠崎の家に戻っていった。

「戻る程かな？」

「ま、アイツだからなー」

「しょうがないじゃん」

赤井の質問に染山と十島が答えた。

「相馬って、いったい何なんだ？」

「彼は、女子の間でもちよっとした人気だったりするんだよ」
「紅が相馬について語る。」

「普通に優しくして少し物静かで口調が面白い、ってところがね」

「へえ、そうなのか」

相馬ってそんな風に思われてんだな。

「そして、アイツの女に対する勘は異常に当たるじゃん」

染山がその説明に加える。

「何か、あるかもしれないじゃん」

くお見舞いへもう一度行く相馬。く

「篠崎さん、大丈夫でしょうか……」

相馬は走って、篠崎のいる寮まで戻っていた。すっかり辺りも暗くなってきた。

考えながら、走っていると篠崎の寮の前まで着いた。その時だった。

何かが寮の二階のある一室から飛んで道に落ちた。つまり、相馬の目の前に。

「……」

それは人の形をしていた。そして常人なら二階とは言えしばらく動けないはずなのに、すぐに立ち上がってこちらを振り返ってきた。

暗くて顔はよく見えないが、注目すべきところがあった。目と歯である。

その目は本来人間で言うところの白目が赤く、黒目は緑、その奥の瞳孔には深緑が控えていた。

歯は犬歯が人とは思えないレベルで伸びていて、キラリと一瞬何かの光を反射した。

「どうやら、後で染山に謝らなければなりませんかね……」
今日聞いた都市伝説を思い出しながら、冷や汗を流していた。

とはいえ、逃げ出すほどではないが。

「すみませんが、私に何か御用ですかね」
一応言葉を掛けてみる。

「……」
だが、その人影は答えない。

ドンツといきなり音が聞こえた。
すると、一瞬で間合いを詰められる。
そのまま拳が腹へと迫る

、
が。

その拳はあたるぎりぎりで止められた。

「おや、本当に都市伝説通り……」
本格的に染山に謝らなければならなくなった。

「そ……うま……？」
その時、赤い目がこちらを向いた気がした。

人影はそのまま後ろへ飛び去り、走って闇夜に消えていった。

「今の声、篠崎さんでしたよね……。それに篠崎さんの部屋から飛び出して来ましたし」

相馬は、あの人影が篠崎のような気がしてならなかった。

「確証はありませんが、少し動いてみますか」

次の日、5月9日（火）の昼休み。

「染山、昨日の都市伝説で他に詳しく分かっていることはありません

んか？」

相馬は染山に詰め寄っていた。

「珍しいじゃん、一番こういう眉唾な話に首突っ込まなさそうなの
に」

「少し気になっただけです。とにかく話してくれませんか？」

「確か、吸血鬼伝説とも言われ始めてるんじゃない」

「吸血鬼？」

また話が混迷しているが、あの姿を見れば頷けるかもしれない。

「そう、吸血鬼じゃん。目が赤くて犬歯がとても発達してるらしい
じゃん。ここまでくると、もう俺としても興味はないじゃん」

「どうしてですか？」

「だって吸血鬼じゃん？ 怪しすぎるとは思うじゃんよ？ 人為的
臭くもあるから、もうあんまり深く知るつもりは無いじゃん」

「そういわず、他に情報はありますか？」

「とはいっても、襲うぎりぎりでやめるってのは変わってないじゃ
ん。他の情報っていえば……。あ、そういえば！！」

染山が急に思い出したようだ。

「その吸血鬼ってのは女らしいじゃん！！」

「そうですか……」

「はあ……、と息をつくとき相馬はありがとうございましたと言って
歩いていった。

「相馬、どうしたんじゃない？」

吸血鬼、ですか。

あの姿、様子を見るとあの腐れ野郎のことを思い出しますね。

相馬はあの“5・01事件”のことを思い出していた。

「バード
“鳥”……」

自ら吸血鬼と名乗り、篠崎に襲い掛かった。

「まさか!?!」

相馬は何かに閃き、図書館へ走っていった。

く相馬は篠崎に対して積極的。く（前書き）

しばらく文字数が少なくなると思いますが、ごりよーしょーください。

く相馬は篠崎に対して積極的。く

5月9日（火）、昼休みの間之崎学園第二図書館。

間之崎学園は第一から第三まで三つの図書館がある。
その中の第二図書館に相馬は居た。

「やはり、そうですか」

相馬は一冊の本を読んでいた。

タイトルは『吸血鬼伝説』というものだった。

「皆さん忘れているのでしょうか、いや、知らないのでしょうか。
吸血鬼に血を吸われた者は、吸血鬼に成るといふ事を」

放課後。

「今日是用事がありますので、お先に失礼させてもらいます」
相馬は放課後になると急いで教室から出て行った。

「あんなに急いでどこ行くんだらうな？」

「さあ。わかんないじゃん」

篠崎の部屋。

「どうして、こんなことに……」
ビッチリとカーテンが閉められた仄暗い部屋ほのくびにひとり、篠崎が座
っていた。

テーブルの上にあった鏡を見て、溜息をつく。

「こんにちわ。篠崎さん」

その時、部屋の中いきなり男が入ってきた。

「そ、相馬！？ どうしてここに!?!」

篠崎は飛び起きてベッドの中にもぐりこんだ。

「確かに何のアポも取らず入ったことは謝りましょう。ですが、正攻法では話してくれそうには無かったので、すこし荒業を使わせてもらいました」

相馬の才能、“オールパス通行許可証”はどんなものでもすり抜けられる。もちろん、鍵の掛かった扉も。

「だからって、入ることは無いでしょう!?!」

「ですから、女性に対してこのような手を使わざるを得なかったということとは謝ります」

相馬はそう言って、正座をし両手を地面につけ腰を深々と下ろした。

額が地面についている。

いわゆる土下座の構えであった。

「ちょ、ちょっと!?! そこまでしなくても良いんだって!?!」
思わずベッドから篠崎が出てきて相馬を止める。

「そうですね。では、本題に入らせていただいてもよろしいですか?」

相馬は篠崎の目を見てそう言った。

く相馬は篠崎に対して積極的。く（後書き）

でも、いきなり部屋に友達が居るって超怖いですよ。

こうやって特に話を荒立てることなく出来るのは相馬の力なのか、それとも篠崎の包容力なのか……。

〜積極的に語る相馬、秘密を知る篠崎。〜（前書き）

更新が遅れました。

ごめんなさい。

今回、セリフが非常に多いですっ!!

「積極的に語る相馬、秘密を知る篠崎。」

「やはり、篠崎さんは吸血鬼になってしまったという考えでよろしいでしょうか？」

「……、ええ。そうなるわね。あのへんてこな怪物と同じ目をしてる、から」

悲しそうな顔をして篠崎が答える。

「失礼、少しデリカシーに欠けましたね。では、やはりあの“鳥”^{バード}とかいう男に血を吸われた時でしょうか」

「多分。そのときからずっと、気分が悪いつていうか、体中の血が熱くなってる気がして……」

「そうですね。しかし、気づけなかったのは私のミスです。申し訳ありません」

「しょうがないよ。こんなことになるなんて、私も思ってなかったから」

「ですが、女性がここまで苦しむような事態に気づけなかったというのは、本当に、申し訳なく思います。どう謝ればいいのか……」

相馬は齒軋り^{こぼは}していた。

自分が情けなく感じていたのだろう。

「そういえば、どうして相馬はそんなに女の子に優しいの？」

よく考えれば、当然だった。

「そう大層な理由ではありませんよ。私は、一人の女性を泣かせました」

相馬は、思い出すように淡々と語りだした。

「その人は、初めて私が好きになった人だったんですけどね。笑え

る話じゃありませんか」

「その人は、私がそのことに謝る前に、交通事故で死んでしまいました」

「え……!？」

そんな暗い話があったなんて……。

「その時からですね。私がこんな口調になり、ほとんど恐怖を抱けなくなり、そして全ての女性に優しく接するようになったのは」

ハハツと自嘲的に相馬は笑った。

「ごめんなさい、こんな話させちゃって……」

「別に構いませんよ。私が勝手に話したことです。ですが、こんな話をしたのは篠崎さんが初めてですね」

「で、でも……」

「いいんです。こんな話をしてないで、状況を整理しましょう。夜、私を襲ったのは篠崎さんで間違いはないんですね」

「……、ごめん」

「それも気にしてないですよ。実質的な被害は出ていませんし。あれは……」

「夜は血が滾^{たぎ}るって言うのか、吸血鬼化するの。話も通用しない化物にね。吸血衝動^{たぎ}ってやつなのかしら……」

「血は、まだ吸っていないんですね」

「ええ。ぎりぎりで衝動を止めてるの。でも、だんだんこの衝動が強^{たぎ}く、長くなってる」

「そうですね……。その衝動が出てから何日ですか？」

「今日が9日なら、もう五日になる」

「おかしいですね」

「おかしい？」

「もう正気が無くなっておかしくなってもしょうがないのに、まだ

篠崎さんは私を前にしても目が出ていれば正気を保っている」

「そ、そうなの……?」

「ええ。調べた中では、ですが。どうやら、吸われた血の量が少なかつたようですね。本来吸血鬼というのは、人間から血液を吸った後はその人間が吸血鬼化しないように一撃で殺すようです。ですが、その前に私達が“鳥”を倒してしまった。ですから、こんなことになっている。ですがもちろん、篠崎さんに死んでもらおうだなんて物騒なことは考えていません。策が、無いわけじゃないんです」

そして、相馬は少し笑った。

く篠崎は恥ずかしげに家事能力をアピール。く(前書き)

題のまんまです。

「篠崎は恥ずかしげに家事能力をアピール。」

「策、あるの!？」

篠崎はベッドから飛び起きて答えた。

「ええ。簡単な話です。あの“鳥”という男を思い出してみてください。あの男は、完璧にその吸血鬼の力をコントロールしていません。じゃないでしょうか？」

「あ……」

言われてみればそうだった。

私達と一応会話は成立していたし、暴走という感じでは無かった。

「ですからあの男に話を聞いてきます」

「どうやって!？」

確か“鳥”は、唯一“統一された幸福な世界”の大幹部で、都市警察が捕まえられたうちの一人の筈だ。

そんな人間に会いにいけるものなのだろうか？

「それには少し時間が掛かります。ですが篠崎さんは急を要しそうですので、策その2を使わせてもらいましょう」

相馬はそういって、ガサゴソと自分が持ってきていたバックをあげる。

「これです」

相馬がバックから取り出したのは、手錠だった。

「それって……」

「ええ。あの“統一された幸福な世界”と、都市警察が使っている

才能を封じる手錠です。これが吸血鬼にも効く事は“鳥”で実行済み。ですから、しばらくの間はこれを片腕につけていければいいんですよ」

篠崎に手錠を手渡す。

「どうして相馬が？」

「あの事件のときに“鳥”から二、三個もらっておいたんです」
バックから更にもう一つ手錠を見せた相馬。

「鍵はこれです」

ホイッと鍵を放り投げた。

「あ、ありがとう……」

早速篠崎は右手に手錠を掛けた。

「とはいっても、これは一時的なものです。それをつけていると、篠崎さんの本来の才能“重力遮断”グラビティ・シールドまで消えてしまいますから。だからこそ、“鳥”に会いに行くわけですが」

相馬はそこまで言うのと立ち上がり、もう暗くなってきたので、といて篠崎の家を出ようとした。

「ま、待って!!」

帰ろうとしていた相馬の腕を、篠崎が掴んだ。

「どうしたのですか？」

「い、いや、その……」

篠崎が顔を赤らめてもじもじとしている。

「大丈夫ですか？ まだ具合が優れないとか……」

「べ、別に大丈夫、大丈夫だから!! そ、その、もう暗いから、」

晩御飯、食べていかない？」

篠崎は顔を背けて上目遣いに相馬を見た。

「……、そんな表情を見て帰るなんて男は男じゃないと私は思いま
すね。迷惑ではないなら、いただきますしよう」

相馬はさつきまで自分が座っていたところに腰かけた。

「そ、そう！！ ならそこに座ってて！！ 作ってくるから！！」
多少慌てた様子で、篠崎がキッチンと思しきところおほに走って
いた。

篠崎さんの手料理ですか、どんなものなんでしょうか。

「篠崎さん、今日は何を作るんですか？」

「肉じゃがを作ろうと思うの！！」
キッチンのほうから声がする。

肉じゃがとは、結構定番ではありますが。

こういつのに顕著に家庭の味が出るといふものです。

「そうですね、肉じゃが作れるんですね。将来いいお嫁さんになれ
るんじゃないでしょうか？」

「も、もう、馬鹿言ってるの！！」

おや、怒らせてしまったでしょうか。

まったく自分のナチュラルジゴロトークに気がついていない相馬
であった。

くアピールされた相馬は感動を心の内に思う。く（前書き）

タイトルの意味は読めば分かります。

くアピールされた相馬は感動を心の内に思う。く

「はい、肉じゃがとご飯と味噌汁」

相馬の待っていた机に三つが置かれた。

どれもホカホカと湯気を立て、見るからにおいしそうだった。

「では、いただきます」

相馬は料理を前に手を合わせて、篠崎に向かって言った。

「ど、どうぞ……」

篠崎が緊張した面持ちで言う。

まずは味噌汁を飲もう。

相馬は味噌汁に手をつけてみた。

うむ。

味噌のまったりとした味と昆布のいいだしが出ている。

「うまい」

つい口から漏れるほどの出来だった。

「本当!？」

「ええ。女性には嘘をつきませんが、多分、ですが。」

「そう!! 良かった!! さあ、他のも食べて食べて」

では、本命の肉じゃがをいただきますでしょうか。
器に入った肉じゃがのジャガイモを箸で取る。

酒と砂糖としょうゆとみりんのバランスが絶妙……。
口に入れたときのジャガイモのホクホク感……。

次に肉に箸をのばす。

上手く煮られていて、口の中でとろけるような……。

これほどまでおいしい肉じゃがが果たしてこの世に存在していたのだろうか。

「凄い。感激した」

「そ、そんな……。そこまで褒めること無いってー」

「いや、本当に、これは……」

正直、高校生で出せる味のレベルじゃなかった。

それこそ、高級料亭のような。

「凄いですよ！ 篠崎さん！」

珍しく興奮した相馬は篠崎の両手を取った。

「あ、ありがとう」

篠崎の顔は真っ赤になっていた。

その後。

「おいしい晩御飯をありがとうございました。私もこれから頑張るので、しばらく待っていてください」

そう言うと相馬は篠崎の寮を出て行った。

5月10日（水）、間之崎学園。

「みんな、久しぶり」

『篠崎！！』

篠崎の挨拶に、染山、十島、天音、藤崎、紅が声を揃えた。ずっと休んでいた篠崎が学校に顔を出していた

「篠崎、大丈夫だったの！？」

最初に聞いたのは紅だった。

「ええ。あんな態度とっちゃってゴメンね」

篠崎は親身に対応してくれた紅に対して冷たい反応しか出来なかった。ので、申し訳なさそうな顔をしていた。

「良いのよ別に。いろいろあつたんでしょ」

紅は別に良いよ、と手を振った。

「どうでもいい話だけど、その手錠は何じゃん？」

次に聞いたのは染山だった。

「どうして、片手だけにつけてるんじゃない？ 女子の流行ってやつじゃん？」

そう、篠崎の右手にだけ手錠がついていた。

「ああ、これは……」

どうやって説明したら良いんだろうか。

流石に吸血鬼になるのを抑えてるの、とは言えないし。

「そ、そうなのよ！！ りゅ、流行ってやつなの、そうなのー！！」
とりあえず染山の話に乗っておくことにした。

「でも、篠崎が来たと思ったら相馬が休みなんだよねー」
十島がぼそつと呟いた。

「まるで入れ替わりみたいじゃないあー」
染山も合わせる。

今日は相馬が学校を休んでいたのだ。

「え、相馬君休みなんだ」

篠崎も少し驚いた。

何とかするって言ってたけど、学校休むほどなんて……。

篠崎は相馬に対してまた少し申し訳なくなった。

一体相馬は何をしているんだろう。

くアピールされた相馬は感動を心の内に思う。く（後書き）

事細かに料理の説明をするのは難しいです。

危つく料理マンガならぬ料理小説となるところでしたけど。

く思うところが無いわけじゃない。く

少し時間を遡って相馬が篠崎の寮を出た後。

相馬はバックから自分の青い携帯電話を取り出していた。そしてあるところに電話をかける。

「もしもし、焰さんでしょうか？」

相馬が掛けている電話の相手は、都市警察総長でもある焰炎作であった。

「その口調は相馬か？ どうした、何か問題でもあったのか？」

焰は“5・01事件”の関係者でもある相馬たちに電話番号を教え、必要なときには掛けて来いと言っていたのだ。

「ええ。焰さんたち警察が捕まえている“鳥”の、面会をさせてもらいたいのです」

「それは、かなり厳しい相談だな。どうした、何かあったのか？」電話の向こうの声は厳しいものだった。

それもそう、“鳥”は事件の超重要参考人になっているからだ。

「何かあったといえは、ありました。個人のプライバシーに関わりますので言えませんが」

篠崎のことは伏せた。

勝手にべらべらと話して欲しくないだろう。

「そうか、しかしな……」

「これは、“鳥”しか解決できない問題なんです。対話をするだけ

です。お願いできませんか」

相馬は切羽詰るような声で焔に迫った。

「……、しょうがない。一応努力はしてみる、期待はするなよ。明日の朝連絡する」

「ありがとうございます」

焔も相馬の必死さが伝わったようで、相談はしてくれることになった。

5月10日（水）。

朝起きて朝食を食べている途中に、相馬の携帯がなった。

「はいもしもし、相馬です」

「結果が出たぞ」

その電話の相手は焔だった。

「焔さんですか。で、結果はどうなったんですか？」

「今日、午前十時から十時半までなら時間を作れた。どうする？」

「どうやら焔は時間を作ることが出来たようだ。」

「もちろん行きましょう。学校の一日程度ならすぐに取り戻せますが、これは一度限りのチャンスですから」

相馬はその後待ち合わせ時間と場所を聞き、すぐに学校へ風邪を引いたと仮病を使った。

すぐに着替え、準備を済ませると外に出た。

「ふう、早かったな」

待ち合わせ場所には思ったより早く着き、焔を待つような形となった。

待ち合わせ場所は警察署の前であり、学生がサボっているように見えて（ほぼ実際にサボってはいる）少し気まずい。

目の前では少なめではあるが色々な人が交差点をわたっている。

少し、思い出しますね。

“相馬なんてもう知らない！！”

“待ってって！！俺の口の悪さは知ってるだろ！！今のはそういう意味じゃないんだ！！”

“じゃあ、どういう意味なのよ！！”

“それは”

「待たせたかな」

相馬は昔のことを思い出していて気がつかなかったが、もう焰が来ていた。

「いいえ、少しですから大丈夫です」

「そうか。まったく、お前のせいで昨日は大変だったんだ。ちゃんと身のある話をしてこいよ？」

「ええ。出来ればそれを望みます」

二人はそのまま警察署の中に入っていった。

く思うところが無いわけじゃない。く（後書き）

土日くらいには頑張ってたたくさん投降したいと思います！。

間違えた、投稿だ。

く　ない扉の向こう側での話し合い。く　（前書き）

意外と長くなりそうですね！。

く　ない扉の向こう側での話し合い。く

警察署内に入った二人は、通路をどんどん奥へと進んでいった。

「警察署にいるんですか？　刑務所や拘置所じゃなく」
相馬が当然のことを聞いた。

「聞くことが多すぎてな。面倒なんで俺が直々に出向いて話を聞いているんだ。それにもしもあの男が暴走でもしたら、甚大な被害が出かねん」

そう焔はこともなげに答えると、通路が行き止まった。

「おや？　この先は無いように思えますが」
目の前には壁。

「あるんだよ、実はな」

焔はおもむろにポケットから何かのカードを取り出すと、それを壁の右端に走っていた小さな溝に通らせた。

カードで何かを読み取らせるように。

すると、何の予備動作も無くいきなり壁が上に動き出した。

その向こうには階段が続いている。

「からくり屋敷のようですね、警察署は」
「心配するな、ここだけだ」

その奥にある階段を降りていくと、独房のようなものが見えてきた。

「お待ちかねの、“鳥”^{カード}とやらだぞ。俺は30分したらもう一度ここに戻ってくるからな。言っておくが、俺は何も見えていないし、“

鳥”の様子をたまたま見に来ただけだ」

そんな三文芝居をし、焰はここから出て行った。

「まったく、面白いやつやなあ。法に縛られすぎっちゅうか。なあ、そう思わんか？」

意外なことに、向こうから話しかけてきた。

「元気そうだな、“鳥”」

実際“鳥”は手錠をされてはいるものの、笑顔でこちらへと振り返っていた。

「やっぱり兄ちゃんはいと話すときだけ口調が変わるんやなあ。まあええけど。それより、わざわざここにきた理由はなんじゃ？」

「分かっているくせに。御託ごたくを並べるな」
相馬の目が鋭くなる。

「おーおー、怖いのお。ま、さしずめわいがちよびつと血を飲ませてもらったお嬢ちゃんのことじゃろ？ どうなったんじゃ？」

“鳥”はからかうような口調をやめない。

「その通りだ。お前、知っていたな？」

「そりゃそうさ。何年吸血鬼やってきたと思つとる」
カツカツカと快活に笑う。

「まったく、お主があそこで止めんかったらあの少女は吸血鬼になんか成らんかったんじゃぞ？」

「それは、お前が篠崎さんを殺すって意味だろ」

その言葉を聞いて“鳥”は「ほお」と感嘆の声を漏らす。

「なんじゃ、知つとつたんかい」

「それくらい、調べてきた」

「なら話が早いんじゃないのか？ もうその篠崎って子は限界だろ？ もう実質的な被害でも出てきたか？」

「何とか、止めた」

「驚きだ。吸血鬼の膂力じりょくは相当のもんなんだが。なら、どうしてわしのところへ？」

「今の解決方法じゃ駄目だ。お前の、その吸血鬼をコントロールする方法を聞きに来たんだ。お前は今だって平然と俺と話をしているじゃないか」

「まあ、無いわけじゃないがかなりきついとは思っぜ？ 実質的な被害を出してないって事は、まったく吸血鬼になってから血を飲んでないってことだろ？ 相当にやばいはずだがな」

「お前がしているものと同じ手錠を掛けている。だが、いつまでも手錠のままとはいけないだろう」

「納得だな。それなら解決方法に文句があるのも頷ける。教えてやるわ」

気前の良い発言だった。

「また、随分と簡単に教えてくれるんだな」

「お前は個人的に気に入ったんだよ。吸血鬼に寿命はほとんど無いに等しいのは知ってるだろ？ わいもこう見えてかなり歳はいつとる。で、長年生きているとな、顔を見ただけでそいつがどれくらいの業を背負って生きているのかわかるんだよ。お前さんは、そういう点で面白い」

「人のことを知ったように語るな」

「別にお前の過去なんて知る由も無いけどな。しかしお前が普段級友に見せているその表情、その口調は、偽物いつはりだろ？」

“鳥”の瞳の奥がキラリと光る。

「それが意識的なのか無意識的なのかは分からない。だが、一体何

があつて、どれくらいお前が捻じ曲がつちまったのか、多少興味はあるし、それにお前自体が面白い」

「人のことを分かった風に言つな」

その相馬の口調は怒りに満ちていた。

だが“鳥”はそんな視線を意にかいせず続ける。

「お前みたいな奴といえば、最近だと“創造主”だな。まったく、アイツも何をあんなに生き急いでるのか。他にも何かありそうな奴はいたが、お前みたいな特異体は“創造主”を除いて居なかつたよ」
「……今話すのはそんなことじゃ無いだろう。さつさと話せ、時間が無いんだ。解決法を、さつさと話せ」

「だから生き急ぐなつて。とはいえ、ぼちぼち話すか。じゃあお前も急いでるようだし、とりあえず結論だけ簡単に言つとくぞ」

“鳥”はそこで少しだけ間を置いた。

「人間をもう辞める事だ」

く　ない扉の向こう側での話し合い。く　（後書き）

何か相馬君大活躍のような……。

く話し合いの末、結論が出た。く

「人間を、辞めろだと……。おとなしく吸血鬼になれって事か!？」
相馬は目の前の鉄格子に両手をかけ食って掛かる。

「落ち着け。時間が無いから結論だけ簡単に言うゆーたやろ」
まあまあ、と相馬をなだめる“鳥”。

「正直言つてその篠崎っちゅー彼女から吸血鬼の部分をとるなんて事はもう不可能なんや」

「それは、ある程度は想像していたが……。やはりか」

「だが、理性を失わないようにする、人間としての意識を持たし続けることは出来ない話じゃない。ほら、わいがそうじゃ。結構な荒療治となるけどな」

「勿体つけなくていい。それは、どんな方法なんだ」

「ああ。拳で分からせる」

ぐつと手錠が掛けられている両手を握って前に突き出してきた。

「それ、本気で言ってるのか？」

「大マジだ。本来方法は三つある。一つは長年吸血鬼でいることで身体のほうを慣れさせる。これはお前が時間が無いって言ったから却下だろ。二つ目は大量の血を与えて吸血鬼の性質を満足させる。

これも、非人道的なことをしたくないだろうから却下。そして三つ目、吸血化した女の子を倒す。これには色々の意味があつてな。

吸血化している最中に意識が戻ればいいわけだ。だから、一度吸血鬼を倒して意識の戻るチャンスを与えてやるわけだ。それである程度操れるようになる。選択肢は三択に見えて一つだろうが」

「お前は、どの方法だったんだ？」

「わいも三番目や。あれは、どれくらい昔のことだったかね……。」

ちなみに同じ風に“創造主”にも殴られたんじゃけどな。それが仲間に入るきつかけになつたわけやけど。いや、今はそんなことどうでも良い。あ、言つとくけど夜に倒さなければならぬぞ？ 昼間にその手錠を外して開放させちまつたら日焼けで死んじまうからな」

「本当に、そんな方法で……」
相馬は嫌そうな顔をした。

このことは他の誰にも話せない。

だから、この倒すという方法を自分の手で行わなければならないのだ。

もちろん、他の者にも元からさせる気なんか無いけれど。

「お前さんにも、その篠崎つて彼女にもかなりきつい判断じゃろうけどな。じゃが、これしかないぞ？ 幸いわいが血をちよびつとしか飲んどらんから、吸血鬼の性質もかなり制限されるじゃろ。吸血衝動も、頑張ればほとんど消せるじゃろうし。さしづめ、半吸血鬼ハイフアンパイアじゃな。だからこそ、この作戦はかなり成功率は高いと思うぞ？」

「分かった。努力してみよう」

「せいぜい気いつけときや。制限されるとはいえ、相手どつとるのは人外の化物、吸血鬼つちゅーことを忘れるな」

「人外の化物は余計だ、糞野郎」

相馬が吐き捨てるようにそういった直後、上から焰が降りてきた。約束の30分がもう経っていた。

「そうじゃ」

最後に“鳥”と、ある程度会話してこの場を去った。

「やれやれじゃな。まあ、自分が蒔いた種とはいえ。若いのにあの少年、随分な業を抱えて……」

相馬がいなくなった独房で、“鳥”は呟いていた。

「本当に面白い少年じゃわい。もしかしたらいい友人になれるかな。応援しとるわい！！」

“鳥”の顔は、捕らえられているものとは思えないほどの笑顔だった。

相馬は警察署からすぐに出、行動を開始した。

く出たとこ勝負。く

「ん？」

間之崎学園での昼休み。

篠崎の携帯に、相馬からメールが届いた。

『今日六時、寮の前で待つ』
と、一文だけ書かれていた。

果たし状みたい、と篠崎が思ったのは伏せておこう。

「まだ4時半だけれど？ 一体いつから待っていてくれたの？」

「大丈夫、今来たところというやつですよ」

放課後飛び出すように篠崎は帰り、急いで寮まで戻ると相馬がすでに待っていた。

相馬の手にはスーパーの袋が握られていた。

「解決法が、見つかったって事なの？」

「ええ、一応」

相馬が珍しく言葉尻を濁す。

「どんな方法なの？」

「これは、解決法とはいえないかも知れません……。それに、私が今から予定していることについても、謝らなければなりません。予定より早いです、話しましょう。とりあえず中に入りませんか」
相馬の顔は少し沈んでいる。

篠崎はその顔を見て不安になるが、相馬なら大丈夫と信じて寮の

鍵を取り出し、中に入る。

そして、二人は向かい合って電気もつけずにリビングで向かい合った。

「これは根本的な解決は出来ないということ念頭に置いて、話を聞いていただけますでしょうか」

相馬は篠崎の目を見て、話し始めた。

「まず、篠崎さんの吸血鬼性はおそらく完璧には取り除けません」
「……そう」

あらかじめ分かっていたかのような反応だった。

そんな虫の良すぎる話は無いだらうと。

「ですが、無差別に人を襲うというような行動はなくすることが出来るかもしれない方法があります」

「どんな？」

「篠崎さんには苦痛がもしれません。篠崎さんが吸血鬼化してもらった上で、私とその状態の篠崎さんを倒すというものです」

「……」

「もちろん、私としても貴女の身体に出来るだけ傷はつけないですし、それ以前に女性を殴るというのが、私自身として許せた行為ではありません」

「……」

「嫌というのなら無理にするつもりはありません。それはそれで他の方法を考えますから」

「いや、いい。その方法で大丈夫」

覚悟を持った目で相馬を見る。

篠崎は相馬に会ったときから気づいていた。

相馬の目が少し赤くなっていたことに。
その目の下にはうつすらと青いくまが出来ていたことに。

「そうですか。分かりました。それならば私も男をきめましょう。女性を殴りたくないという気持ちは今だけ置いておくことにして、死力を尽くしたいと思います。ですが、」

相馬はそこで言葉を区切った。

「貴女に拳を向けることに対して、先に謝っておこうと思います」
そして、相馬は篠崎に対して二度目の土下座を行った。

「ちよ、ちよまー！！ 良いつて良いつて！！ 私だってそれくらい別に許すから！！」

やはり篠崎が慌てる結果となった。

「では、こんな怪異譚簡潔に完結させましょう。まずは準備が必要ですね」

「準備？」

篠崎はキョトンとしていた。

7：04、寮前。

「いいですか、篠崎さん。吸血鬼化したら身体を乗っ取られると思いますが、そこから頑張つて意識を奪い返してください。吸血鬼を自分の才能だスキルと思つて、使いこなすイメージだと完璧です」
「わ、わかった」

寮前では、相馬が篠崎の両肩を掴んで目を見て話していた。

「私が今から攻撃を貴女に加え、あまつさえ作戦のためとはいえ肌に傷を負わせてしまい本当に申し訳ないと思っています」

「それは言わない約束だつてば。それに、どっちも直るんだから大丈夫よ」

見ると、篠崎額には赤い線が入っており、そこから少し血が垂れだしている。

何かで切った様だ。

「貴女は半吸血鬼ハイファンバイアだそうですから、操るのはそう難しい話じゃないだろうとあの男は言っていました。大丈夫です。自分を信じてください」

「うん。でも、ちょっと相馬近いよ……」

篠崎は顔を赤らめてもじもじとする。

「っと。それは申し訳ありませんでした。では、戦闘開始と行きましょうか」

相馬は篠崎から離れ、地面に書かれてある赤い線のところ立ち、内ポケットから厚くて黒いレザーの手袋を両手にはめた。

その相馬が立った場所の両脇には水が8分目くらいまで入ったよ
くある500mlのペットボトルが蓋ふたを閉められて規則正しく3×
3で並んでいた。

両方あわせて18本。

相馬の前には発泡スチロールの箱が置いてあった。

そして何故か相馬体中からは少し白い煙が出ていた。

「位置も場所も天候も出来上がりました。おそらく大丈夫でしょう。私が吸血鬼の意識を弱めますから、その先は貴女の戦いです。準備はいいですか？」

「もちろん。この程度で負けるような女じゃないわ。じゃあ、行く

わよー!!」

篠崎は右手に掛けていた手錠に鍵を差し込み、ガチリと音が鳴るまで回した。

ポトリと、手錠が腕から落ちた。

く勝負にならないほどの戦術。く(前書き)

タイトルの意味は読めば分かると思っています！。

く勝負にならないほどの戦術。く

「くっ、う、あああああつあああああ！！！」
篠崎が一瞬頭を抑えたかと思うと、急に天に向かって吼^ほえた。
人間とは思えないような。

そして、上を向いていた顔がゆっくりと相馬のほうを向く。
その目は、赤く煌々（こうこう）と光っていた。

「どうやら、変わったようですね」
相馬は落ち着いた声でそう言った。
見ると、篠崎の額に入っていた赤い一本線がぐじゅぐじゅと溶けるようにして直っていく。
そして、額から垂れてきていた血をぺろりと舐めた。

「では、向こうが動く前にさっさと決めさせてもらいましょう。もう私に、ためらいはありませんよ」
決意した目で相馬は目の前の吸血鬼を睨むと、迅速に、かつ正確に行動を開始した。

まず横に置いてあったペットボトルの一本取り急いで開け、蓋を上弾いて飛ばし、その間にポケットから白い固形状で煙の出ているものを四個ほど入れ、ちょうど降りてきた蓋をきっちり閉めた。

そして一回だけ大きく振ると、投げつけた。

だがそれは吸血鬼ではなく、そのすぐ真下の地面に叩きつけるように飛んだ。

ガンと地面に当たると、ペットボトルは弾きかえって吸血鬼のほうに飛び

ドオン！！

吸血鬼がそれを見ると同時に、その弾きかえったペットボトルが爆裂した。

「最近の高校生は、怖いんですよ！！」
相馬は置いてあったペットボトルを両手に持ち、それぞれ片手で蓋を開ける。

そして、またもポケットから取り出した白く固形状のものを何個か入れると、大きく振って投げつけた。

ドオンドオン！！ と、投げつけたペットボトルがまたも炸裂する。

流石の吸血鬼も顔を覆っている。

「手作りペットボトル爆弾ですよ。ちょっとした化学の応用です」
「ぐ、ぐおおおお！！」

ドオン、ドオンとどんどん吸血鬼にそのペットボトル爆弾が炸裂する。

「あなたに言っても分からないかもしれませんが、一応色々な方の

ために解説しておきましょう」
メタ発言も気にせず続ける。

「これは水を入れたペットボトルにドライアイスを入れているんです。ドライアイスは溶けて昇華するときには体積を750倍に増やします。最終的にはペットボトルが中の圧力に耐え切れず爆発するという仕組みです」

相馬は足で前に置いてあった発泡スチロールの蓋を開ける。
そこにも大量のドライアイスが詰め込まれていた。

「吸血鬼というのは筋力増強、つまり攻撃力だけでなく防御力もそれなりにアップするそうじゃないですか。ですから、私の拳よりはダメージがあるほうを選ばせてもらいました」

発泡スチロールからもドライアイスを取り出し、入れたペットボトルを投げつける。

「出たとこ勝負なわけが無いでしょう。伝説を相手にしているのですから」

結局ペットボトル二つを残して全て投げきってしまった。

「本来、これくらいの攻撃なら再生して戻れるはずでしょうね。本来なら」

そういう相馬の向こうでは、傷が修復しているものその速度は格段に遅かった。

「事前の策です。篠崎さんには先ほどにんにく料理を食べてもらった後、私あげた十字架のネックレスを掛けてもらったんです」

吸血鬼はにんにくと十字架に弱い。

これも有名な話である。

「そうじゃ」

相馬が“鳥”のところを訪れたとき、最後に“鳥”がこんなことを言っていた。

「吸血鬼ってのは意外と今まで伝承されているものが効くもんでな。太陽ほどじゃないが、にんにくや十字架ってのは、何故か俺達の基礎的な能力を落とす。だから、先に用意しておいたほうがいいかもしれないな」

「まさか本当に効くとは思いませんでしたが、どうやらちゃんと効いているようで満足です。さて、篠崎さん」

目の前の吸血鬼に向かって話しかける。

「後は、あなたの番ですよ」

く勝負にならないほどの戦術。く（後書き）

じゃん!!

前回のタイトル全否定!!

そーですよ、策も無く戦うより、他にも方法はあるって事です!!

く戦術も最後は時の運と意思。く（前書き）

今回で篠崎編は終了!!

意外と長くなりましたねー。

「戦術も最後は時の運と意思。」

気がつくとは私は真つ暗な闇の中で赤い糸のようなものがんじがらめにされていた。

何故だか、自分の姿だけはしっかりと分かった。

何か、大切なことを忘れていている気がする。

ぼんやりとした夢心地の中で篠崎はそんなことを考えていた。

不意に、その赤い糸の様な物が液体に変化した。

血、だろうか。

本来なら気色悪いと思うはずなのだが、服についても何も感じなかった。

外から声が聞こえる。

何だろう。

急にその声の聞こえる方向から光が差してきた。

光に向かってとりあえず走る。

その時、前にいきなり何かが現れた。

「……私？」

その姿は篠崎と同じ姿形をしていた。

だけれど、ほんの少しだけ違う点があった。

「これは、吸血鬼の私……、なんだ」

その目の前に現れた篠崎のほうは目が赤く光っていた。

「そっだ、私、吸血鬼から取り戻そうとしてたんだ」

篠崎は全てをここで思い出した。

「私は、私」

「あなたも、私ってことね」

吸血鬼の篠崎の言葉に、篠崎も合わせる。

「切り離そうと、思わないで」

「分かってる。でも、人を無差別に襲うのは駄目だから」

二人の篠崎はそこで手を合わせた。

すると、吸血鬼の方の篠崎はどこかに消えてしまった。

「相馬には、迷惑かけたわね」

篠崎は走って、さっきから光っていたほうまで走り出した。

変化が起きたのは、相馬がペットボトル爆弾を投げ終わってから数分が経った頃だった。

それまで吸血鬼はまったく動きを見せず、フリーズしたように固まっていた。

相馬はその状態の篠崎にひたすら声を掛け続けていた。

「ふう……。これだけ呼んでも反応も無しですか。ちょっときびしい戦いになりそうですね」

かがみこんで残しておいたペットボトルを両手に持った時、一瞬、吸血鬼が動いた。

「第二ラウンドですか？」

相馬がペットボトルにドライアイスを詰め込んでふたを閉めようとしたとき、吸血鬼が妙な動きを見せえた。

微笑み。

今まで見せてきたような無表情、もしくは崩れたような笑いではなく、慈愛に満ち溢れているような。

「もう、大丈夫」

相馬に語りかける。

「篠崎さん、戻ったんですね」

すでに吸血鬼は、篠崎へと戻っていた。

「どうやら、上手く操れるようにはなつたみたい。凄いわね、夜なのに何故か向こうまでちゃんと見える」

篠崎は自分の身体に起きている変化に素直に感心しているようだった。

「一安心ですよ……」

相馬も持っていたペットボトルを下に置く。

「ありがとう、本当に私なんかのために、ありがとう……!」
篠崎は急に泣き出した。

「ど、どうしたんですか？」

その変化具合には相馬も着いていけず、困ったような顔をする。

「誰にも、相談出来なかった……！！ 紅にも！ でも、相馬のお
かげで……！！」

泣きながら、相馬の胸に飛びついた。

「とりあえず、嬉し泣きと取って良いんでしょうかね」

篠崎は相馬の胸でいつまでも泣き続けた。

5月11日（水）、間之崎学園。

「おはよう、皆」

「おはようございます。皆さん」

その日、篠崎と相馬は一緒に登校した。

「お、ようやくメンバー的に全員揃ったわけか。長かったな」
赤井がやれやれと呟く。

「ところで、篠崎さんは右手首の手錠はどうしたんじゃない？ 流行
は？」

染山は痛いところをついてきた。

「え、えーっと……」

篠崎も少し困る。

「あれは料理に邪魔ですから除けたんですよ。篠崎さん」

「そ、そんなのー!!」

相馬が助け舟を出したおかげでぎりぎりすり抜けることが出来た。

「お前ら二人はのうのうと休めていいよなー。こっちはもうすぐ中間テストなんだよおお!!」

藤崎が悲痛な叫びを急に上げた。

そう、もうすぐ僕らは中間テスト。

く戦術も最後は時の運と意思。く（後書き）

今回のタイトルつけるのには本当に苦労しました！。

しりとりって難しい。

最後のほうのタイトルは結構荒れてますしね。

次からは魔の中間テスト編！！

くテストとはこつも簡単に友の仲まで引き裂いてしまふ。く(前書き)

今回からは魔の中間テスト編!!

思いがたぎりそつですねー。

くテストとはこつも簡単に友の仲まで引き裂いてしまう。く

5月12日(木)

昨日から、テスト期間に入ってしまった。

この時期には部活動も停止となり、いよいよテストに向けた体制がとられるようになって来る。

中間テスト。

テストと名のつくものは人々に争いと絶望しか招かないと言っても過言ではないだろう。

「過言だよ」

バスッ、と教材で藤崎は頭を殴られた。

「つて、阿蘇先生!？」

後ろから現れたのは次の授業の数学の阿蘇貴則先生あそ たかのりだった。

「どうして、俺の心の声が!？」

「俺は読心系の才能者だと前に言ったはずだが。さっさと座れ。授業を始めるぞ」

そのまま阿蘇先生は教卓へと上った。

「赤井、染山、お前達次のテストに自信は？」

「あるわけないだろ……。さっきの数学だってほとんど分からないぜ?」

「フツ、愚問じゃん」

どんよりとした赤井を尻目に、染山はキラリとこちらに笑顔を向けた。

「おいおい、何が愚問なんだよ」

「よく考えてみるじゃん。たとえテストで赤点を取ってしまったても、俺達には追試がある。追試のほう範囲は狭くなるし、見たことのある問題だって出るじゃん。それに、もしも就職が出来ない事態になっても、俺達には才能があるじゃん!!」

『そつだな!!』

三人は拳を合わせる。

「馬鹿ね」

「馬鹿だねー」

「……藤崎、がっかりだよ……」

「あまりこのような言葉は使いたくは無いのですが、無知であり無智であり無恥といわせていただきましょう」

周りの篠崎、十島、天音、相馬の四人は冷やかな目で赤井達を見る。

「いいか、あんな奴らほつとけ。あいつらは頭の良いことをひけらかそうとしてるだけなんだ」

俺達は肩を組む。

『この程度で俺達の結束が乱れたりはしない!!』

三人が同時に言う。

とはいえ口癖までは直せなかったようで、じゃん、と最後に聞こえた。

「これはいつもいつものことだけど、今回は赤井君もそっちに行くんだねー」

十島はへえ、といったような感じだった。

「俺は普通の高校生なんだよ！　こんな進学校でまともに追いつけるかー！！」

「そーじゃんそーじゃん！！　それに俺達には実技もあるじゃん！！」

「……そうなのか？」

それは初耳だ。

「うん、いろいろあるじゃんよ？　とはいえ、赤井の才能が活用さ

れそうなのは無さそうじゃんけど」

「オーマイガッ！！」

意味ないじゃん！！

「……藤崎、真面目に勉強しよ？」

「いくらお前の頼みでもそれは無理だ」

いつの間にか藤崎がいなくなっていると思いきや、向こうで天音に詰め寄られていた。

「……意地悪」

「こればかりは無理だ。諦めるんだな」

「……そっちがその気なら……、こっちも意地でも勉強させる……」
「な、何言って……って天音電気は反則じゃばびゃばばばー！！」

何も見なかったことにしよう。

「紫瀬ー、がっかりしたよー」

「お前だって毎回のことだから知ってるじゃん。俺は、頭が、悪い、じゃん」

「努力でー、順位はある程度まで上げられるー」

染山も染山で押し切られそうになっていた。

「残るは赤井君、君だけね。ほら、紅からもなんか言っちゃってやって篠崎に促され、前に出てくる紅。」

一体どんなことで攻めてくるんだろうか。

「篠崎」

「何？」

「私、思うんだ。このまま、あなた達みたいな天才グループにいいのかなって」

急に紅が語りだした。

「どうしたの？ 紅」

「私は、やっぱり」

紅は思いつめた顔でこっちに走り寄ってきた。

そして、篠崎のほうを振り返る。

「こっち側につくことにするわ！ー！」

紅が、味方になった。

くテストという巨悪に丸となって立ち向かう。く（前書き）

この章はひたすらに馬鹿馬鹿しい話で終わりそうな気がしますー。

くテストという巨悪に一丸となって立ち向かう。く

「紅っ!!」

篠崎が紅を引きとめようとするが、その手は虚空を切る。

「私は、こっちのほうがお似合いなのよ!!」
悲痛な面持ちで叫ぶ。

その様子には、ほとんどの人が振り返る。

「まさか、紅さんまでそちらに行くとは……」
「紅、俺達はお前を応援するぜ!!」
両極端な声が方々から響く。

このクラスは、ある意味で二分されている。

天才と、馬鹿で。

「ときどき私はこのクラス全員が馬鹿なんじゃないかと思うんですが」

「つい俺もノリで言っただとはいえ、ここまでなのはそう無いぞ?」
相馬と赤井はいつの間にか端のほうで話をしていた。

目の前では喧騒が繰り広げられている。

「私は、実はこの“都市”に最初からいるわけではないのですよ」
「そうなのか。通りでイカしてるんじゃないかってくらいのノリが無いわけだ」

「ええ、私がここにきたのは中学からですから」

相馬がそこまで言うと、目を細めた。

何か思い出してるのだろうか。

「ですが、ここの空気は好きですよ。何より活気に溢れていて、私もある程度心を戻して、自立をすることが出来ました」

「そりゃ、どういう意味だ？」

「ああ……、気にしないでください。昔のことですから。それより、」

そこで相馬は無理やり話を変えた。

「テストのことならご相談ください。微力ながら、協力できることは協力して差し上げましょう」

「あ、ああ。そうさせてもらえると助かる」

何か昔にあったのだろうか。

本当にこの男はミステリアスだな、と赤井は思った。

その後。

馬鹿騒ぎやらなんやらを終えたこのクラスも数日経つと流石にテストがやばいのか、とところどころで勉強を教えてもらっている姿が見えた。

「紫瀬ー、ここは右辺をこう展開してさっきの式を代入するんだよー。ほらー」

「お、おおおおー!! ーいつ、できるじゃん!!」

「褒め言葉として受け取っとくねー」
染山は十島に。

「だから……、ここは先行詞がthe boyだから関係詞はwhoになるんだよ……」

「じゃあこのthe reasonって先行詞は？」

「それは理由を聞いているから……、whyが関係詞がはいるの……」
藤崎は天音に。

「いい？ ここの『傍線部？は何故か説明しなさい』ってのは、この傍線部の前を見るの。ここに、『李徴の自嘲癖を思い出しながら聞いていた』ってあるじゃない」

「あ、本当だ！！ 秀才は伊達じゃないね！！」

紅は篠崎に。

「同素体というのは、SCOPで覚えるんです。Sはホウ素。Cは炭素。Oは酸素。Pはリンです」

「成程なあ。残念ながららさっぱり覚えてなかったぜ。じゃあ、同位体ってのは何なんだ？」

「それは原子核の中性子数が同じ原子同士なのに違うものをさします」

「やっぱりお前は頭良いな」

赤井は相馬に、それぞれ教えてもらっていた。

そして、テスト一日目。

「今日は中間テストの一日目です！！ 皆さん、がんばってくださいね」

叶先生がクラスのみんなを応援する。

「頑張ります!!」

その言葉にすぐに返したのはたしか樹野という男子だった気がする。

叶先生大好きな。

「これが終われば間之崎スポーツカーニバルが控えています。良い気持ちで迎えられるよう、手を抜かず精一杯成果を残してくださいね。では、皆さんのラストパートの邪魔をしたくは無いですぐ帰ります。では、号令を」

その言葉に日直が答え、起立、気をつけ、礼で朝のショートホームルームは終わった。

ここからが、戦いだ。

くテストという巨悪に一丸となって立ち向かう。く（後書き）

テストはやっぱり嫌ですね。

くテストとは人をおかしくする幻術の一種である。く(前書き)

今回はバカとテストと召喚獣のパロっぽいところが入っています。

ではではー。

「テストとは人をおかしくする幻術の一種である。」

「うおおおおお！！ テストだあああ！！！」

このクラスの特徴その一。

テスト前に無駄にテンションが上がる。

「も、もう駄目だ……」

このクラスの特徴その二。

テスト前に地獄にでも行ってきたような顔をしている奴がいる。

「主よ……。我を助けたまへ……」

「観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時……」

このクラスの特徴その三。

テスト前に色々な宗教の色々な祈りの言葉が聞こえてくる。

今回の中間テストは五日間に分けられて行われる。

基本正午くらいに帰ることができるが、何より教科が多い。

テストが二つある（英法と英解のような）ものも含めると、11教科もある。

三年から文理で分かれるのが原因だろうが、流石進学校である。

初日、一時間目は化学だった。

『次の分子式の名称を答えなさい。Na₂CO₃』

赤井の答え。

「炭酸ナトリウム」

コメント。以下省略。

「正解です。CO₃が炭酸であることさえ知っていれば簡単ですね」

藤崎の答え。

「炭酸な」

「どうして炭酸まで分かってナトリウムが分からないんですか？」

染山の答え。

「エヌエーツーシーオースリー」

「読み仮名ではありません」

二時間目、現代文。

『次のカタカナを漢字に直しなさい。フリヨクの大きい船を設計する』

染山の答え。

「浮力」

「正解ですね。特に言うことも無いでしょう。」

赤井の答え。

「腐力」

「どうなんでしょうかね。生ごみの力でも使うんでしょうか、それとも別の力を使うんでしょうか」

藤崎の答え。

「風慮玖」

「よくその字が書けました」

三時間目、世界史。

『古代中国の戦国時代を統一した国名を答えなさい』

赤井の答え。

「秦」

「秦の始皇帝という言葉はかなり有名ですからね、正解して欲しいものでした」

染山の答え。

「心」

「心の通ったいい国だったんでしょね」

藤崎の答え。

「真」

「ラスボスでしょうか。それともパワーアップしたのでしょうか」

そうして今日のテストは終了した。

「って藤崎やばくないか!!」

「いつものことだから心配するな……」

藤崎は放心状態になっていた。

「あんなに勉強……、教えたのに……。二人つきり……。個人レッスンは必要……」

「ぶっ!!!」

天音の親切からの発言に、藤崎は飛び起きた。

「おいおい、どうしたんだよ」

「い、いやいやいやいや、天音、そういう発言はどうかと……」

「だってそうでしょ?」

さっきから藤崎がやけに慌てている。

何があったのだろうか。

「とにかく……、今日もみっちり教えるからね……」

テスト二日目、三日目もこの調子で過ぎていった。

だが、明らかにみんなの体力の低下が見て取れた。
藤崎に至っては煙が出てるし。

「俺達は一体何と戦ってるって言うんじゃない!」

注：テストです。

「やっつてられるかああ!」

「うおおお!」

明らかに同類と思えるような奴らはテンションがおかしくなっている。

そんなクラス中がおかしくなつたまま、テスト最終日を迎えた。

「藤崎いいい!」

藤崎はもうすでに生きているのか死んでいるのか分からないような顔をしていた。

「お前の仇はかならずとるじゃん!」

「これが最後の戦じゃあ! 者共、準備はいいか!」

『うおおお!』

もうテンションは深夜のノリだった。

そうして、テストは終結を迎えた。

「は、あははははははははは！ 終わった、終わったのだよ！！」
藤崎は急に生氣を取り戻したように復活した。

「遊ぶぞおおおお！！」
『おおおお！！』

「皆さん、遂にテンションがおかしくなりましたね」
相馬は傍観している。

「まったく、紅ですらあの様子よ」
篠崎が指差した先には、右手を天高く上げて喜ぶ紅の姿があった。

「カラオケに、行くじゃん」
「発散するぜ！！」
「ひあついごー！！」
梁山、藤崎、赤井がいつものグループでカラオケに行こうと誘ってきた。

「せめてもの常識人だと思っていた赤井君ですらあのざまですか。
いやはや、テストとは恐ろしいものです」
「でもー、カラオケは楽しみー」
「久しぶりね、行きましようか」
「もちろん私も行くわ！！」
「ちゃんと、歌えるかな……」
全員の同意も得て、カラオケに行くこととなった。

くテストとは人をおかしくする幻術の一種である。く(後書き)

テストとは恐ろしいものですよね。

本当に嫌で嫌で。

くテストは終わり、間之スポの準備は始まり、赤井は発見する。く

「まさか天音の得意なジャンルがゴシック系だとわな」

「う……、悪い……？」

「それ言うなら赤井君は普通じゃん」

「染山はラップ調っぽいつーか、いかにも若者が好きそうって感じだったよな」

「お前若者じゃないじゃん？」

「しかし、篠崎さんは意外にアニソンに詳しいのですね」

「まったく、私も知らない曲ばっかだったわよ」

「そんなことより、カラオケで百点たたき出すような相馬のほうがどうかしてるわよ」

カラオケに行った後、みんなすつきりとした表情で帰っていった。

「あ、そうだ。聞きそびれてたんだけどさ」

そして寮に帰っている途中、赤井が紅に聞いた。

「何？」

「“間之スポ”って一体何なんだ？」

テスト初日にそんなことを富士先生がいつていた気がする。

「あー、簡単に言うなら運動会みたいなもんよ」

「そうか。ありがとうな」

どうやらあの口ぶりだと一学期に運動会があるらしい。

そのままある程度会話した後、お互いの部屋に戻った。

5月24日（火）

間之崎学園に行ってみると、校舎を見上げるようにして人だけが出来ていた。

「一体何があつたんだ？」

「訪れたようね。この時期が」

紅は何か知っているようだ。

「一体何の時期なんだよ」

「昨日話したじゃない。“間之スポ”よ。そうね。色分けが決定されている頃かしら」

紅も人だかりに近づいていった。

「おいおい、待てつて。もっと説明してくれよ！」

慌てて赤井も追いかける。

校舎には垂れ幕のようなものが掛かっていて、1 - B、2 - A、3 - Aと書かれているほうに紅と、1 - A、2 - B、3 - Bと抱えてあるほうに白と書かれていた。

「もしかして、運動会の色分けか？」

みると、やった！！ 今年はあの生ける伝説生徒会長と同じ色だ！！ のような声が聞こえてくる。

「運動会じゃないわ。“間之スポ”よ」

「だったらその“間之スポ”ってのは何なんだ！？」

「正式名称“間之崎スポーツカーニヴァル”。この学園で1、2を争うメインイベントよ」

「どおりで気の入りようが違うと思っただら……。にしても入れすぎじゃないか？ まだ競技の話ですらしてないのよ」

「え？ 他の学校もこんなじゃないの？」

いや、まだほとんど始まってないのにこの盛り上がりようはおかしいと思うんだが。

なんだか蒸し暑いような熱気を感じながら教室へ入った。

「えー、皆さん見たと思いますが、“間之スポ”の色分けが決定しました。私達の色は紅です 頑張りましょう」

『うおおおおー！！』

凄い勢いでクラスが盛り上がった。

「すみません赤井君。外からきたあなたに少し聞きたいことがあるのです」

「何だ？」

「外の世界の運動会も、こんな風ですか？」

「な訳ないだろ。ここの生徒は祭り事好きそうな感じするからな。」

そのせいだろう」

「ですね。安心しました」

どうやら相馬だけはこの空気をおかしいと分かってくれた。

何事にも常識人は必要だよ、うん。

さて、今日の四時間目は体育である。

ようやく俺もここの学校の体操服を手に入れ、体育にちゃんと参加することが出来る。

ちょっと恐ろしいが。

「さて、今日も頑張るじゃん」

「ほどほどにねー」

「まっただ。あ、トイレ行きたいんだが」

グラウンドに向かっていている途中、トイレに行きたくなった。

「確かこの辺ってあんまり使われて無いトイレが……。右行って突き当たりくらいじゃん」

「分かった。ありがとう!!」

走ってトイレに向かう。

そのままトイレのドアを開けようとしたとき声がした。

「藤崎？」

そのドアは開けようとする前に勝手に開かれた。

「って、天音？ ……天音？」

目の前にいたのは、上半身を裸にして着替えている最中の天音だった。

そして天音は何故か胸にさらしを巻いていたようで、胸の辺りに巻いていたであろう布が少し残っていた。

天音の顔が何故か真っ赤になっていく。

「きやあああああああ!!!!!!」

天音は金切り声のような悲鳴を上げると、思い切り空气中に放電した。

くテストは終わり、間之スポの準備は始まり、赤井は発見する。く（後書き）

今回からは天音編！！

まあ、読者の皆さんのほとんどは秘密くらいもっ気づいてますよね
……。

く天音と藤崎、二人の秘密？く（前書き）

最近更新が遅れ気味ですが、しばらくこんな風になると思います。

ごめんなさい。

〜天音と藤崎、二人の秘密?〜

「お、おいおい!! 一体どうしたってんだ!?!」

赤井は驚きながらも、その電撃を“スキルキャンセラー才能帰却”で消し去る。

「おい!! 何があつたんだ!!」

その騒ぎに慌ててトイレから藤崎が出てきた。

「つて、赤井!? なんでここに!?!」

藤崎は俺に気がつくのと咄嗟に天音と俺の間に割って入った。

「ふ、ふじさきい……」

天音は藤崎の後ろに隠れる。

「お前、気がついちゃったのか?」

藤崎が真剣な顔をして詰め寄る。

だが、一体俺が何に気がついたのか分からないんだが。

「……? 一体何のことだ?」

「はっ……!!」

赤井がそう答えた瞬間、藤崎の後ろで明らかにへこんだような声
がした。

「やっぱり……、私に魅力なんて無いんじゃないかー」

天音はいじけるように地面を指でつつき始めた。

「はっ、おまつ!! いやいや、天音は十分に魅力あるって!!」

赤井のほうを一瞬睨んだ後、天音の説得に入った。

「でもー、胸だって」

天音は何故か自分の胸をぺたぺたと触っている。

「と、とにかく着替える！！今は体育に行くぞ！！」

藤崎はそう押し切るとトイレに天音を押し込んだ。

「おい、いったいこりゃどういうことだ？」

今の会話は何か変だ。

まるで

「余計な詮索はするな。口外もするな。命が惜しいならな」

まるでヤクザのような目を光らせて、藤崎は普段からは想像も出
来ない声色で赤井に言った。

そのまま藤崎は運動場へ走っていく。

「えっ！？ えっ！？ 今のどういう意味！？」

赤井はその行動に驚きながら、とりあえず運動場に向かうことに
した。

そしてもやもやしたまま、体育は終了した。

終始、刺すような視線を感じていたが。

「赤井、一緒にたべよーじゃん！！」

またいつものメンバーで行こうと染山に誘われる。

「おう」

そう返事をして赤井が染山のところに集まったとき、

「余計な口を挟むなよ。俺はいつでもお前を観察しているからな」と、耳元で泣く子も黙るくらいの声色で藤崎が言ってきた。

「はははははいいいい!!」
めちゃくちゃ怖い。

「赤井ー、今のは何の返事ー？」
十島は首をかしげていた。

く天音と藤崎、二人の秘密？く（後書き）

最近謝ってばかりの気がします。

ごめんなさい。

く豹変するのは二人とも？」

「藤崎、話がある」

放課後、あのことについて藤崎に赤井は話しかけていた。

「余計な詮索はするなと言っただろ」

座っていた藤崎は、やはり鋭い目つきで返した。

「残念だが詮索させてもらっ。とりあえずだが

」

「天音は女子なんだろ？」

よく考えればおかしな点はいくらでもあったのだ。

着替えのときにいつも必ずいなかったり、たまに女子のような悲鳴を上げたりしていた。

「そこまで気づいているというのなら、俺も、口封じをしなければならぬんだがな」

藤崎はゆっくりと手元にあったプリントを持って立ち上がる。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！！別に俺は誰にも話しちゃいない！！それはお前が見張ってたから証明済みだろ！？」

今日は一日、藤崎の視線を感じて正直相当つらかった。

普段の藤崎からは想像もつかないような視線だった。

「これから、バラすとも限らない」

「そんなことするか！！ お前達が隠していたっていうなら俺は何もしないっての！！」

赤井は藤崎の圧力に吞まれながらも、大声を上げることで萎縮を防いでいた。

「それに、どうしてそんなことしてるんだよ！！ 天音が女子として生活しちやいけない理由でもあるのか！？」

「詮索はするなど、言った筈だ」

藤崎は持っていたプリントを上には振り投げようとした。

その時、

「藤崎、待って！！」

と、後ろから藤崎を止める声が聞こえてきた。

「天音……」

藤崎を止めた相手、天音は俺と藤崎の間に入ってとおせんぼのような形をして赤井を守っていた。

「勝手な推測だけど、赤井君は信じられるような気がするんだ。だから、話してもいいんじゃないかな」

珍しく、天音がはきはきと喋っている。

その声は透き通っていて、やはり女子のものだった。

「どこまで話すおつもりで？」

藤崎が天音に聞く。

心なしか、藤崎の天音に対する態度が少しおかしいような気がする。

まるでどこかのお姫様とその騎士のような。

「全部話しておいたほうが良いんじゃないかな」

「ですが……」

「いいの。じゃないと赤井君も、ずっと何で私達がこんなことをしているのか気になりっぱなしでしょ？」

天音がそういうと、こちらを振り返った。

「別に藤崎だって好きで始末しようとしてたわけじゃないし。今から話すことは、赤井君を信用して話すから。ちよつと衝撃かもしれないけど。とりあえずここは誰かに聞かれるかもしれないから、帰り道に歩きながらも話そうか」

天音は自分のかばんを取ると、赤井と藤崎両方の手をとって教室から出て行った。

く豹変するのは二人とも？（後書き）

次回に謎が明らかか！？

多分。

早めに更新します。

く Princess な天音、Knight な藤崎。く (前書き)

完結編、です!!

謎がまた一つ解けましたよ!!

〈 Princess な天音、 Knight な藤崎 〉

「さて、どこから話したらいいのかな？」

「やっぱり、女子なんだな……」

帰り道に赤井、天音、藤崎の三人で帰っていた。

「言っておくが、変な気を起こすなよ？」

やはり藤崎は普段とは思えぬ気迫と目つきそのままである。

「俺だって人の彼女取るようなまねはしないっての」

「なっ！！ 俺は別に、お嬢と彼女って訳じゃ

「（じー）」

「お嬢？」

「（じじー）」

天音は藤崎をジト目で見ている。

「と、とにかくです。お嬢、状況を早く説明しましょう」

「むー。大切なことなのに……。……、分かった。最初から話すとな
ると、やっぱり私の家系から話さなくちゃならないよね」

天音は少しむくれるも、語り始めた。

「私の家系は代々極道と呼ばれるやつでね」

「ヤーさんとか、マフィアでも思い浮かべとけ。ちなみに俺の家系
はその天音家に代々使えてきた藤崎家だ」

「マジで！？」

そんなやつがこの間之崎に！？

だから藤崎が本気で睨んだときにヤーさんレベルのような目つき
だったのか。

「私の家系は代々男が頭領としていたんだけど、私の父の代は何故か女子しか生まれなかったの」

「仕方ないから長女であるお嬢が、跡取りのために男として暮らすことを余儀なくされたって訳だ。ちなみに俺は、お嬢を守るために同年代として派遣された。才能もあつたからな」

「じゃあ、天音はそのボスの娘って訳なのか。だから、お前がお嬢って呼んでるんだな。ならよ、そんな簡単に学校に入れてくれるもんか？ 戸籍上は女子なんだから」

最近のよくある話じゃないんだから。

そう簡単にはいくまい。

「もちろん、普通の学校なら不可能。だけど、ここの学校は一風変わってるから」

「天音のお爺様、雷次郎様はこの校長間之崎龍次郎と知り合いでな。ここの校長は享楽主義というか、そういう訳ありの生徒も普通に受け入れるんだよ」

実際、赤井も無茶だと思えるような転校をしている。
十分納得できた。

「一つだけ聞くけどよ、それでいいのか？」

女子としての楽しみを楽しめないなんて、窮屈だろう。

「良いわけないだろうが」

天音の顔をちらりと見て、藤崎が言う。

「俺は、俺の本音はお嬢に女子として生活してもらいたい。だから、俺は天音の父さんに食って掛かったのさ」

「そりや凄いな」

「だがな、頭領、天音の父さんはちゃんと考えていた。ここ、都市のシステムが嚴重なのは知ってるな？」

「ああ。親族でも入るのはかなり厳しいとか何とか」

「だからこそ、そのシステムの裏をついたのさ。つまり、今天音の姿を知ることが出来るのは、俺達だけってことになる」

「それがどうしたんだよ」

「焦るな。つまり、天音の組からは天音の姿が実際には分からないんだ。頭領はその間に天音の影武者を養子に引き入れる予定らしい。少し顔が変わってたとしても、成長したでごまかせるからな」

「なるほど！！ 凄いな策だな。そうか、だから誰にもこの秘密を知られたくないのか。じゃないともしかしたらこの入れ替わりがバレるかもしれないから」

よく出来ている。

天音のお父さんも天音同様頭は良いのだろうか。

「とはいえ、間之スポみたいな行事もあるから、学生生活の間は我慢してくれとは言っていたがな」

「だから、学生が終わったら二人で生活するんだよねー」

「ぶっ！！」

どんだけラヴラヴなんだこいつらは。

さっきの口調からして幼馴染のような存在だろうし。

「い、いや！？ お嬢！？」

「その『お嬢』って呼び方も仰々しいからやだ。今まで通り天音って呼んでよ。二人つきりでもさ」

天音はそういいながら藤崎の左腕の自分の右腕を絡める。

「ま、待ってっ！ー！！」

藤崎も相当焦っている。

しかし、本当にこいつらはラヴラヴなんだな。

赤井は遠目で達観したように二人を見ていた。

く Princess な天音、Knight な藤崎。く (後書き)

恋愛っぽい？

かもしれませんね。

く間之スポの準備は激化する。く（前書き）

ようやくやりたかった間之スポ編にゆっくりと突入しました!!

ちなみに、もったくないののでちびちびと読んでいたBACCANO
! 1932-Summer man in the killle
rが読み終わりました。

まさか が××で が だとは……。 （自己規制）

「間之スポの準備は激化する。」

5月25日（水）、間之崎学園の休み時間。

「なあ相馬、一番一般人のテンションに近いお前だからこそ相談するんだがな？ “間之スポ” って一体何なんだよ」

昨日色分けが発表されてから、普段もうるさい学園が更にうるさくなっている。

というよりは、浮き足立つというか熱気というようなむずがゆい感覚が校内に溢れている。

「そうですね、運動会と祭りと激しさを熱で溶かしてかき混ぜた感じといえば分かりやすいんじゃないでしょうか。そもそも、“間之スポ” というのは“間之崎スポーツカーニヴァル” というのが正式名称なんですよ。この行事は全校、つまり幼稚園児から大学生までが全員参加する大掛かりな祭り、いや、宴うたげにも近いものなんです。だからこそ、こんな風に燃えているのかもしれませんが」

相馬は周りのテンションには流されず、今も冷静でいる。

なるほど、全校を挙げての祭りという訳か。

俺が元々通っていた学校の運動会のテンションを煮詰めたところだな。

「この“間之スポ” ではまずクラス対抗の競技と個人からの選抜があります。そして、幼、小学生のグループでの争い、私達を含む中、高校生のグループ、大学生のグループでそれぞれ分かれてしのぎを削る戦いをします。全工程は三日間という壮大な運動会なんです。」

とはいえ、最後の一日は全学年全生徒対応のスペシャルイベントがあります」

「スペシャルイベント？」

「ええ。だから実質は二日なんですけどね。このスペシャルイベントは間之スポが始まる前々日から当日くらいまで分らないようになっていきますから、対応は不可能なんです。去年は確か改良版鬼ごっこだったと思います。鬼の数が時間と共に増えて、鬼にタッチされればその人はアウトとなって鬼になるという」

「ま、お楽しみって事か。しかし、去年の話の聞くとまるで大掛かりな遊びだな」

「一体どんなイベントなんだろうか。」

「はい、皆さん座ってください」

そうこうしているうちに、担任の富士先生が教室に入ってきた。

「今日のHRはちょっと大事なことを決めなくちゃならないんですよ。間之スポの競技決めでーす！」

いつもどおりのハイテンションで富士先生は喋る。

そして今回は喋りながら黒板に色々書いていく。

綱引き、玉入れ、棒倒し、徒競走と、意外にも普通の競技が並んでいく。

だが、その下にはLEVEL2以上やLEVEL無制限などが並んでいた。

「赤井はどれにするの？」

隣の紅が聞いてきた。

「その前に、あのLEVELってのは何なんだ？」

まるでゲームみたいだ。

「あれは簡単に言うなら参加条件よ。赤井は知らないと思うけど、私達才能者には特異性^{RANK}っていうのと自在性^{LEVEL}の二つがあらかじめあるの。それは生徒証の裏に記載されているわ。ちなみに、RANKはFからSSSまで、LEVELは1から7まであるわ。」

「んー、どれどれ。あ、あった」
財布から生徒証を取り出して裏返してみると、“RANK SS
S LEVEL U”と書かれていた。

「……流石赤井ね……。RANK SSSなんて見たことが無かったわよ」

横から覗き込んでいた紅が仰天した。

「これ、そんなに凄いのか？」

「ええ。Bでもいいほうなのに、そんなもの見たことが無いわ。私はC-ね。あの生徒会長ですら“観察者”はRANK A+だったはずだわ」

「ま、確かにこんな才能は見たことが無いしな。ところで、LEVEL Uってほうは一体どういうことなんだ？ 普通数字じゃないか？」

何故かアルファベットが並んでいる。

「それは“測定不可^{unaltered}”の頭文字から来ているのよ。赤井とかの才能は鍛えようが無いものだからそういう風に書かれるの」

俺の“才能^{スキルキャンセラー}帰却”はこれ以上、上を望めない。

主人公には到底向いてないような才能だな。

上を望めないって。

「ちなみに競技の下に書かれてある才能のLEVEL以上じゃないと出れないって意味だから。赤井は“測定不可能者”だから、どこでも選べるわよ」

「そうか……。どうせどの種目も才能がありになるんだろ？」

「当たり前じゃない」

「だったら、一番迷惑の掛かりそうに無いのは個人種目でもある徒競走か、一騎死んでもある程度問題のない騎馬戦ぐらいかな」

「あ、赤井、騎馬戦に出る気……？ 凄いわね、尊敬する」

「?? 騎馬戦がなんかあるのか？」

一体今の紅の驚きはなんだったんだろう。

「おい！！ 赤井が騎馬戦出るってよ！！」

さっきの話を盗み聞きしていたのか、前にいた柳城という男子がクラス全員に言う。

「凄いな赤井！！」

「マジで!？」

「それをチヨイスするか!？」

「怖いものしらずっていうか……」

「流石英雄とまで言わしめた男!!」

この空気はやっぱり通常の騎馬戦とは違うのか？

頼むから誰か教えてくれ!!

そう思って相馬（染山や十島じゃ話にならないので）の方に助けを求めるが、ハアと深い溜息をついて首を横に振るだけだった。

何がおかしいのかと黒板を見てみると、参加基準のLEVELのところは4以上と書かれていた。

そしてその横には『この競技に限り、RANK B+以上でも構いません』とも書かれていた。

他の競技の上限がLEVEL1以上や、高くてもLEVEL3以上だというのに、その上を行っていた。

「嫌な予感しかしねえ」

とはいえ、このクラスの空気のことだ。今更変えることも出来ない判断し、もうこのさい諦めることにした。

く間之スポの準備は激化する。く（後書き）

とまあ。

読み終わると少し空しくなりますよね。

く 擬似戦争の説明と紅の異名に赤井は驚く。く

「騎馬戦は、擬似戦争と言っても過言ではありません」

HRが終わった後、相馬が俺に騎馬戦の説明をしに来てくれた。

「多分……、赤井君は外での騎馬戦を想像していたのでしょうか、
この騎馬戦は普通のものとは少し違いますよ」
「どこがどう違うんだ？」

多少のローカルルールが入るって事だろうか。

「まず、四人一組となって作る騎馬と大将と呼ばれる騎馬がありま
すのは、外の世界でも一緒ですよ」

「というかそれがルールだろ」

「ですが、この騎馬戦はそれだけにとどまりません。歩兵と呼ば
れる一人の兵士達と、指揮官と呼ばれる場を動かす役割のものがあ
り、更には本丸という本拠地まであるんですよ」

「……、そりゃ、本気で擬似ではあるが戦争じゃないのか？ 合戦
って感じの」

「ええ。戦国の戦いと呼んで差し支えありません。馬はいませんが」

というか、歩兵制度って。

普通に喧嘩と同じレベルの話じゃないか。

「ここでいう歩兵には、大将や騎馬を守る部隊や、本丸を防ぐ部隊、
遠距離から敵軍を攻撃する部隊、切り込み隊長としての部隊など、
色々な使い方が出来るんです。ですからこの戦いは、指揮官がいか
に有能であるかが勝敗の決め手になることもあります」

「あいつらが騒ぐわけだ……。こんな行事じゃ、絶対凄く燃えそう
だもんな」

「ですね。心配せずとも、私もエントリーさせてもらいましたし、紅さんや他の皆もエントリーしてくれたではありませんか」

そう、あの後紅が自分の責任だと言い出して自分から手を挙げたのだ。

その様子を見ていた相馬も、やれやれといった顔をして手を挙げてくれた。

他にもクラスの数人が手を挙げてくれた。

「でも、梁山や十島は出なかったんだな。絶対二人はこんな楽しみそうだったんだが」

「あの二人は分かっているんですよ。二人とも強い才能ではあるんですが、いかにせん使い道を発見できなかったりするんです」

梁山の才能は“カローリ・コントロール体温自在”。体温をコントロールするが、それを使うと他のみんなに被害が出るかもしれない。

十島の才能は“センス閃”。見たものに対する答えを出してくれるが、見たものには出してくれないし、正しい答えしか出さない。

例えば、この戦いで絶対に負けるといふ予言が出れば、絶対に負けてしまうのだ。

それが十島にとっては嫌だそうだ。俺だってそんなのは嫌だ。

「心配せずとも大丈夫です。おそらく今年の指揮官及び大将には、あの人が選ばれるのでありましょうから」

「あの人？」

誰のことなんだろう？

「しつかしまあ、お前もいきなり凄いとこる選ぶじゃんよ。赤井」
「驚き」

「命知らずだなあ」

「……勇者……、無謀な意味の方での……」
放課後、皆で集まって話をしていた。

「しゃーねーだろうが。俺は騎馬戦がそんな戦いだって知らなかったんだからよ」

「それもそうね」

クラスの中では間之スポに対する熱意で少し酔ったように浮かれ始めているやつらも多いのだが、篠崎は一人落ち着いていた。

「それに、なんだかんだで相馬と紅も出てるじゃん」

「紅さんともかくー、相馬には驚いたー」

「紅は種目に出すぎよ」

「えへへー」

紅は照れ隠しのように笑う。

この学校の出場制度は、『出たけりゃ体力の余す限り出てよし』
という、随分スパツとした制度である。

もちろん一人どれかに必ず出なければならぬが、上限は無い。

紅は騎馬戦のほかにも徒競走、リレー、障害物競走など、色々な種目に出場していた。

出すぎだろー！

そして走る種目多いなー！

と叫んだのは言うまでも無い。

「何せ紅さんはこの間之スポに置いてはかなりの有名人ですからね」
「そうなのか？」

「えへへー」

相馬からも褒められて（本当に褒めているかどうかは定かではないが）照れ笑いを続ける。

「ほら、紅の才能は“超跳躍”^{ホッパー}。身体能力を全体的には引き上げられないけれど、その代わり局所的にならそういう肉体強化系等の才能を軽く凌駕できるのよ。確か“赤き稻妻”とか、“紅の彗星”^{シャザク}とか呼ばれてたりするのよ？」

「そうか、だから走る科目にはめっばう強いのか。って、ネーミングセンスー!!」

「みんなして褒めないですよ」

珍しく紅の顔がふやけだした。

とうかなかなか見れたものじゃないんだが!?

「しゃきつとしなさい。しゃきつと」

そんな紅に、喝を入れる篠崎。

「どんな相手でも油断しちゃ駄目なんだから」

「は、はい」

厳しい篠崎の口調に、思わずしゅんとする紅。

だが、こういう空気はとても良いなと赤井は思った。

こんなこと考え出すから爺臭いんだろうが。

く 擬似戦争の説明と紅の異名に赤井は驚く。く (後書き)

シャアザクっていうのは言わずもなではありますが、ガンダムの
シャアという人が乗る専用機のことです。

異名は赤い彗星と呼ばれています。

「間之スポに対する姿勢にも赤井は驚く。」

5月26日（木）、間之崎学園。

「今日から“間之スポ月間”ですよ！！ 思う存分、準備に精を出してくださいね！！」

朝のHRでいきなり富士先生が訳のわからない発言を شدした。

「分からないだろうから言っておくけど、“間之スポ月間”ってのは、この日から一ヶ月間は“間之スポ”の準備が熾烈になるってこと」

「……、ま、準備が始まったって考えとけばいいのか？」

「そうね。この日から部、同好会、各種委員会、それに私達くらいの高学年だとそれ以外でも仕事回ってくることになるわよ」

「大変だな」

今から一ヶ月間はかなりここがごたごたするのか。

「後、今日は放課後に応援練習がありますから。頑張ってくださいね」

最後に今日の報告をして、朝のHRは終了した。

「今日私風紀委員の仕事でみんなと一緒に食べられないから」

「俺と十島も同好会関連で動かなくちゃならないじゃん」

「私は生徒会の仕事があるから」

「そう言い、紅、染山、十島、篠崎は昼休みに慌ててどこかへかけて行った。」

「しかし、紅が風紀委員で、篠崎さんは生徒会とわな」

残った赤井、藤崎、天音、相馬は食堂で昼ごはんを食べていた。

「それよりも、食堂も結構静かになったなあ」
藤崎がそういうのも無理は無い。

普段は人がいっぱい混雑するほどの食堂が、ほとんど行列を作っていない。

「……皆、他の場所で食べたり出来るように……、弁当とかにしてるんじゃないかな……」
「ですが、これを見ると“間之スポ”が始まるなという気になりますね」

どうやらこの時期の食堂の光景は皆にとっては当たり前らしい。

そうして昼休みは、特に何が起こるわけでもなく終わった。

問題はその日の放課後だった。

「応援練習って言っても、具体的には何するんだ？」
「そればかりは応援団長によってまちまちだから、わかんないじゃない」

俺達は応援練習のために校庭に集まっていた。見ると、他の学年の生徒も集まってきている。どうやら、紅色のチームは全員ここに集合するようだ。

集まった後は整理して座り、そのまま五分ほど経つと朝礼台のところに誰かが上った。

「今日はわざわざ放課後に呼び集めてすまなかった！！ 今から俺達紅色の状況を説明しようと思う。まずは、俺が紅色の団長だ！！」
その男は右手を天に掲げた。

『おおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！』
と、地鳴りのような歓声があたりに響く。

「やっぱり生徒会長が団長になったんだ！！」
「これは俺達の勝利が間違いないぜ！！」
という声も、辺りから聞こえてくる。

朝礼台上ったその男とは、生徒会長高原衣その人であった。

「ていうか、団長と生徒会長なんて両立できるのか？」
「あの人ならできるじゃん！！」「出来ないことは無いって！！」
素朴な疑問は熱狂的なファンによって潰された。

「というかやっぱり、ここの生徒会長の支持率が高すぎる気がする。
これがカリスマ性なんだろうか。」

「次に、俺達の応援団長を紹介したいと思う！！ さあ、上がって来い！！」
「おうよー！！」

颯爽と声を響かせて、もう一人の男が朝礼台上がってきた。

「彼の名前は
「いい。俺が言う」
高原さんが説明しようとしていると、その男はマイクを取った。

「俺の名前は^{うたばせうじゅうじゅう}宴宗十郎。まあ、見ての通り隣に立つ生徒会長とは打

って変わって無名の新人だ」

宴、と名乗った先輩はゆっくりと語る。

「だが、この“間之スポ”にかける意欲は、誰にも負けねえ」

宴先輩の目はとてもキラキラとしていた。

「手前等あ、この祭りに、いやこの宴に、命をかける覚悟はあるかあ！！！！」

『おおおおおお！！！！』

「おおおおおお？」

赤井は一人そのテンションについていけずにいた。
命かけるレベルなのかこれは？

「じゃあ手前等、今から応援の練習するぞ！！！！」

『おおおおおお！！！！』

このテンションで小一時間応援の練習をした後、ようやくこの集会は終了した。

く間之スポに対する姿勢にも赤井は驚く。く（後書き）

最近赤井君驚いてばかりですね。

異文化とのふれあいというのは得てして「ーゆーものなのです！

く競技も固まり、いよいよ間之スポが近づく。く

5月31日（火）、登校中。

今日もあるであろう間之スポの練習を考えて、ふと赤井は思った。

「なんかよお、この学校って熱いよな」

「……？ エアコン全教室完備だけど？」

「そういう意味じゃなくて、こつ、気分的に都市（こし）の生徒達は青春を謳歌してる気がするよ。俺が元々通ってた学校、お前から言うところの外の世界の学校じゃあ、ここまで燃えることは無かつたろうからな」

今時の学校なんてなかなかここまで本気で学校行事に取り組んでいるところは少ないのではないだろうか。

今までは周りのテンションに流されて驚くばかりだったが、よく考えればこつという姿が学生には一番似合っているんじゃないだろうか。

下手な進学校とかじゃあ高校入学の初めから大学試験の話とかされるそうだし。

「そんなもんなの？」

「ああ。のびのび出来ていいところだ、こつは。まったく、とかく人の世は住みにくい」

「外の世界は恐ろしいのね……」

若干一名に普通の世界に対する偏見を生みながら、間之崎学園へと着いた。

この所ずっと応援練習が続いている。

更に今日の体育からは学年対抗の競技と色別全学年合同競技も発表され、練習が入るらしい。

ちなみに、学年対抗とは同じ学年のクラス同士で戦う競技、色別全学年合同とは、クラスをひとつかたまりとして全学年（中学生と高校生は分けるが）で戦う競技である。

とはいえ、この学園はかなりの進学校（みんなのノリで忘れそうになるが）なので、クラスは各学年に二つしかないのだが。

しかし、間之スポムード一色だな。

そして時間は体育の時間へ。

どうやら俺達の学年対抗の競技は綱引き、色別全学年合同競技は棒倒しだった。

「こりゃ、今年の間之スポはかなり荒れそうじゃん」

「一体どういうことだよ」

体育が終わって昼食を食べているときに染山が話し始めた。

「色別（色別全学年合同競技の略）が棒倒しじゃん？ ってことは、騎馬戦並みの戦場になると考えて間違いなさそうじゃん」

「そうだねー」

「棒倒しは熱い競技ではあるが……、言うほどか？」

「いや、それに加えてこちらの総大将はあの生徒会長高原衣さんでしょう。だとするなら、かなり味方と敵、両方とも士気はマックスまで高まるでしょうから」

「かなり大変そうだね……」

「おいおい、味方の士気が上がるのはともかくどうして敵の士気まで上がるんだ？」

「あの人の人柄じゃん。味方はもちろん、敵からすれば、『あの高原衣を打ち落としてやる!!』っていう感じになっちゃうんじゃない」

……この学校のノリのよさを考えると、それは十分ありえるな……。

「大変そうだな」

「大変？ 何が？」

赤井が誰ともなしに呟いた言葉に染山が反応した。

「面白そうじゃん？」

心底楽しそうな笑顔で染山はそう言った。

だからこの学校は本当に外と違うんだよ。

無気力症候群が流行ってたりする外とはまるで違う文化圏だな。

赤井はそんなことを考えて

気がつけば、間之崎スポーツカーニヴァルは明日に控えていた。

〜競技も固まり、いよいよ間之スポが近づく。〜（後書き）

という訳で次は一気に時間が飛んで間之スポ会場準備へと移ります
！！

「間之スポの準備の最中、気になること。」

6月23日（木）、間之崎学園。

「こっちの資材は向こうに頼むわ」

「りょーかい」

「さっさとやらねーと宴に間に合わねーぜ!」

明日は間之スポ、そして今日は一日間之スポの準備をする日だ。そ
うだ。

「本当に今日は大変だ……っ」と

「ぐだぐだ言っても始まんないじゃん。さっさとそれは向こうに
運ぶじゃん」

「そーだよー。きびきびしよー」

もちろん赤井達も例外ではなく、仕事をさせられていた。

「お前達、ちゃんと仕事してるか？」

「あれ、会長さん？」

染山と十島と一緒に道具を運んでいるときに、生徒会長の高原先輩と出くわした。

「高原さん!」

「どうも」

「おーおー。お前らはいつも通り元気だな」
染山と十島は元気に挨拶を交わす。

「あれ? どうして会長さんがここに？」

だが不思議に思うことがあった。

確かこの時間帯は会長は最終の打ち合わせがあつたとか……。

「ほら、俺の才能だよ。ドッベルゲンガー “もう一人の自分”」

「それで抜け出してきたんですか……」

高原先輩の才能、ドッベルゲンガー “もう一人の自分”。

これは自分と寸分たがわない人間を作り出すことが出来る才能だ。どうやら聞いたところによると、意識も共有しているらしい。

それを考えると普通の人間ならおかしくなってもおかしくないんじゃないかと思う。

普通の人の二倍を同時に考えることになるんだから。キャパシティの違いだろうか。

「ところで、会長は今何をやっているんですか？」
「気になります」

染山と十島の二人は口調がきちんと戻っている。

「俺はただの視察さ。オブザーバー “オブザーバー 観察眼” だけじゃなくてやっぱり、じかの目でも見たいからね」

生徒会長のもう一つの才能。オブザーバー “オブザーバー 観察眼”。

広範囲を視点を変えてみる事が出来る才能。

これも脳のキャパシティ的に相当大変だと思っただが、平然とした顔をしている。

この生徒会長は、才能が無くても凄い人なのだ。

「そうですか。流石ですね」

もう染山が別人のように見える。

「そこまで言うことじゃないさ。じゃ、他の場所も回ってくるから
高原先輩は俺達に手を振ると、他の場所へ歩いていった。」

「なあ、一つ聞いていいか」

「何じゃん？」

「どうしてお前ら二人は高原先輩の前だけあんな敬語というか、本
気で敬うみたいなの喋り方になってるんだ？」

先生にですらあの喋り方をする染山や十島が、高原先輩の前でだ
けあんな喋り方なんて絶対におかしい。

「いや、それは……」

染山が思わず口ごもった。

「それは、あの人が僕の命の恩人だからだよー」

だが、その染山を置いて十島は意にも介せず喋った。

「おい!!! 言って良いじゃんか？」

「別に良いよー。赤井君なら大丈夫だってー」

そこまで過剰に信頼されても困るんだが。

「あれは僕達が中二の時だったんだよー」

そうして、話し始めた。

く間之スポの準備の最中、気になること。く（後書き）

というわけでまたも昔話っ!!!

く十島は過去を振り返って改めて教訓を思い出す。く(前書き)

またも更新が途切れ途切れでしたが、明日からは通常運転に戻せると思います。

多分。

「十島は過去を振り返って改めて教訓を思い出す。」

「僕は多分、一番やっちゃいけないことをしたんだー」

「一番やっちゃいけないこと？」

「うん。僕の才能、知ってるでしょー」

十島の才能は“閃”^{センス}っていう見たものに対する答えをどんなものにでも返せるある種最強の才能だったはずだ。

「僕はねー、この目で自分をー、自分の寿命を見ちゃったのさー」
「寿命を？」

「そうー。興味本位だったんだけどねー。見てからすごく後悔したよー。そんなことしても誰も得しないー。するのは損だけー。まったく理にかなってないのさー」

「だが、それがどう関係するんだ？」
「それがー、意外と関係するのさー。僕はこの才能の本当の恐ろしさ、運命の強制力つてものをー、思い知ったわけなんだー」

3年前の7月4日（金）、間之崎学園。

明日は、忘れもしない。

7月5日。

、僕は明日、死ぬ。

「紫瀬ー、今日は大切な話があるのー」

「何じゃん、藪から棒に」

金曜日の放課後、十島は染山を引きとめた。

「紫瀬、明日は絶対に、絶っつ対に、僕の寮から離れたところにてね」

「？ 何だよ」

「何ででもー。とにかく絶対だから。それと、」

十島はそこまで言うつと教室から走り去った。

そして、教室から出る間際、

「今までありがとう」

と呟いた。

「訳分かんないじゃん……」

教室に一人取り残された染山の声は響いた。

「やっぱり、泣いちゃったなー」

十島は急いで教室を出て、急いで自分の寮へと向かっていた。

その目に、大粒の涙を浮かべながら。

「きつと、怪しくなかった、はず。これで、紫瀬に、危害は及ばな

「い
走って泣いて、息も絶え絶えになったまま、十島は寮に着いた。

本当は僕の死因まで分かっただらよかったんだけどなー。

十島は覚悟を決めて、自分の死因も“閃”で視ていた。
だが、その答えは不確定Uncertainというものだった。

今まで十四年間生きてきて、こんなことは初めてだった。

外れることなら稀にあったが、不確定と言いつけられたのはこの時
だけだった。

ちなみに、この寿命に関しての“閃”は、外れている気がしなかつた。

こういつときは絶対に当たるのだ。

何故だか知らないけれど、このときは外れている気がしなかった。

「人に迷惑をかけるような死に方だったら嫌だなー」

正直今の十島にはそのことが気がかりで仕方が無かった。

自分が死ぬのは分かる。

分かりたくもないけれど。

でも、自分以外の人まで死ぬのは嫌だ。

申し訳ない。

「本当ー、自分で視といてなんだけどー、空むなしいよなー」

その日、十島は一人部屋にこもって、泣き続けた。

く十島は過去を振り返って改めて教訓を思い出す。く(後書き)

というわけで突然の十島過去編!!

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (1)

3年前の7月5日(土)、十島の寮。

「今日は、どこにも出ないことにしよう」

十島は朝から部屋にこもっていた。

やるべきことは全てやった。

後は座して待つのみ。

「意外と当日まで来ると焦らないもんだねー」

そうして時計の針が午前10時を回った辺りだった。

鍵を閉めていたはずの玄関のドアが開いた音がした。

「あれ？」

紫瀬には来るなって言つといたのに。

そう思って玄関まで向かったときだった。

「動くな。茶仁、十島で間違いないか？」

後頭部にひんやりと冷たい金属が当てられた。

そして後ろから低い声が掛けられた。

「うん。僕が十島だけど？」

これって銃なのかなー、やっぱり。

うすうす後ろから感じる突き刺すような気配も感じたことがある。

堅気じゃないよ絶対。

「ならば、お前の才能は“閃”で間違いないのだな」

「やっぱりそれが目的かー」

十島は自分の才能のために、今までもこういう組織的なところに誘拐されたりしたことがある。

見たものに対する答えをどんなものにも返せる、なんて才能はそういう裏の世界ではほぼ最強の力を誇っているからだ。

とすると、誘拐されてる間に他の組織との抗争に巻き込まれたとか、誘拐された後に僕が才能を使わないって言いはって、それで殺されるとかかな？

と、ここまで考えて十島は自分が空恐ろしく感じた。

別に自分が死ぬ未来を考えたからではない。

今日中に死ぬことが分かっているのに、冷静に自分の死因を考えている自分に空恐ろしく感じたのだ。

幼い頃に恐怖を感じすぎちゃったのかなー。

十島は幼い頃から才能目当てであらゆる裏の組織に狙われ恐怖を感じすぎたのか、恐怖という感情がほとんど抜け落ちているといっても過言ではない。

そのためそれに連なる感情、緊張感や焦りなどを全く感じなくなってしまうた。

また、場の空気の把握もあまりできず、喋り方ものんびりしたも
のになった。

「抵抗とかしたら後ろのそれが火を吹くんですかー？」

「まあ、それは一番避けたい事態ではある。だが、随分とこういう状況に慣れているようだな」

「おかげさまでねー。それに今日は、ちょっと別の事情もあるのですー」

「そうか。ではついてきてもらおうか」

そう言つて男が玄関の扉を開けたそのときだった。

「ぐああー!!」

そんな断末魔のような声が聞こえ、男が開けたドアに外で待つていた他の男が倒れこんできた。

「!?!? 何があつた!?!」

思わず男も警戒する。

「よく分からんが、これつてぜつてー大変な状況じゃん？」

まさか。

この口調は。

「お前、何者だ」

男は懐に手を突っ込んで言う。

「名乗るほどのもんでも無いじゃん。染山紫瀬。ただの十島の友達だ!」

最後の口調だけは普段の軽薄さの無い真剣なものだった。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (2)

「お前、どうやって外にいたこいつらを倒したんだ？」

十島を捕まえようとしていた男は目の前の染山に警戒を強めていく。

「別に、十島の家に行こうとしたら何か変な服着た柄がらの悪いおつちやんたちがいてさ、何かあったのかと思ったら一人が十島の家に入ってたじゃん。そんで俺も行ったら、ガキはさっさとどっかに行くとけって言われたんじゃん。それでも行こうとしたら、なんやかんやでちよつと戦バトル闘ってきた」

「なんやかんやつてなんだよー!!」

「まあ、ちよつと無理に行こうとしたじゃん」

「それにしても……、どういうこった？ あいつらがそう簡単にやられるとは思えないな。一体、何をしたんだ？」

そうして男は懐にあった黒光りする金属、拳銃を右手で染山に向けた。

「紫瀬!」

「心配するな、じゃん」

染山は十島に右手の親指を上につきたてて見せた。

「駄目、紫瀬。落ち着いて。これは僕の問題だ。気にしないで、そして帰って」

「そんな目で言われて黙って引き下がるような奴は本当の友達じゃないじゃん」

えっ……。

気がつくと、目から涙が溢れていた。

あ、れ。
。

こんな不意打ちであっちゃったから、かな……？

駄目だよ、茶仁。ここで気を迷わせちゃ。

もうお別れするんだから。

拳銃の一撃だ、僕が庇わなければ、紫瀬は死ぬ。

こういう死に方かな！。

「あー、俺に銃はほとんど無意味な脅しだと思っじゃん？
そういつて紫瀬は一步、また一步と男と十島に近づく。

「それ以上近づくと、撃つぞ」

「構わないじゃん？」

男は引き金を引き絞る。

そして、染山が動きを見せた。

何の意図も無い一步を踏み出したのだ。

「紫瀬！！」

その瞬間十島が染山を庇うように前に出た。

「っ馬鹿！！」

だが、そんな十島を更に押しつけて染山は前に出た。

その瞬間、チュンと消音機サイレンサーの音が部屋に響いた。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (3)

「全く無茶なんかしゃがって、じゃん」

染山は先ほど銃で撃たれたはずなのに、血も流すことなく平然としていた。

「どういうこと……?」

「意味が、わからない……」

十島と男は驚いている。

「後、今の俺には近づかないほうが良いぞ。下手すりゃ燃える」
そう言っただけで染山は一步、また一步と男へと歩を進めていく。

「な、何なんだお前はよお!!」

チュン、とまたも消音機の音が小さく響く。

「つつ!」

だが、染山は少し当たったところを抑えただけで、たいしたダメージを受けていない。

「これで、チエックじゃん?」

カタカタと震えている男の拳銃を握り締めると、徐々にそれが赤みを帯びてゆき、ドロドロと溶け始めた。

「か、かあ!!」

急に溶け出した拳銃を持っていた両手も、真っ赤になっており火傷しているようだった。

男は自らの焼けるような両手の暑さと、今日の前の染山が起こし

た現象が理解できず、その場へたりこんだ。

「ほら、行くぞ」

「え、あ、うん……」

染山は十島の手を取り、外へ駆け出した。

「紫瀬、二つ聞いていー？」

「何じゃん？」

二人は街中を歩いていった。

「どうして、僕の寮に来ようと思ったのー？」

忠告したはずなのに。

あんなに。

「ん？ 何か胸騒ぎがしたからじゃん」

「そんな理由であんなに警告したのに来たの……？」

「というか、都市伝説の“悪魔の誘拐”かと思ったんじゃん」

「何それー」

「最近ここで訳のわからない誘拐事件が起きてるらしいじゃん。十島が急に変なこと言い出したから、不安になったんじゃん」

「心配されてるんだかー、遊ばれてるんだかー」

いつもと変わらない染山の態度。

ありがとう、本当に。

「じゃあ二つ目ー。どうやってあの銃弾を避けた、あるいは受けたのー？」

紫瀬の才能は“体温自在”。
自分の体温を変化させられる才能だけだと思うけど……。

服が燃えてないから温度は変えてないよね……。

「簡単じゃん。俺の才能、“体温自在”じゃん。これって実は自分に触れている一次的なものなら、俺の才能の効果範囲に入れるんじゃない」

「……、一体どういうこと？」

「だから、俺はこの着ているTシャツやズボン、靴の温度も自在に変えられるってことじゃん。でも、靴の下にあるコンクリートとかの温度は変えられないじゃん。だからいつも手とかで触って溶かしてるじゃん」

つまり、染山が触れているものの内一つ目までなら温度を変えることが出来るということだろうか。

「とはいっても、例えば手で地球を触れば温度を変えることも出来るだろうけど、こいつは質量が半端じゃないからやろうとした瞬間にカロリーがなくなって終わるじゃん」

0.001度も変えられれば凄いじゃん。

「つまり、一次的なものとはいっても服くらいじゃないと出来ないってことなんだ」。でも、そんなことできるなんて知らなかったな」

「これが出るようになったのは最近じゃん。これで俺が体温を変えて服を燃やしたりして駄目にするってことは無くなったじゃん。でだ。銃弾の件だが、あれは瞬時に銃弾を溶かしてたんだよ」

「瞬時に？」

「そう、瞬時に。元々銃弾の温度は銃身を通るときと空気との摩擦で温度が高いじゃん。それと俺が“体温自在”で全力で温度を上げれば、着弾した直後に液体になって霧散するんじゃない。だから当たったときの衝撃は痛いけど、それ以外の外傷は出来ないんじゃない。とはいえ、当たったところは内出血ほ起こすから、あんまり受けたくはないじゃん」

「そうだったのかー」

紫瀬の才能もいつの間にかレベルアップしていたようだ。

僕の才能は……。

「紫瀬。さっきのことは嬉しいけど、やっぱり僕のこととは放っておいて。絶対にこれ以上、僕に近づいちゃ駄目だ」

十島はそういうと人の行き交う交差点を走り出した。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (3) (後書き)

では、結構映画好きな作者（アメリカンな感じの銃撃戦が多発する系の映画）からのどうでもいい豆知識コラム。

消音機というものが銃にカスタマイズする道具としてありますが、実際にはチュンとかプシュ的な音はしません。

消音機の消音効果は約30%と言われています。

それで消音した結果60〜70dB と、電話機のベル並みの音量が普通に流れます。
うるさいって。

ちなみにつけなければ100dB。通過する電車の音をガード下で聞いた時の音量と同じで、まあつけたほうが良いんですがね。

他にも消音機をつけると発射炎や反動も軽減するため、別にそこまですせないって事はありません。

ちなみに私の小説では映画のような音にしています。

次に映画を見るとときに少しほくそ笑むくらいの知識コーナーでした
I。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (4)

「待てや」

染山は走り出した十島の腕を掴んだ。

「離して!!」

十島は必死に振りほどこうとするが、離れない。

「絶対に離さないじゃん。大体、昨日からのお前が変すぎるんじゃない。まるで、今から死ぬみたいな」

「……。そう、だよ。今日、どこかでいつか僕は死ぬ。そう、“天啓”が下った」

「お前、まさか自分の寿命でも見たつてのか」

「その通り」

「なっ!?! おい、本気で言ってるのか!!」

「紫瀬は知ってるでしょ!。僕は恐怖を感じない」

「ふざけるなや!! ちったあ死にたくないとも思わないのかよ!!」

染山は十島の襟元を掴みあげた。

「僕だつて思ってるさ!!」

十島はその掴まれた襟を振りほどく。

「でも、しょうがないんだよ。“天啓”の命中率は100%。外れることはない」

「それは、今までの話だろ? なら、今回は外させてやる」

染山は強い口調でそう言い切る。

「ようは今日一日を乗り切りゃいいんじゃない。元気出して行くっじ

やん

「で、でも……」

「俺はお前がどこに行くところが必ず守る。だからお前も自分の身を守ってくれ」

「し、紫瀬……」

かくして、染山のボディガードが始まった。

「おいおいおいおい兄ちゃんよお。うちの兄貴にぶつかっついてすいませんじゃないわボケがあー！」

「そうじゃそうじゃ！！ 謝らんかいわれえ！！」

いきなりからまれたー！！

今時こういう風な人も珍しい気がするんだが！？

「まったく、現代にも生き残ってたんじゃん」

「ああん！？」

こういつチンピラは、一発脅しとけば良いのか？

「溶かすぞ」

染山が足を思い切り振り下ろす。

すると、足元のコンクリートが見る見るうちにドロドロと溶けていき、染山の足は地面にめり込んでいく。

「ひ、ひえ！！」

チンピラの一人が素っ頓狂な声を出す。

「お前ら、こんな事で驚くんじゃねえ！！」

兄貴（笑）が大きな声を上げてチンピラを叱る。

「そ、そうだぜ兄貴！！ 兄貴の才能を見せてやってくださいよ」
チンピラ（声を出さなかった方）がいかにもなセリフを吐く。

「ざっと、こんなもんかのお！！」

兄貴（笑）は拳を握り締めると、裏拳を思い切り横のコンクリートの壁にぶつける。

ドン！！ と爆音のような音がして、横の壁は丸くえぐれていた。

「どうだ！！ 兄貴は肉体強化系のレベル3なんだぜ！！」
チンピラも急に胸を張る。

「そうか、俺はレベル5だ」

梁山は飛び散った破片を集めると、一気に溶かし始めた。

「まったく、お前達修理する気とか毛頭ないじゃん？」
そして、壁へと塗りこんでいく。

「よし、これで元通り。じゃあ、お前らはこれで良いよな」
梁山はさういうと手に持っていたドロツとした何かを兄貴（笑）に投げつけた。

それは弁慶の泣き所辺りにベチャリと張り付いた。

「じゃ、行くじゃん十島」

「うんー」

何食わぬ顔でその場を去ろうとする二人。

「お、おい待

「があああ!! 熱つつううー！ー！ー！ー!!」

二人を止めようとしたチンピラの声は、兄貴（笑）の声に遮られた。

弁慶にへばりついていたコンクリート色した物は、服を燃やしなから兄貴（笑）の肌を見せ始めていた。

「早めに水で冷やさないと服と皮膚がひつついちまうじゃん」

「ごめんなさいー」

二人は颯爽とその場を離れた。

「ってか、ああいう面倒なトラブルから本気で死の危険を感じるものまで今日はおおすぎじゃん!!」

二人はこれまでにチンピラに絡まれること5回看板が落ちてくること4回マンホールに落ちかけること2回目の前で強盗が現れること1回を経験していた。

「やっぱりー、僕のせいー」

「気にするな。俺が好きでやってるだけじゃん」

「でもー、やっぱり駄目だ!」

また十島は走り出した。

交差点へ。

ブーと野太いブザーのような音が鳴り響く。

そう、十島にトラックが迫っていた。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (5)

「やばっ!!!」

目を離れた際に殺されかけるってどういことだよ!!

染山は十島を突き飛ばそうと交差点へ走ろうとした。

しかしその瞬間、誰かが染山の横を抜いて交差点へと走っていった。

そして染山は走っていった男とは別の男に肩を掴まれた。

「お、おい!! 離すじゃん!!」

「落ち着け。彼は私が助けるから。大体良く考えれば分かるだろうが、走って人を突き飛ばしなんかしたら、突き飛ばしたほうは運動エネルギーを失って止まってしまうだろう?」

「意味わかんねえんじゃん!! って、同じ顔……?」

染山はいきなり肩を掴んできた男の顔を見ると、それは先ほど交差点に走っていった男と同じ顔だった。

「今は俺みたいなのが役に立つときだ」

そう掴んだ男が言うと、目の前で不思議な現象が起こった。

交差点へ飛び出した男は十島を突き飛ばすと交差点に取り残されたが、撥ねられる直前でその姿が消えてしまった。

「ドッヘルゲンガー もう一人の自分”、解除つと」

染山の肩を掴んでいた男は言う。

「アンタ、双子か？ さつき十島を突き飛ばして交差点から消えちまったほうは瞬間移動系の才能者とか……」

「いや、俺は双子じゃない。いちいち説明するのも何だがな、俺の才能“もう一人の自分”^{ドッベルゲンガー}。こいつは文字通りもう一人自分を作ることが出来る。分身みたいなもんだ」

「そ、そんな才能が……」

梁山がいきなり現れた男に驚いて困惑していると、十島がこっちに走ってきた。

「ふへー。今のは死ぬかと思ったー」

「何でお前が一番平静とした声上げてんじゃん!!」
十島はいつも通りの様子だ。

「あれ、さつき僕のことを突き飛ばして助けてくれた人ー」

「ちょっと驚いたな。あれだけのことがあって尚そう普通に喋れるか」

流石に十島を助けたであろう男も驚いていた。

「いえいえー。褒められても嬉しくなんかありませんよー」

「十島、多分褒めてないと思うじゃん……」

梁山は十島に呆れかえっている。

「ところで、一体どなた何ですかー」

十島がそんな中男に聞いた。

そういえば全く知らない人だったのに、随分と普通に喋っていた。

「俺か？ 俺は高原衣。まあそれ以外に肩書きなら間之崎学園の学生くらいしかないが」

そこで高原さんは言葉を区切る。

「次々々期生徒会長になる男だ!!」

「って三年後じゃん!!」

染山のツツコミは交差点に響いた。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (6) (前書き)

二週間ぶりですね。

更新が非常に遅れてごめんなさい。

焼き尽くすような紫外光線の前に人間は無力でした。

体力がー、削られるー。

毒の沼地のような今日この頃です。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (6)

「ハツハツハ、生徒会長に俺はなる!!」

「どこかで聞いたセリフ……」

「なんだか面白い人」

いつの間にか俺達と高原さんは意気投合していた。

「しかし、凄いですね。 “オブザーバー 観察者” でしたっけ。それのおかげでだいぶ助かりました」

先ほどからも命の危機にあっているのだが、高原さんの才能“観察者”でそれを未然に防ぐことが出来ていたのだ。

「まったく、お前達相当に運が悪いのか？ もう早く家に帰ったほうが良いぞ？」

高原さんには十島の事情は話していない。

これ以上迷惑をかけるのは良くないと考えたのだ。

「そうですね。では、ここでお別れですか？」

「だな。そっぴや十島君。君の家はどの辺だい？」

「えーと、向こうのほうですー」

十島はここから東のほうを指差した。

「その近所に十島っていう同じ名前の人はいるか？ もしくは兄弟とか」

「……？ いませんよー？」

俺達二人は高原さんが何を言っているか分からなかった。

「そうかいそうかい。分かった。じゃあね君達。楽しかったよ」
高原さんは手を振って分かれていった。

「一体どういう意味だったじゃん？」
「さあー」

外に出て、外のほうがよっぽど危険だと分かり、高原さんの言った通り家に帰ることに。

「さてと、今日はお前を一日守り抜く気持ちで泊まってやるじゃん」
染山は十島のうちに泊り込むようだ。

そうして帰っている最中のことだった。

「危ない！！！！」

そんな声が響いた気がした。

ふと地面が暗くなる。

染山と十島が上を見ると、鉄骨群が俺達の上に降り注いできていた。

「ビルの工事現場っ……！！？」

染山は横を見るとそこはビルの工事現場だった。

一本の鉄骨なら何とかなるかもしれないが、今降り注いできてい

るのは5・6本という大量な量だ。
跳んで逃げるには不可能な量。

「死、ぬー?」

十島は呆けている。

どうする!?

どうするどうするどうする!?

「多分、紫瀬は今死ぬような男じゃないー」

えいっと。

十島は染山を突き飛ばした。

思わぬ十島の力に、染山は尻餅をついてしまう。

「な、何すんじゃん!」

「紫瀬は多分今死ぬような男じゃないー。だから、大丈夫。この鉄骨は僕に当たりこそすれ、紫瀬に当たることはないはずだー」

十島は言い切ると、鉄骨群のほうを振り返った。

後数秒で鉄骨が落ちる。

十島が、死ぬ。

その瞬間、落ちてくる鉄骨が非常にゆっくりに感じられた。

「走馬灯、か……?」

何故か時間がゆっくりに感じられ始めた。

このままじゃおそらく、アイツは死ぬ。

「畜生！！」

俺の才能がもっと便利なものだったなら！！

自分の体温を上げるだけじゃあ、あんな鉄骨の量一瞬で溶かしきれぬ訳が無い！！

、自・分・の・体・温・を・上・げ・る・だ・け・じ・ゃ・あ？

もしかして。

できるのか？

いや、今はこの可能性に賭けるしかない！！

梁山は尻餅をついたまま十島から鉄骨のほうを見やり、降ってくる鉄骨に向けて手を掲げた。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (6) (後書き)

これからはそこそこな更新ペースで頑張ります！。

く十島に訪れるはずの残酷な運命。く (7)

「消し飛べ!!」

そう染山が叫んだ瞬間、降り注いできた鉄骨群がボンツ、と音を立てて一瞬にして消え去った。

「えー……?」

十島は目を見開いて啞然としている。

「い、今は、紫瀬がー……?」

ゆっくりと染山のほうを振り返りながら十島は聞く。

「多分、もう一度やれって言われたら出来ないじゃん」

今の感覚は、一体……?」

「と、とにかくここは離れたほうが良さそうだ」

十島はそういつと俺の腕を引いて走り出した。

先ほどの音に驚いたのか、見物客が集まってきていたのだ。

「まったく、見せ物じゃねーじゃん」

そうして走って十島の寮に戻った。

「お、お前達。遅かったな」

寮の前では、何故か高原さんが待っていた。

「流石に鉄骨群は俺でもどうしようも出来ないな」

まるでその場を見てきたかのように語るのは、“観測者”で見たのである。

「いや、そんなことよりも……」

そんなことよりも一番に聞きたいことがあった。

「その周りに倒れている堅気じゃないっばい人たちは一体なんなんですか!!」

高原が立っている寮の門の後ろには倒されたのであろうか、10人ほどの人が転がっていた。

「いや、“観測者”で確認はしてたんだよ。だから君達と会話している間に“もう一人の自分”でこっちに向かっていたって訳だ」
「じゃあ、つまり俺達と話していた高原さんは途中から分身と入れ替わっていたって訳ですか？」
「そういうこと」

この人は、化物か？

二人は畏怖の念とともにそう思った。

「まったく君達は相当に不運なようだからね。どれだけ命狙われているんだって話だ。これからは俺もお前についてやるよ」

こうして十島と染山と高原はその日十島の寮で泊まった。

寮に戻った後も一悶着、どころか五悶着くらいあったが何とか切り抜けることが出来た。

「ということなんだよー」

そこまで語って、十島はふう、と息をつく。

「そんなことがあったんだな」

「あの時は大変だったよー。いやいやー、運命の強制力つてのは恐ろしいものだねー。何度死に掛けたか分からないよー」

えへへー、と頭をかいて照れたように笑う十島。

「そこは多分笑う場所じゃないと思うぞ……」

赤井はその姿に少し呆れてしまった。

く間之スポ開催、の観戦者たち。く（前書き）

またしても投稿が……。

という事で今回は文字数が多めです。

「間之スポ開催、の観戦者たち。」

6月24日（金）、間之崎学園。

その日の間之崎学園は、一味違っていた。

「優勝、するぞー!!」

『おおー!!』

そんな掛け声が辺りから響いてくる。

そう、今日から三日間。

間之崎スポーツカーニヴァル（V発音注意）が始まるのである。

「まったく、燃えあがってんな」

何故か、ここにいと、

「俺もいっちょやるか!!」

テンションが上がる。

「さて、今日は皆さんお待ちかねの間之スポですっ!!」
『イエーイ!!』

クラスのみならずもテンションがマックスまで上がっている。

「絶対勝つぞー!!」

『おおー!!』

場所は変わってここは間之崎スポーツカーニヴァル観戦用スタジアム。

間之スポは非常に大きなイベントであるため、観戦者も非常に多い。そのため、このような大きなスタジアムから巨大モニターでの観戦となる。また広範囲で同時に色々な種目が開催されるため、手元にも小型のモニターを手渡される。(ちなみに、壊したりしたら弁償しなければならない)

「さてさてえ、始まってきたねえ」

そのとある一角。

「あいつ等は、全く遅いんだからよお」

座っている男は目に白い包帯をくるくると巻いており、おそらく目は見えていないのではないかと思われる。どうやってここまで来たのであるうか。

「たしかこの辺か？ A・23つてのは」

「ほら、椅子に書いてあるわよ」

「お兄ちゃんが見られるよー!!」

その包帯を巻いた変な男の横にとある3人家族が座り込んだ。家族は父と娘二人の3人のようだった。

父は普通の感じだが、娘は二人とも天真爛漫な感じだった。

「お前にしては珍しいな。自分の金使って俺達を呼び寄せるとは。しかも、ここS席レベルの良い席じゃないか？」

「そりゃそうだなあ。お前らのほかにも色々呼んでんだぜえ？ ちったあ感謝しな」

3人家族の父親と思われるほうが、目に包帯を巻いた男と話し始めた。

「ところでよ、それ、お前見えてんのか？」

父親と思われるほうが包帯の男に聞いた。

「これは日光を遮断するためだ。こいつの後ろから少しは見える。観戦するときは外す」

「そうか。まさか家族全員呼んでくれるとは思わなかったな」

「言つとくが、呼んだのはお前達だけじゃないからなあ？」

包帯の男がそう話していると、その反対側にもある家族が来た。

「父さん、しっかりしてくれ。一年に一度の娘の晴れ舞台だろうが」

「ああ、空が眩しいな。別にネットの中継で良くないか？」

「せっかく招待状をもらったんだから良いだろ」

それは息子と父の二人組のようで、息子は好青年のような男、それに比べて父親は髪もぼさぼさ、目には隈がありどこか山奥から出てきたような感じだった。

「ありがとうございます、白道さん」

その息子のほうが包帯の男、白道に礼をする。

「気にすんな。これは全部あの事件のとき祈にもらった金だからなあ。あれは俺一人じゃあどうしようも出来なかったからな、別に構わない。それに、人類最強のアンタに借りを作るのも、悪くねえ。紅桜さんよお」

「殊勝な心がけだな。ぜひと普段からそうしてくれ」

紅桜ではないほうの白道の隣の男が笑う。

「太陽、手前もちったあ俺に感謝しな」

「ツキ、心があいかわらず小さいなあ。俺とお前の仲だ。連れない事言つなや」

「ツキつて、この人が白道さんなの？」

赤井太陽は白道と肩を組む。

太陽の隣の小さな女の子は白道の顔を覗き込んでいる。

「彼女が、もしかして……」

「ああ、俺の妻、美月だ」

「こんにちは」

娘のように見えた小さな女の子の一人は、太陽の妻、美月だった。

「話は太陽から聞いている。しかしまあ、本人の前で言うのもなんだが……、お前、本当に犯罪じゃないのかあ？」

「黙れ、お前には美月の魅力が分からないのか？」

「そんなに褒めないでよ太陽お」

「多分その魅力が分かったらやばい気がするんだが」

白道は旧知の友の一面に頭を抱える。

「はくどうさんですか？ このたびはよんでくださってありがとうございます
ごぞいます」

「そういう君は葉月ちゃんだね？ 練習したのかい？」

「そうなのですよっ！！」

「……太陽にはもつたいたない可愛い子だな。結婚したくなってきた
うるせー、と口を尖らせる太陽。

「アイツももう一人前に仕事してるんだから、お前もいい加減結婚

しろよ」

「いや、ちょっとまだアイツってのは心の準備が……」

「さっさとしろよ？ お前おっさんになるぜ？」

「もうかなりやばいさ。そうだな……、これが終わったら、本気で考える」

白道は少し考え込む。

「お前も結婚しろよ」

「父さん、俺はまだ大丈夫だから」

「そう言ってる間に時間は過ぎていくぞ。俺みたいな男でも母さんみたいな素敵な女性と結婚できたんだ。母さん……」

「現実を、受け止める」

「もう死んじまったもんなあ……、呼んでも誰も答えてくれないもんなあ……」

「母さんというのは、杏奈あんなさんのことですか？」

紅桜とその父親が話している最中に考え込んでいた白道が入った。

「知っているのかい？」

目に涙を浮かべながら桜の父親が聞く。

「まあ、同じ職場だったからな。確かにありゃあ、良い女だったと思うぜえ」

「だろお？」

正気の無いような虚うつろろな目で賛同する。

「しかし、あの女が一部では有名なアンタの奥さんとはなあ」

「俺はただ、パソコンが好きな大人さ。幼馴染の杏奈は、そんな俺を認めてくれた唯一の女だったからなあ……」

この男は、紅火切くれないがきり。

firecutterという最強のハッカーと呼ばれている。

この場合でのハッカーというのは、クラッカーと違い善意を持つ者である。

一人の男が悲嘆に暮れていると、ドン、という空砲の音がする。

「はじまるみたいだよっ！！」

葉月ちゃんの声で全員がモニターを見ると、どつやら開会式が始まるところのようだ。

「さて、俺も外すか」

白道も目に巻いていた包帯を外した。

く間之スポ開催、の観戦者たち。く（後書き）

8月15日まではペースがこんな感じになります……。

く間之崎スポーツカーニヴアルは開催される。く（前書き）

明日、岡山に行ってきますっ!!

く間之崎スポーツカーニヴァルは開催される。く

俺は今、開会式の会場のところで整列している。

梅雨独特の時期だからか、湿気と熱気でモンモンとして正直熱い。そうして整列して待っていると、ドンと空砲の音が鳴った。

「ただいまより、間之崎スポーツカーニヴァル開会式を行います。一同、礼」

司会の声がして、皆がいつせいに礼をする。

「国旗・校旗・都市旗の掲揚を行います。一同、回れ右。生徒、教職員は帽子を脱いで、ポールに注目願います」
そんな声が聞こえて全員が後ろを向くと、3本のポールに一つずつ旗が上がっていた。

「直れ。児童、教職員回れ右」

「次に校長からお話があります」
その声で間之崎学園校長、間之崎竜次郎が朝礼台に上る。

「姿勢を正して、礼」
こういうところも外と変わらないな。

「えー、本日は雲ひとつ無い晴天で、生徒達の普段からの行いがうかがえます、今日この頃です」

あの校長もやっぱりこういう場では普通に喋るのか。

「まあ、わしが話すような話は今年も無いじゃろうな。みんなの様子から分かる。じゃあ、間之崎スポーツカーニヴァル楽しむこと！
！ 以上！！」

「姿勢を正して、礼」

1、2、3、

ちゃんと3つ数えて礼を

。

早いな！！

3行くらいしかなかったんじゃないか！？
全然外と違うじゃねえか！！

「次に、間之崎学園中高等部生徒会長高原衣さんのお話です」

校長が降りた後、高原さんが朝礼台に上る。

……嫌な予感がする。

「えー、一言。一言だけ言わせてもらおう」

さっそく式なのに口調が普通だし。

「お前ら、楽しんでいくぞお！！！！！！」

『おおー！！！！！！』

間髪いれずに生徒からも声上がる。

想像してはいたけれど。

これは、凄い開会式だな。

「以上だ。双方、赤も白も、健闘を祈る」

そして颯爽と朝礼台を降りていく。

この人、無駄にこういう動作だけはかっこいい。

いや別にこういう動作以外でもかっこいいところはあるけどさ。

ちなみにその後は普通の選手宣誓（スポーツマンシップに乗っ取るアレな）や、校歌斉唱があった。

この辺りは特に外と変わらなかった。

その後式は終わり、各々が自分の競技の開催場所や、応援席などに向かう。

「お前ら、どこ行くんだ？」

とりあえず普段の面子に聞いてみた。

「どこって、決まってるじゃん」

「そうだよー。僕らのクラス競技もー、まだまだだしー」

「赤井君、あなたも一度は紅さんの姿を見ておいたほうがよろしいのではないでしょうか？」

上から梁山、十島、相馬がどうやら同じ競技のことを口に出している。

紅？

「一体どういうことだ？」

「だから……」

「障害物マラソン大会だ。前半に仕事が無いやつとか応援が無いや

「つは大抵そこにいくぜ？」

競技は天音と藤崎が答えてくれた。

「障害物マラソン大会？ 何だそりゃ」

聞き覚えの無い種目だ。

「この間之崎学園をぐるっと一周する徒競走で、その中に障害物を入れた」

「鉄人レースじゃねえか！！」

この間之崎学園は幼、小、中、高、大と5つを統合した超巨大学園だ。

だから、その総距離は

「約10キロだろ？ そんなものは皆承知してるさ」

「いや、おかしいだろ！！ しかもこれ最初の種目なんだろ！？

だったら

「だからこそ、さ。この鉄人レースはいわば能力の差を埋めるための一つなのさ。こういう大会に向けた才能者がそりゃごろごろいる。そういう奴の体力を少しでも減らすため、らしい。コイツは毎年教師陣と校長と生徒会役員で各クラス一人ずつ決められてるらしいから、これに選ばれるのは喜ばしいことなんだぜ？ だって、選ばれればそれだけで十分に箔がつく。校長や教師陣にこの間之スポに通常参加ではいけないと、それこそ才能を認められるんだから」

成程、そういうことが。

なら、この種目にみんなの期待が集まるのも分かる。

何せ、事実上の天下一武道会みたいなもんだからな。

「だがよ、10キロも走ったら、この先の徒競走とかは大丈夫なのか？」

「何言ってるのよ、赤井」

その声は今まで会話に入ってこなかった篠崎だった。

そういえばさっき紅と話をしていたような……。

「あの紅が、10キロ程度でへたるような娘じゃないくらい分かるでしょうが」

「え？」

思わず間を置いて返したが、そりゃ一体どういうことだ？

紅は曲がりなりにも女子、いくらすごいと有名でも……。

「紅さんは中学二年のころからずっと出続けているらしいですよ。これに」

相馬が篠崎に補足説明する。

「それだけ、認められた娘なの。紅は」

実を言うと、紅の才能を詳しく見たことが無い。

だから、半信半疑だった。

この時まででは。

く間之崎スポーツカーニヴァルは開催される。く（後書き）

お土産はきび団子っ!!

く競技その一、障害物マラソンく (1) (前書き)

遅くなりましたが更新です。

「競技その一、障害物マラソン」 (1)

「この度、間之崎スポーツカーニヴァル、実況を勤めさせていただくのは、くるむかたり繰村語でございます。えー、今回もこの競技の時がやってまいりました。障害物マラソン大会。まもなく開催です!!」

「解説は、おとなし音無有木ありきでおーくりします」

上から放送の音が聞こえてくる。

「このレースはその特製上デッドマ レースと呼ばれていてだ…」

「そんな恐ろしい訳ないだろ」

今俺達は生徒用応援席なるところで紅の勇姿を見ようと応援していた。

映像はでっかいハイビジョンテレビから見ている。

「では、伝統あるコースの紹介をいたしましょう!!」
実況の人の声はやけに甲高い。

ネズミの国じゃないんだから。

「まずこのレースの走るルートはもちろん変わっておりませんが、いつも通り選手がその場所に到達するまでは障害物が何なのかは、私達でも知りません!!」

随分バラエティ色強いな。

「この競技は全員が楽しむための競技ですからね。ここは相当盛り

上がりますよ」

「へえ、そうなのか」

相馬が説明してくれていると、今まで映っていたハイビジョンの映像がアップになった。

「では、今回も選手の説明を行いたいと思います！！ エントリーナンバー1、中等部1-A

その実況の声で一人一人の顔がアップになりながら、ご丁寧に才能まで説明して語ってくれている。

「次は大本命かあ！？ エントリーナンバー9、高等部2-A、紅鍵音さんです！！」

おお、と周りがざわめき立つ。

「このレースで3連覇を果たしている紅鍵音さんの才能は皆さんご存知の通り、“超跳躍”^{ホッパー}。その名の通り脚力の強化のみに重きを置いた才能ですが、その分通常の肉体強化系とはレベルの違うほどの強化を見せてくれるのです」

解説の音無さんが語る。

「今回も期待できそうですねー！！ では次にエントリーナンバー10、高等部

実況が次の人に移ると、みんなの興味が少し薄れたようになる。

「本当にすごいんだな。紅」

「そうじゃん。凄いじゃん。疾風迅雷じゃん」

「赤き閃光」

「赤き稲妻な」

とにかく、期待が持てそうだった。

そんな風に話していると、いつの間にか実況の人の選手説明は終わっており、どうやら始まるようだった。

「ではでは、喋るのもこのくらいにして始めましょう。開始五秒前です。5、4、」

実況の人の掛け声に、見ていた周りの観客の声も重なる。

『3、2、1！ スタート！！！！』

スタートとともに、ドンツと大きな音が響いた。

それは空砲の音でもあり、そして別のものでもあった。

スタートの瞬間、紅は思い切り地面を蹴って飛び出したのだ。

そのときの踏みしめる音、まるで震脚のようなものがモニターから聞こえてきた。

紅は一瞬でトップに躍り出た。

しかもひとつ跳びで走り出した選手と10メートル程差をつけて。

『おお！！』

モニターを見ていた全員もそれには驚いたようだ。

「いやいや、毎年毎年どんどん紅さんのレベルは上がっている気がしますね」

「そうなのか？ 相馬」

「ええ。去年はここまでの音は響かなかったんじゃないでしょうか」

どうやら今年は去年より凄いらしい。

「今年こそは負けねええ!!!」

そんな声が紅の後ろから聞こえてきた。

慌ててカメラがそっちにあわせる。

「嵐山君、だったっけ？」

体育でソフトボールのピッチャーをやっていた彼じゃないだろうか。

「彼は去年から出場していますね。才能は“嵐ジェットストームの射出ではなかったでしょうか」

ジェットストーム
嵐の射出。

その才能は確か周りの空気を集めて一本の嵐と変えて集めた空気を撃つとか言うものじゃなかっただろうか。

カメラがその嵐山を映していると、ぴしゅうう、と何か空気が抜けるような音がした。

すると嵐山も紅と同じように飛んで行く。

「やっぱり嵐山は強敵じゃんよ」

「そうなのか？」

「あの才能は言うなればジェット噴射だからねー。機動力なら負けないんだよー」

そう言っている間に紅の横にまで迫ってきていた。

「今年は勝つ!!! 紅!!!」

「出来るものならね」

二人は後続を引き離しながら、一つ目の障害物へと向かっていた。

く競技その一、障害物マラソンく (2) (前書き)

死んでません。

死んでないから大丈夫です。

〜競技その一、障害物マラソン〜 (2)

「おおっと、第一の障害は巨大な壁だあ!!」

実況、繰村さんの声で二人の正面にカメラが移動されると、そこには巨大な壁が聳え立っていた。

「どうやら今入ったじょーほーですと、あれは壁登りウォールクライミングという第一の障害のようです」

解説、音無さんが今入った情報とやらを語る。

「高さはおよそ十メートルに及び、ロッククライミングのように小さな突起が取り付けられているようです。これを掴みながら登るのが正攻法ですね」

見ると確かに、小さな小岩の形を模したものが取り付けられている。

「この程度、手前ならどうってことねえよなあ？」

「もち、ろんっ!!」

紅はその壁に思い切り走りこむと、スタートダッシュのときと同じようなドンツという音を響かせた。

そして、約10メートルの壁を跳び越えた。

「えええええ!?!」

紅の跳躍力って一体……。

そう思っていると嵐山のほうもプシュウと相変わらず気の抜けるような音を上げて壁に対して垂直に飛ぶ。

そして何事も無く飛び越えた。

「流石にあの二人は簡単に突破しますねー」

「とはいえあれだけの跳躍は肉体強化系でも紅さんくらいなのではないでしょーか」

実況と解説はなれた口調。

周りもさも当然といった感じだった。

「赤井、それくらいで驚いちゃだめじゃん」

「これより上があるみたいだな聞こえ方がするが……？」

「一つ目の障害物で驚くのはダメダメよー、ってことなんだよー」

ま、これが才能って事か。

だんだん才能という超人的な力とこのノリに慣れ始めている赤井だった。

「おおーっと、先頭の二人はもう第二の障害ゾーンに入りそうだ！」

デッドヒートで二人が走っている先にはどうやら障害物があるそうなのだが。

その先には何も見えない。

「次は一体何の障害物なのかー!!」

そう実況が叫んだ瞬間。

嵐山より少しリードした紅の姿が一瞬でカメラから消えた。

「何が起きた……？」

周りもざわついている。

カメラが近づくと、紅はどうやら穴に落ちたようだ。

先ほどまでそんなもの見えなかったはずなのに。

つまり、この障害は。

「今入ってきたじょーほーですと、どうやら第二の障害は落とし穴のよーです。そこには相当数の落とし穴が仕掛けられているそうなので、せいぜい避けてください、との事です」

紅が消えたのは、その落とし穴に引っかけたせいだろう。

そしてこの障害は、紅に不利なものだった。

「ここで嵐山が紅とぐんぐん差を伸ばす!」

そう、嵐山は空気を集めてジェットのように噴出してすすむ才能。

だから、地面と接していない。

「あーばよー、紅!」

先に行った嵐山からそんな声が聞こえてきた。

〜競技その一、障害物マラソン〜 (3)

「現在嵐山が一人トップを独走、第二の障害落とし穴で躓つまずいている
紅さんのところには後続がどんどん追いついてきたー!!」
実況も熱がこもる。

「……まずい、わね。さつさと出ましようか」
紅は穴の中で一人呟くと、両手を後ろに回してしゃがみこむ。

「さつきみたいに走っていたエネルギーこそ無いけど、これくらいの
高さなら、十っ分!!」
そして溜めに溜めたバネを一気に開放する。

「おおっと、紅さんが落とし穴からロケットのように飛び出してきたー!!
まだ勝負は分からないぞー!!」
紅が穴から飛び出してきた。

そして、おもむろに下がりだした。

「一体何をやる気なのか!!」

そんな紅を尻目にどんどん後続は紅を追い抜いていく。

「これ位で良いかしら」
ある程度第二の障害から距離をとったところで、紅がかがむ。

いや、かがむというよりも、あれは。

「クラウチングスタートか？」

両手を前におき、足を後ろに。補助の金具こそ無いものの。

「よーい」

小声で紅の口がそう動いた気がした。

「ドンッ！！」

いきなり紅は叫ぶと、猛スピードで走り出した。

そして、第二障害手前で踏み切る。

「せーのっ！！」

跳んだ。

むしろ翔けるといったところか。

紅は走り幅跳びの要領で、第二障害のところごと跳び切った。

長さは10メートルはくだらなかつただろう。

「おおおお！！！」

実況と周りからの歓声がシンクロする。

「さて、追い翔けるよー！！」

前を見据え、また翔け出した。

「このレースは、先輩方二人の独壇場じゃないんですよー」

第二障害落とし穴に辿り着いた小柄な女の子が一度立ち止まって前を見て言う。

「それを言うなら、後輩にここまで負けてるようじゃ、宴が泣くつてもんよ」

同じく第二障害落とし穴に辿り着いた背が高く、背中に赤い大きな旗を背負った男が言う。

二人は互いに目を合わせ、また正面の障害物を見る。

「赤旗先輩は、闇雲に向こうには突っ込まないんですね」

「それを言うなら後輩。お前もな。名前は？」

「中等部2-A、瀬々せせなき雑一理いちりです。赤旗先輩は？」

「俺は高等部3-A、宴宗うんすけ十郎じゅうら。俺を知らなくて中等部の2-Aのこととは、白色か？」

「野暮なことは言いつこなしですよ、宴先輩。このレースは楽しむためのもの。点数すら出ないのでですから」

「そうだな。いや、そうだったそうだった。面白い後輩だな。瀬々雑。いっちょ、組んでみるか？」

宴は瀬々雑の肩を叩く。

「いいでしょう。宴先輩」

瀬々雑は宴の方に振り向く。

「赤旗先輩で構わねえ」

そこで二人は握手を交わした。

く競技その一、障害物マラソンく (4) (前書き)

気がついたこと。

競技一つ一つに結構時間が掛かる!!

後も一つ。

感想もらつとやっぱりモチベーションが上がって更新速度が上がりますね。

く競技その一、障害物マラソンく (4)

「俺に追いつけると思ってたんのかよ!?!」

嵐山は後ろを見ながら飛びつつ叫ぶ。

「まだ半分も来てないのよ。勝負は最後まで、分からないわ!?!」

紅もあわせるように叫ぶ。

「なら、分かるようにしてやるよ!?!」

嵐山が後ろに飛んだまま両手を紅に向ける。

「嵐に吹っ飛ばされる!?!」

その瞬間、嵐山が飛ぶときになるプシューという音とは別の風の音が鳴る。

それは鋭く、突き刺すような攻撃的な音。

そして、紅に向かって何かか飛んできているのが分かった。

地面の砂を巻き上げながら、渦を巻いて、さながら槍の様に。

「ぐっ!?!」

余りのことに避けられなかった紅は、その砂の槍のようなものを腹に直撃させてしまう。

紅はそのまま4mほど後ろに吹っ飛んだ。

「どうよ。嵐の槍は。これぞ秘技、嵐槍スバイラルスピア：渦々！！ 心配しなくても身体が吹っ飛ぶだけだ」

ハハハハハ、と高笑いを決め込む。

そうしてまだ、嵐山は先のほうへ行ってしまった。

「くっ！！」

紅は膝をつくが、顔に諦めた様子は無かった。

「というか良いのかあれは！！ 攻撃してたぞ！？」
赤井は染山に食って掛かる。

「ああ、別にOKが出てるじゃんよ。相手に致命傷、また生命に関わるもの、これから続く間之スポに影響が出なければな」

「そんなのでいいのかよ……」

「うちの学校は色々ゆるいからねー」

会話に十島が入る。

「いざとなったら教職員全員と風紀委員で止めるじゃん。あの戦力にこの学校で勝てる奴なんていないじゃん」

まあ、それくらいの構えはしてもらわないとな。

紅の才能は走ることに以外となると近距離戦闘にしか向いていないからな……。

頑張れよ、紅。

赤井は心の中でひそかにそう思った。

「辛気臭い顔は似合いませんよ」

赤井が心で願っている、肩に手を置かれた。

「あの技はそこまで危険な技ではないでしょうしね」
振り返ると相馬だった。

「一体どういうことだ？」

「あの技はおそらく嵐山さんの才能“嵐の射出”を使って空気の槍を作っているようなもの、つまり突貫性の高い小さな嵐みたいなものなんです」

「だから何なんだ？」

「赤井君も見たでしょう。あの槍は進む途中で地面の砂を巻き上げる。ですから、姿が見えるんですよ。突貫性が高いということは、直進性が高いということ。先ほどのような初見の奇襲でもない限り、避けるのは容易なんです。おそらく、紅さんももう気がついてると思いますよ」

モニターを見ると、確かに嵐山に追いつきながら槍を避けている紅が見えた。

しかも、あれは……。

「おいおい、どんどん速度を上げてんじゃないのか、ありゃあ……」

紅は土煙を起こしそうな勢いで嵐山と第三障害に迫っていた。

く競技その二、障害物スリレンス く (5) (前書き)

ちよつと短め。

毎日更新、頑張ってしてみようかと思ひます。

「競技その一、障害物マラソン」 (5)

さて、この障害物マラソンについて、一つ説明しなければならぬことがある。

共闘制度と呼ばれるものである。

この競技はいわば才能を大いに使って楽しむ遊び、のようなものに近い。

だからこそ、こんな制度がある。

競技中に握手を交わすことで成立し、自分を除く二人までなら共闘できる。

この制度をとった場合、共闘している中でも最後にゴールしたものの順位が、全員のルールとなる。

「赤旗先輩、私の邪魔なんてしませんよね？」

「当たり前だろ？ 俺はお前よか場数踏んでんだ。それにこいつは宴、俺も本気を出さないといけないしな。行くぞ」

先ほど共闘の契りを交わした瀬々薙と宴はもうすでに第二障害を突破していた。

「やはり共闘すると違いますね」

「そりゃまあな。しかし、お前の才能使えるな」

「それほどでもありませんよ」

「謙遜するな。ほら、そう言ってる間に前に見えてきたぞ」

二人が走っている前には紅がいた。

「さて、仕掛けるか」

「まったく、あんな男にこんなに差をつけられるとは思わなかった。
跳ばして行くわよ!!」

ん？」

紅は全力で走り抜けていた。
土煙を巻き上げながら。

そんな時、いきなり上が暗くなった。

？

思わず上を見上げると、赤旗を持った男と一人の小柄な女子が降
ってきていた。

「何でっ!？」

「おおっと!! これはこれは意外な展開だあ!! 二人のデッド
ヒートで終わるかと思っただが、乱入者が現れた!!」

実況も思わずこの展開には叫ぶ。

「いったいこれは何なんだ？」

赤井も思わず不思議に思う。

「今入ったじょーほーですが、あの二人、宴宗十郎と瀬々雑一理選
手はあの共闘制度を使っているそうです!!」

共闘制度って、最初に説明された？

「とりあえず、状況を見てみるじゃん」

「宴は皆で楽しむもんだ。そうだろ？ “無令効”^{ファイバー}」
上から降ってきた宴が紅の前に立ちはだかって言う。

「“無令効”^{ファイバー}？」
紅と赤井の声が合わさる。

「命令など無効果だ。何故ならこれは、宴だから!!」

く競技その一、障害物マラソンく (6) (前書き)

最近文法が荒れてきています。

うーん……。

く競技その一、障害物マラソンく (6)

立ちはだかった宴は紅に掌底を放つ。

が。

紅はその跳躍力を生かして宴の横をすり抜け、颯爽と先へ進んでいく。

「せつかくのサツ一対一の決闘を逃げる気がよ!?!」
走り去っていく紅の姿を見て、宴は驚いた。

「三十六計逃げるにしかず、でしょ!?!」
未確認の才能相手に、戦う必要は無い。
危険な相手からは逃げる、常套手段だった。

「瀬々薙!! 逃げられた!?!」
宴が紅が翔けて行く上空を見て叫ぶ。

そこには空中を走る小柄な少女の姿が。

「あれってさつき宴先輩と一緒に降りてきてた……、瀬々薙さん?」

「おおっと!?!? これは、瀬々薙選手の才能“ハーデンエア辟易する空気”か!?!」

はーでんえあ?

赤井は実況の説明が分からない。
おそらく周りの人もそうだろう。

こんなことを言っちゃあ悪いが、紅のここでのスター性が高すぎて注目されて無かったってというのがほとんどだろうから。

「先ほども説明しましたが、“辟易する空気”とは簡単に説明すると、空気を固めることの出来る才能です。おそらく瀬々雑選手は空気を固めて足場を作っているのだと思われます」

赤井の気持ちを代弁してくれたのか、解説の人が説明してくれた。

「固め方によってはこういうことも出来る」

瀬々雑がそういつた瞬間、紅が猛スピードで。

盛大にこけた。

余りにも速かったので四回転ほどして、今度は何か透明な壁に当たったように。

「？」

体操服がぼろぼろになりながら、紅は自分の右足と前を眺めていた。

「なるほどね。瀬々雑ちゃん、なかなかの使い手だよ」

赤井達が観戦しているなか、後ろに生徒会長、高原先輩が出てきた。

「一体どういうことですか？」

「彼女の才能、聞いてなかったのかい？ 空気を固められるんだよ。空気つてのは透明だろ？ あのこけ方からして、何かにつまずいたんだろう。多分、紅さんの足元の空気を固めてブロックみたいにして置いたんだろう。それに勢いよく突っ込んでこけたと。そのあと

転がるのが止まったのも、空気で壁を作ったから」

「流石“観察眼”じゃ……、ですね」

染山は高原に一礼する。

「ってことは、瀬々薙つて人はある程度の距離で固めることが出来るってことなんですかね。大抵その手の才能ってのは自分が触れている範囲からあまり離れられないのに」

大抵の才能は、自分に触れているか、ごく身近な空間でしか才能を發揮できない。

赤井の才能“才能帰却”も触れないと発動できないし、染山の“体温自在”だって自分の温度しか変えられないように。

「だから驚いてるんだよ。どういう手を使ったかは分からないけど、あれはダークホースだね」

うんうんとうなずく高原。

「でも、嵐山みたいに空気を操れるとは言っても、そんな才能じゃ紅さんに追いつけるような速度が出ないと思うんですが」

「そーだよー。今までの障害、壁や穴なら空気で足場を作れば突破こそ出来るけどー、体力は一般の女子と同じなんじゃないんですかー」

相馬と十島が同じ質問を口にする。

「ああ、お前達は宴の才能を知らないんだよな。上級生の間じゃ、結構有名だったりするんだけどな」

宴先輩の才能？

「それって、“無令効”^{ファイバー}ってやつですか？」
宴先輩が降ってきたときに言ってた……。

「そ。機動力って面。というよりは馬鹿力、というよりは体力なのかな？」

「一体どんな才能なんだ……？」

「もう見れると思うよ」

高原先輩が画面を指差すと、宴先輩が紅に迫っていた。

〜競技その一、障害物マラソン〜 (7) (前書き)

ようやく夏さんの才能が公開されました。

後、Skills Crossにレビューが書かれてました。

ありがとうございます。

〜競技その一、障害物マラソン〜 (7)

紅に迫る宴の姿は、悪鬼のような様相だった。

宴は紅に迫ると、後ろから背中の中首根っこを掴み、

「そおい!!」

後ろに投げ飛ばした。

その飛距離は十メートル程だろうか。

投げ飛ばした瞬間の笑みは、狂的に歪んでいた。

「獲ったあ!! 行くぜ、瀬々薙い!!」

キャラが崩壊した!?

「よくやった!! 宴!!」

上級生の幾人かが叫ぶ。

「高原さん、これは一体どういう!?!」

その光景は見ていたほとんどの人間が啞然とするものだった。

「あー、あれが“ファイバー無令効”だよ」

周りを見ると、どうやらこの会話に皆が耳を傾けている。

「というよりは、あれが、あれこそが宴、というべきかな」

「あれこそが、宴、とは?」

答えたのは相馬。

「“無令効”ってのは、身体に掛かる一切の抵抗を令⁶²¹ちて無くす。つまり、風の抵抗、身体に掛かる重さ、そして、身体に掛かっている無意識的な抵抗ですら外す才能さ」

「身体に掛かっている無意識的な抵抗？」

聞いたことも無い。

「人間って言うのは自分の身体を守るために、自分の力で壊さないように、力をセーブしてるのさ。だから、それを開放すれば莫大な力が手に入る」

「でも、それは自分の身体を守るためにやってるんだよね？ そんなものを開放したら……」

「そうさ。開放させすぎれば筋肉断裂は免れない。だけど、まあ、ここで相馬君の問いに答えられそうなんだけどね。人間ってのは怠慢な生き物さ。脳ですら、実際に使っているのは50とか70%とか言われている」

「まさか……」

「そう、宴が“無令効”を発動している間は、脳ですら100%で使う。だから、あのモードの時は気が触れるっていうのかな、とにかく色々とぶっ飛ぶ」

「色々とぶっ飛ぶって……」

でも、今までの感じからは一線を画したように宴さんが変わっている。

「なるほど、才能がというよりは、宴先輩自身が変わるんですね」
相馬が締めくくった。

「そういうことさ。まあ、ああなっちゃったら、ほとんどの人間は

止められないよね」

ハッハッハー、と高笑いする。

正直言っただけじゃなかった。

さて、話題の宴先輩と瀬々薙はといういつと、空を物凄いスピードで疾走していた。

「一つ質問なんですが」

「なんでもどうぞ」

「先ほどの話を聞いた限りだと、明らかにこの競技で才能を使うのは不利じゃないですか？ 短距離とかそういう競技ならともかく、連続使用は厳禁なんですよね」

「まあね。だけど、宴の場合はちょっと違うんだよ。昔からそういうリミットを外してるから、筋肉がそれに合うように育ってる。強靱に、何度も何度も断裂を繰り返した筋肉は大きくなるよりも密度を増している。細マツチヨってやつだね。そういう点では、あの紅桜さんに似てるね。彼は」

簡単に言うのなら、ある程度長時間なら耐えられるような身体になってるってことかな？

周りの会話を聞いていた人たちは桜さんって聞いてもわからないと思うんだが。

「ほらほら、俺の会話に聞き入ってるんじゃないかって、ちゃんと試合を見なさい」

高原さんは映像のほうを指差した。

そこでは、第三障害の上空で闘いが繰り広げられていた。

第三障害：玩具箱おもちゃばこ

大きな積み木を模した四角やら三角やらの物体が山のように積み
れていた。

これを通り越えていくのが第三障害らしい。

第一障害の壁登りを連続で繰り返されるような感覚の上に、立体
感覚まで必要とされるが、戦っている二組には関係ないのだろう。

スパイラルスピア
「嵐槍：渦々！！」

「瀬々薙い！！ 盾！！」

「言われなくても！！」

おそらく空中で空気の槍を作ったのだろう。

巻き上げる砂がない分槍が見えないが、空気を操ることの出来る
瀬々薙には分かるのか的確にどこかに壁を作って防いだのだろう。

何せ両者とも空気を使っているので、本当にしているのかどうか
見えなかった。

スパイラルスピア
「嵐槍：渦々、ツイン！！」

嵐山は両手を瀬々薙&宴のほうに向ける。

プシュウと音がしたので、おそらく槍を撃ったのだろう。
だから見えないんだって。

いくら高画質のハイビジョンテレビとはいえ、現場と映像は違う。
現場では風の流れや微妙な音の変化で槍の方向くらいは見えるの

かもしれないが、見ている側は何が何やらわからない。

「瀬々薙!!」

「わかってるわよつるさいな」

そして瀬々薙が前に手を出す。

おそらく壁を作ったのだろう。

、と、表現しにくい戦いが繰り広げられていて、観客はいまいち騒ぐことも出来ずにいた。

〜競技その一、障害物マラソン〜 (8)

両者の戦いに変化が起きたのは、約十分後のことだった。

「おおつと!？ これは番狂わせかあ!！」

実況がよく見えない戦いの最中、そう叫んでいた。

「紅選手が第四障害を突破しましたあ!！」

『はあ!!!!!』

画面で繰り広げられていたよく見えない戦いを見ていた観客全員が言っている意味が分からなかった。

「ほら、画面映して、画面!！」

大慌てで第四障害の終わりのところにつけてあるカメラの映像が戦いの右半分に出る。

そこには、弾丸のような低姿勢で全力疾走している紅の姿があった。

「無駄に飛ばずに無駄に目立たなければ、私はもつともつと速い!！」

紅はある意味至極当然なことを言って、全速力で走る。

その速度は、先程よりも速かった。

「どこまで加速出来るんだ……? 紅は……」

赤井も流石にこれは、啞然とした。

「いつの間に抜かれた!？」

「アイツ、どこ通って!？」

宴と嵐山は顔を見合わせて驚く。

「どう考えたって、この第三種目、玩具箱を地面から正々堂々攻略したんでしょ。こんなところで戦ってる場合じゃないわよ」

瀬々雑は冷静に状況を判断した。

「争ってる場合じゃないな、嵐山後輩」

「まったくですよ、宴先輩」

「赤旗先輩も嵐山先輩も馬鹿なんだから」

第五障害：泥沼

地面が沈みやすくなるようになっていて、地面を走っていく才能者は相当にきつい関門。

のはずだった。

「無駄」

一切の無駄なく。

ハードル走でハードルを飛ぶように水平に、まさしく弾丸のように紅は跳んだ。

「流石紅選手だあ!! ほとんどの障害を意にも介さず跳び越えていく紅選手!! 後残るは最後の障害だけとなってしまったー!!」
「あそこまで障害を快刀乱麻に突き抜けていくと、作ってる側がへこみますよ」

解説さんの言ってることは痛いほど分かった。

最終障害：乱雑ストレンジ

「つて、あれ!？」

紅がそこに突入した瞬間、右肩上がりにロケットのように45度で空へと跳んでいった。

「最終障害：乱雑ストレンジ」

解説の人の喋り口が重々しくなる。

「ここには10人の重力操作才能者を配置しております」

「そしてこの空間ではいたるところに上下左右の重力が発動しており、この障害はどんな才能者でも無視は出来ないものとなっています」

解説に力がこもってる。

あれ、もしかして？

「いかに障害を突っ切ってきた紅さんでも、この障害ではさぞかし苦戦するでしょう!！」

やつぱり、この解説さん、紅が障害に引っかけたことを喜んでるよね？

件の紅は、今度は物凄い速度で下に落下していた。

「まずっ!！」

紅は慌てて両足で着地する。

その衝撃で地面に少しひびが入ったのだが、紅の足は大丈夫なんだろうか。

と、思っていると紅はぐんにやりと地面に伏せたような姿勢になる。

「おっと、あのゾーンは重力加算ゾーンとなっているようです!!
いや絶対あの解説さん喜んでるよ!？」

あからさまな態度の変貌に、赤井以外の観客も気がつき始めていた。

↳ 競技その一、障害物マラソン↳ (9) (前書き)

結構長かった競技、障害物マラソンが今回、完結です!!

動け。

「紅い!!! すぐに追いついてやるからな!!!」

動け。

「最初のこの部分は上に向かって重力が発動しているのかしら」

動け!!!

「はあああ!!!」

ドン、と音が聞こえるような大きな一步を紅が踏み出した。

ドン、ドン、と一步、また一步とゴールへゆっくりと歩みを進める。

「そんなことさせるかあ!!!」

嵐山が風を使って紅に向かう。

だが、重力が色々な方向に散らばってあるせいか、上手く飛べない。

「瀬々雑!!! 足場頼む!!!」

「了解」

宴も紅に迫る。

だが、やはりこのゾーンは難解なようで、地面に思いつきりスライディングをしたり月面のようなジャンプをして思うように進めない。

この障害物マラソン、最後の最後で才能なんて関係ない根性の戦いとなってきた。

最終障害を抜けたときがゴール。

もちろん、応援にも力が入る。

「ガンバレー、紅!!」

「勝て、嵐山!!」

「宴、上級生の意地見せる!!」

「瀬々雑ちゃん、頑張って!!」

そんな声援があちこちで始まった。

「負け、られない!!」

「俺もに決まっつてんだろうが!!」

「宴で敗北なんて、むなしすぎだから!!」

「下級生でも、勝てるって証明したい!!」

遂に、ゆっくりながら進んでいた三人が並んだ。

ここは重力加算ゾーン、必然的に速度が相当遅くなる。

「つつ、あああ!!」

ゆっくりと三人がゴールに近づく中、遂に紅がゆっくりながらもゴールを目前に走り出した。

「さ、せるかああ!!」

嵐山、宴、瀬々雑も遅れながらそれに続く。

やはり三人は横に並んで一列でゴールに向かう。

このまま同着か、と思われた矢先、宴が地面に突っ伏すように倒れこんだ。

そのままピクリとも動かなくなっている。

「ファイバー無令効の使いすぎだな」

高原先輩が応援の中呟いた。

「え、あれ？」

次に倒れたのは、瀬々薙。

ふらりと急に力が入らなくなったように倒れた。

「ま、空気を固める以外は普通の女子だからな。体力が無かったんだろっ」

冷静に高原先輩は判断する。

「が、あっ……！！」

今度は足を絡ませて嵐山がこけた。

どうやら、立ち上がる体力は無いようで、うずくまりながらも立っていないでいる。

「こっちは風の才能以外ないからな。体力とかはポテンシャルが違うんだろっ。才能なんて関係ない根性の戦いのように見えて、やっぱり最後は才能の違いが大幅に出たのかな」

「違いますよ、高原会長」

俺は、この感動的なシーンで、こう言いたい。

赤井は映像を見ながら、こう語る。

「やっぱり才能なんかよりも、もっと違うところでの戦いでしたよ。最後のは」

紅が、優勝した。

〜競技の一つが終わり、紅は微笑む。〜

「じゃあ、俺たちも紅のところに行くか」

「そうじゃん、迎えてやるじゃん」

「おー」

「本当によく頑張ったわね、紅」

「凄かったですね……」

「いやいや、本当に凄かった凄かった」

「最後は見事なゴールでしたからね」

赤井、染山、十島、篠崎、天音、藤崎、相馬は立ち上がる。

「俺は宴でも迎えに行つてやるかな。じゃ」

高原先輩はその瞬間、この場から消えた。

「つて、今までここにいた高原さんは“ドッベルゲンガーもう一人の自分”のほうだったのかよ……」

画面には特別席、と書かれたところから高原さんが出てきていた。

こちらに来ていた高原さんは分身のほうだったようだ。
ていうか結構多用してない？

と、画面に映る紅の傍に、だれかが立った。

「え、あれって……」

そこには、驚くべき人物が立っていた。

「ふう……」

紅はゴールした後、大の字になって寝転んでいた。

「今年は去年にも増して、疲れた……」

「よく頑張ったよ、鍵音」

紅のファーストネームを呼ぶ男が、隣に立って水をかけた。

「え、な、何でここに!？」

紅はその男に驚いている。

「お兄ちゃん!！」

紅の傍には、桜さんが立っていた。

「おいおいあれって、桜君か!？」

間之スポ外部観戦者席で見っていた太陽が、横を向いて言う。

「マジかよ、おい、いつの間に……」

白道も呆れていた。

「いい戦いだった。流石俺の妹だ」

桜は紅にかがみこんで頭をなでる。

「えへへ……」

紅は褒められて照れ笑いする。

「えーっと、すみません。ここは一般の方は立ち入り禁止となっておりますんですが……」

そこに、警備員が桜に話しかけた。

というか、話していた場所は思い切りグラウンドだった。

「ああ、ごめんなさいね。じゃ、鍵音、表彰式も見てるから
その瞬間、桜さんが消えた。」

「あ、あれ？」
警備員も呆けた声を上げる。

「縮地、か……。やっぱりお兄ちゃんには勝てないな」
よいしょ、と立ち上がって表彰式に向かった。

この障害物マラソンは、間之崎スポーツカーニバル的には点がま
ったくつかない競技である為、その場で表彰式が行われる。

「という訳で、優勝は紅選手です!!」
一位、と書かれた表彰台の上に紅は上って、優勝記念のメダルを
掲げてカメラに笑顔で答えていた。

「優勝の紅選手、今どんな気分ですか!!」
「いやー、いまだ夢気分ですかねー。今日は勝ったって気がしな
かったです。最後まで良い勝負でしたし」
紅はえへへ、とまた照れ笑いしていた。

その後。

表彰台と取材攻めから紅はその脚力で逃げ出して、会場に着いた
俺達と合流していた。

「びつくりしたぜ、紅。本当に凄い才能だったんだな」
「へこむよ、その言い方」
むー、とむくれる紅。

というかへとへとだからか、なんだかいつもより素直な気がする。でもよく考えたら、あれだけ走ってあれだけダメージとか多そうなのに、よく普通に喋れるな。

「しかし、お前も俺が手伝った障害をポンポン越えていくからびつくりしたじゃん」

「手伝った障害って？」

染山が妙なことを言った。

「俺はあんまり間之スポで参加できないから、こつこつ裏方を手伝ってるじゃんよ。第二障害の落とし穴、あつただろ？ あれは俺が溶かして作ったんだぜ？」

「あの量をか？」

「ああ。じゃ、俺今から仕事だから」

「仕事？」

「あの会場をまた他のに作り変えるから、穴を埋めなおさなけりゃいけないじゃん。じゃな」

染山は障害物マラソンの会場へと走っていった。

「紫瀬ー、僕も手伝うよー」

十島が染山について行くように走っていた。

「さて、どうしましょう？」

「私も次の競技まで意外に時間が空いてるから、色々な出店が見たい」

紅が笑顔で言う。

この間之崎カーニヴァルではたこ焼きや射的など、色々な出店が出ている。

「じゃ、そこするか」

そこで出店を回ることにした。

く人の携帯を使ってメールをするのはやめましょう。く（前書き）

今回から、太陽、白道がメインになっていきます！。

「人の携帯を使ってメールをするのはやめましょう。」

「なら俺も混ぜてくれないかな？」

その声は後ろから聞こえてきた。

「お兄ちゃん!!」

紅がいち早くその人物をみて叫ぶ。

「さ、桜さん!!」

少し遅れて俺も振り向くと、桜さんがそこにいた。

「鍵音、見に来たぜ。君達、久しぶりだな」

桜さんは俺達に手を振る。

「こんにちは……」

天音はその存在感におろおろとしている。

桜さんは緊急時にはこの存在感が安心感に繋がるのだが、いかなせん今は、しかも天音が相手じゃ威嚇しているように見える。

「天音、そこまで怯える事はねえって」

「そうですよ。失礼に当たります」

藤崎と相馬がフォローした。

「そうだぜ？ 別に取って食うわけじゃない。ただ、あんな事件が終わってお前達学生が売店に出向けば、色々騒ぎになるんじゃないのか？」

桜さんの言うことは、一理ある。

俺達はあの“5・01事件”で警察から表彰を受けた。それに、あの事件は情報規制がなされているのか、一般人には色々と謎な点が多く、ネット上では噂が飛び交っている。

「だから、もしもの時は俺が守ってやるってことだ」

その桜さんの言葉は、とても安心感があった。

「じゃ、ちよつくら電話するわ」

桜さんはポケットから電話を取り出し、どこかにかけて。

「もしもし、父さん？」

「何だ、桜か。俺にどうして電話した？」

観客席で次の競技の時間はどれかな、と携帯端末で調べていた火切に桜から電話が掛かってきた。

「そうか、分かった。楽しんで来い。こんな状態の俺が行っても足手まといだらうからな」

「……土産はたこ焼きを頼む」

そこで電話を切る。

「桜さんからですか？」

二つ席を飛ばした太陽が聞く。

「ああ。競技がしばらく無いからどうやら出店に行くらしい」

そこでこちらに携帯端末を見せる。

それには、次の競技は数時間後のようだった。

「なら、俺達も家族水入らずで出店に行くか？」

「久しぶりにデートね」

「デートデート!!」

太陽が言い出した提案に、家族が乗った。

「なあ、ツキ」

「なんだあ？」

立ち上がって出店に行く準備をしていたところで、太陽が白道に話しかけた。

「携帯貸せ」

「自分の使えよあ」

「いいから、早く」

「しょうがねえなあ」

白道は自分のポケットから携帯を取り出す。

それを太陽は取ると、開いて何かを物凄い速度で入力し始めた。

「お、おい。何やってるんだあ？」

白道がぼかんとしている。

「これでよし。ほら」

太陽が携帯の画面を白道に見せる。

そこには、『メールを送信しました』という文字が表示されていた。

「お、おい？」

急いで太陽が携帯を取り戻して、メールの送信履歴を確かめる。

「て、てめえ！！ こいつは……」

白道が愕然とした顔で画面を見つめていた。

く太陽と月影、過去の因縁。く (1) (前書き)

今回は短めです。

く太陽と月影、過去の因縁。く (1)

『今ちょうど、たまたま、間之スポに来てるんだがな。その……、今暇だから、一緒に出店回らないか?』

それがメールの内容だった。

メールの宛先は、富士叶。

「お前舐めてんのか!？」

「言ってるの? いい加減何とかするって」

「俺はこれが終わったら本気で考えるって言うてんだろが!! 何も今やるとは言ってるねえだろうが!!」

「だーから、そういう考えが駄目なんだって。今やらなきゃいつやるんだよ」

「俺はお前のそういう所が一番嫌いだよ……。大体手前はあの時も……」

白道は本気で頭を抱えている。

「今のは酷いわよ? 白道さんには白道さんのタイミングがあるんだから」

「わ、悪い」

見た目から見れば中学生に怒られてるおっさんだった。

「ハッハッハア、お前、本当、面白すぎだよ……」

白道が腹を抱えて大爆笑していた。

「うるさいな。でもさ、美月。こいつが悪いんだぜ? 女の子から告白受けたのを今までなあなあで流し続けてきたんだから」

「そうなの？」

ジトー、とした目を見月が白道に向ける。

「い、いや！？ だってお前、あの頃はまだ16くらいだったろうが！！」

「知るか。まったく、何が『お前が自立して大人になったらまた考えてやる』だ」

「一言一句思い出すな！！」

やっぱり、ちょっと狂わされるな。

太陽。

「まったく、やっぱりあん時殺しときゃよかったぜえ……」

白道が嘆息する。

「過去を見るのはよくない、今に生きるよ」

「あん時って？」

「ほら、美月には話しただろ？ 俺とコイツが出会ったときだろうよ」

「それ、私も聞きたいな！」

葉月が話に入ってくる。

「まあ、聞いてて楽しい話じゃないと思うけど……。そうだな、話しておくか。俺のかつこいい過去の戦闘をな！！」

「あん時はかつこいいとも思えんがなあ」

あれは、十八年くらい前のことだろうか。

く太陽と月影、過去の因縁。く (1) (後書き)

次から過去編!!

く太陽と月影、過去の因縁。く (2)

十八年前：とある秘密結社のアジト。

「我々は戦争、いやクーデターをしているのは知ってるかな？ 白道君」

そこにはソファに深く腰かけ立派なひげをたくわえた男が堂々と座っていた。

室内でありながらサングラスをかけ葉巻を吸っている。

「もちろん。フリーの傭兵にとって情報は命ですからねえ」

反対側のソファには若い頃の白道が、これまた堂々と座っていた。

白道は上から下まで白いスーツを着ていた。

「でだ。我々は、悪い組織というのも、理解しているかね？」

「無論。私としては、お金さえもらえればどうでもいいですから、気にしないでいいですよ」

ニタニタと笑顔を浮かべる。

「もちろん、お金はきっちり払わせてもらう。ただねえ、我々の中に入るということはつまり、ある程度の機密も共有するということ。あなたのようなお金で動く人間は、同じように他のところからもお金で雇われやすい。つまり、あなたが裏切るかもしれないということを言っているんだよ」

「そんなことを心配するのなら、裏切られないほどの金を俺に寄越せば良いじゃないですかあ」

やはり白道は不敵に笑みを浮かべていた。

昔は今ほど治安がよくない地域が多く、内戦や紛争も多発していた。

そういう中で、金で動く傭兵というのは非常に使いやすかった。それもこの時代では、数よりも質、要は才能を持つ傭兵が相当に重宝されていた。

「ふん。そういうことを言うのであれば
カチャリと撃鉄を起こす音が聞こえる。

目の前の男が白道に銃を向けていたのだ。

「ここから生きて帰すかどうかは分からなくなるが？」

白道はお、と口を開けて少し驚く。

「随分と俺のことを安く見てくれてるな。
白眼視」
その瞬間、目の前の男の動きが止まる。

ホワイトアイズ

白道は男に近づいて、銃のシリンダーを思い切り掴む。

「解除」

そういつと、男がようやく動き出す。

「????? ……いつの間にか？」

男から見れば、白道が瞬間移動したように見える。

それこそが、俺の才能だからな。

「フ、フフフ。面白い。契約成立だ!!」

どうやらこの男、それなりに見る目があるようだ。

白道は顔が歪むほどに笑みを浮かべた。

そして今、俺は戦場にいる。

機関銃を構え、白いスーツに白いマントをつけて。

「6 m先に二人か。白眼視」
ホワイトアイズ

そういつた瞬間、先に居た二人の動きが止まる。

その間に白道は二人の足元に手榴弾を投げ込んだ。

「ジ・エンドだ。解除」

二人は白道の言葉でまた動きを始め

。

ドオン、と手榴弾の爆発音が辺りに響いた。

現代の戦争というものは、才能者の有無が戦いを決めるといっても過言ではない。

それは才能者のレベルによってもまちまちだが、白道レベルの有名な傭兵ともなると、才能者の居ない戦場であれば、一人で戦況をひっくり返すことすらできるほどだ。

今日もいつも通りの仕事をしていた白道は、妙な男を見つけた。

背丈は普通の男ぐらい。
髪は少し赤みがかかった茶色。

だが、そんなことよりも妙な点が。

背には大剣、腰には片方に三丁、両方で六丁の拳銃を構えていた。

「戦場で大剣なんて使えるわけが無いだろうがよお。それに、拳銃もなあ。白眼視」
ホワイトアイズ

その瞬間その男の動きも止まる。

「ま、高く売れそうだから貰ってやるよ」
男に向かって手榴弾を投げる。

足元に転がったところで、解除、と呟く。

これで足元で手榴弾が爆発、終了。

のはずだった。

「!？」
その男は動き始めた瞬間に手榴弾に気づき、その手榴弾を蹴り飛ばしたのだ。

「マジでえ!？」
白道の驚きの声に、男は振り返る。

「今のは、お前か？」

「だったら、何だよ。アンタも才能者かあ？」
あの反応の速さは尋常ではなかった。

「いや、俺は才能者ではない」

「スキルアナライザー
才能分析者” 赤井太陽だ」

それが俺、白道と太陽の最初の出会いだった。

く太陽と月影、過去の因縁。く (3)

スキルアナイザー
“才能分析者”。

その肩書きは聞いたことがある。

才能者がいい稼ぎ場として傭兵になって活躍している中、そういう奴らを倒す無才能の男が居ると。

才能を持った傭兵というのは、基本的に一人雇うだけで一個小隊くらいの戦力があるので安く済む。

そのため、反逆組織やテロ組織といった治安を悪化させる原因となる小さな組織に属することが多かった。

才能者としても争いが起これば起こるほど金が稼げるので、よるこんで戦う。

そういう流れを壊すとかなんとかで、そういう男が居るらしい。よく国の防衛隊などに傭兵として雇われているとか聞くが……。

「へえ、アンタが名高い“才能分析者”かい」

「お前、自分が属している組織について考えたことはあるのか？」

ん？

何を言ってるんだこいつは。

「考えたことも無い。金さえ手に入ればどこでも良いしなあ」
特に何の考えも無く言った。

「ふざけるな!!」

だが、その言葉に太陽は酷く怒った。

「お前、この惨劇を見て何も思わないのか!!」

太陽が周りを指差す。

そこではいたるところから煙が上がり、血と硝煙の臭いが渦巻いていた。

可愛らしい女の子が痛みで顔をゆがめて死んでおり。

ふくよかな老人が恐怖に顔を引き攣らせて死んでおり。

誰かを庇うように丸くなって女性が死んでおり。

体中を穴だらけにされてほうけた顔で男性が死んでいる。

「何とも思わないな。これが、戦場だろ」

そう、これが、戦場だ。

強い者が生き、弱いものが死ぬ。

運良い者が生き、運悪いものが死ぬ。

臆病者は生き、庇った勇者が死ぬ。

「そういう奴らが居るから、この世界は戦争だらけですさんでいくんだ!!」

随分とご高説のたまった男だな。

何かむかついた。

「ホワイトアイズ
白眼視」

その瞬間、太陽の動きが止まる。

「どうせそんなこと言って、何人殺してきたんだか」
白道は太陽の後ろに回る。

「俺もお前も一緒だよお」

そして、機関銃を構える。

綺麗ごとなんかほざくな。

「解除」

そして、引き金を引く。

ダダダダダ！！

連続した破裂音が響く。

「なっ！？」

その銃弾は太陽に直撃する。

だが、血が出た様子も無く、すぐに右に避ける。

太陽は壁になるような大きな石片を探し、すぐにその後ろに隠れる。

「どういうことだあ？」

無才能なんて言いながら才能者だった、とかか？

「お前にあらぬ誤解をされるのは癪だから言っておくが、これは“才武”だ。俺は正真正銘の無才能者さ」

才武。

最新の科学で出来た才能の力を移されてある道具、武器のことだ。これは一般の無才能者でも使えるため、非常に重宝されるのだが、まだその分野の発展は進んでおらず数がとても少ないため高価である。

「結局才能の力は借りてんじゃねえかよお」
「コイツは特別さ。何せこの戦場に話題の“一足飛ばし”が出るって聞いたから、全力で根性叩きなおしに来たんだよ。才能者だぜ？ 防御はこれくらい必要だ。これ入手するのにどれだけ金と労力と時間かけたと思ってるんだ」

“一足飛ばし”。
それが俺につけられた通り名だ。

まあ、この目は見たものの時間を止めるから、相手から見れば俺が瞬間移動したように見えるからな。

太陽は喋りながらも壁から出てこない。

「俺から仕掛けろってかあ？ まったくきな臭い男だぜえお前はよお。俺の才能にも一瞬で反応しやがるし」

とはいえ、このまま膠着^{リウチヤク}状態も面倒くせえ。

殺るか。

く太陽と月影、過去の因縁。く (4) (前書き)

く太陽と月影、過去の因縁。く (4)

どうせアイツの防御部分は上半身程度。

下半身と顔面が吹っ飛ぶがいい。

白道は自分のスーツの中から手榴弾を片手に持ち、ピンを抜く。

それを太陽が居る所に投げつける。

もちろんこれで倒そうとは思っていない。

白道はその次に手榴弾を二個片手に持ってピンを抜く。
それを地面に投げつける。

「ホワイトアイズ
白眼視!!!」

そう白道が言った瞬間、地面にある手榴弾の動きが止まる。

ドオン!!!

手榴弾が爆発し、太陽は転がりながら出てくる。

「ちっ!!!」

太陽は両手に一丁ずつ拳銃を持って出る。

その瞬間を見計らって、白道は目の前に持っていた白いマントを
投げつけながら、

「解除、そして白眼視」
と叫ぶ。

太陽の足元にあつた手榴弾が、不意に動き出す。

白道は近場の爆風をマントの時間を止めることで絶対の防御としているのだ。

これが白道の基本スタイル。

「おっと!」

だが、その手榴弾が爆発するかしないかの刹那、バァン、と拳銃の音が響く。

放たれた銃弾は二発。

あまりにも同時に銃声が重なって聞こえたのだ。

次の瞬間、手榴弾が爆発する。

だが、その爆発は、空中で起きた。

「おいおい、マジかよお……」

太陽はあの一瞬で手榴弾を空中へ撃ち飛ばしたのだ。

「解除」

その瞬間、空中で不自然に固まっていたマントがふわりと落ちる。

「なるほどなるほど、大体お前の才能ってのが分かってきたぞ」
太陽が不意にそう言い出した。

「ああ？」

俺の才能は、かなり分かりにくい部類に入る。

見たものの時間を止める、なんて才能は俺は人生で見たことが無い。

それに、想像するのも難しい。

だが、目の前の男は違っていた。

「おそらく、お前の才能は見たものの時間を止めるって所か。時間を止めている間の物体はいかなる攻撃も効かなくなる。ってところだろ？」

当たっていた。全て。

「おいおい、どうしてそこまで、俺の才能が分かるんだよあ……」

よく瞬間移動の才能者と間違えられることはある。てっきりこいつもそう言うかと思っていた。

「瞬間移動系とか疑わなかったのかあ？」

「周りからの話を聞いている分ではそう思ってたんだが、それとはどうも違う気がしたんだ。その疑問が確証に変わったのは、お前がいきなり俺の後ろに現れて機関銃をぶっ放したときだったな」

あの時？

特におかしなところは無かったはずだが。

「普通瞬間移動系の才能者でも、機関銃を撃つとなると狙う時間が

どうしても必要になるだろ。いきなり場所、視界が変わるんだからな。だが、あの時はいきなり撃ってきた。後ろに居ると分かったのは撃たれ始めてからさ。それは、もっと別の才能なんじゃないかと思っつてな」

油断していた。

しくじった。

「そしてさっきの手榴弾とマントで分かったって訳だ。これ以上説明は必要か？」

「いらねえよお」

なるほど、面白い。

「だがよお、それが分かったからって一体なんだって言うんだ、よお！ー！」

白道はスーツから手榴弾を両手に二つずつ取り出すと、その四つともピンを引く。

そして太陽に投げつける。

ホワイトアイズ
白眼視、と心の中で叫び、マントを硬化させる。

ドオン、ドオン、ドオン、ドオン、と立て続けに四発音が鳴る。

白道はマントの下から手榴弾を転がし、マントの白眼視化を解き、手榴弾にかける。

そして更にスーツから手榴弾を抜こうとした瞬間だった。

「遅いぜ、お前」

両目に太陽の拳銃が突きつけられていた。

「下手に動くなよ？ 撃つぞ？」

白道は、動けない。

ホワイトアイズ
白眼視の発動条件は、視界である。

見たもののみ時間を止めることができる。

今の状況では、拳銃を止めることはできても太陽自身は止められない。
腰にはまだ四丁も拳銃が残っている。

この男の早撃ちは先ほどから見ていた通りだ。

スキルアナライザー
「才能分析者」、伊達じゃないってことかよ……。だが、油断してるぜ？」

「何をだ」

「俺の手は手榴弾に直結している。つまり」

「自爆、か？」

ここまでされてはやむなし。

相手を殺せるだけまだマシというもの

「お前、そんなこと考えるタマじゃねえだろ」

「……バシた？」

みすみすこんなところで死んでたまるか。

死なばもろとも？ 糞喰らえだな。

「ハハハハハ！！」

「アツハハハ！！」

二人ともが同時に笑い出した。

「お前、面白いなあ」

「お前こそ、こんな状況でギャグかます奴だとは思わなかった」
太陽は銃を下ろした。

「いいのなあ？」

「本当は良くはないがな。ほら」

右手を差し出してきた。

「????」

「俺と一緒に仲間になってみないか？」

つまり、これは、この俺、白道月影に握手を求めているのかあ？

「悪くねえ」

俺は、その手をとった。

「報酬は俺9割お前1割なあ」

「ふざけるな、俺が9割お前が1分慈善事業に寄付が9分だ」

「骨の髄まで偽善者かよ、お前は」

「偽善者でも善を行ってない奴よりはマシだろう？」

「違えねえ」

その後、俺達は夜まで酒場で飲み明かした。

くカルテット・デート。く(前書き)

カルテットの意味としては四重奏、ていう意味です。

〜カルテット・デート。〜

「随分と懐かしい話を持ってきたもんだなあ」

「あの後、ツキの雇い主のアジトに奇襲しかけて壊滅させたんだよな」

「いや、本当懐かしいわ」

二人はうんうんと頷いている。

「お父さんやっぱりかっこよかったんだ!!」

葉月は目をキラキラと輝かせていた。

「そういうなよお」

デレデレとした顔を太陽は見せた。

「というか、今のどこにかっこいいところがあったんだろっなあ」

「やっぱり俺の娘は見る目が違うってこった」

「……親馬鹿めが」

ふう、と白道は溜息をついた。

その時、白道の携帯が震えだし、ジャズの音楽が流れ出した。

「お、メールじゃね?」

「……来たか」

白道は携帯を取り出して、メールを見る。

「叶からだろ? どうだった?」

「ったく……」

メールの内容を見て、渋い顔をする。

「……。畜生、行ってくる」

白道は立ち上がると、そのまま出て行った。

「やっと覚悟決めたか。ほら、さっさと行って来い」
手をひらひらと振って太陽は出送った。

「ふう。アイツを見てニマニマするのも良いけど、俺らも家族デートするか」

「そうね、行きましよう」

「行きましょー!!」

太陽達家族三人も出て行くことにした。

「ベビーカーステラ食べようよ、赤井!!」

「ああ、良いけど……、紅、お前随分元気だな」

「当たり前だよ、まだまだ祭りは始まったばかりだよ?」

紅は赤井の手を引いて屋台へ引っ張っていく。

「あの二人、分かってやってるのか?」

「……多分、……二人とも天然」

「ふふつ。随分と大胆になったわね」

「微笑ましい限りです」

他の四人、藤崎、天音、篠崎、相馬はその後ろを少しずつ間隔をあけながら歩いていた。

「元気だね、元気は良いよ、本当」

「祭りだしね。……宴の口調が移ったかも」
その後ろから、二つの声が。

「会長と、姫岸先輩ですか？」

高原衣と姫岸鉄が後ろから腕を組んで歩いてきていた。

「まったく二人は熱いね」

「本当、よく出来たカップルだ」

「いや、それを会長が言いますか？」

藤崎がたまらず言う。

白昼堂々腕を組んでラブラブしている二人に言われたら終わりだ
と思う。

「いやいや、もちろんそれはそうだけれど、君達だつてそうだろう
？ 相馬君と篠崎ちゃん、そして藤崎君と天音ちゃん。さしずめト
リプルデートかな？」

「!?!」

驚いたのは天音。

「お前、まさか」

動いたのは藤崎だった。

藤崎はどこからとりだしたのか、はがき程度の紙を取り出すと、
首に当てていた。

「藤崎君!?!」

「何をやっているのですか？」

篠崎と相馬もその行動にはびっくりしている。

「落ち着いてくれ、別に言いふらそうって訳じゃないよ」

「その油断は、お前が“もう一人の自分”を使っている偽者だから、ということか？」

「不当な扱いだよ、それは。俺は完全なオリジナルだ。姫ちゃんとデートするんだから。とはいっても感覚とか記憶は共有するから、問題は無いんだけどね？」

「黙れ、どうやって知った？」

「理事長から興味深い話を聞いただけさ。後、これ以上俺に殺気を向けると、俺の彼女も怒っちゃうんだけど」

見ると、姫岸は手刀を藤崎の首元に当てていた。

「ちよつとちよつと、皆どうしたの？」

「お疲れでしょうか……」

天音が女子であるという事情を知らない二人は、困惑している。

「……ほら、落ち着いてよ藤崎。……大丈夫だから」

「信じがたいが、まあいい」

藤崎は紙をそつと外した。

「言っておくが、まだお前を信じきれたわけではない」

「それくらいの気持ちが大切だよ。じゃなけりゃ、大切な人は守れないからね」

じゃ、と手を振って高原さんたちは別の出店を見に行った。

「つたく、何て男だ」

「藤崎君？」

篠崎は藤崎の変貌振りに驚いている。

「あ、い、いや？　今は気にしなくて良いって！！　大丈夫大丈夫！！」

苦笑いで藤崎はごまかした。

「今度はイカ焼き食べようよー！」

「まだ食います！？」

後ろで色々騒ぎがあったことには気づかず、赤井と紅は食べ歩きを満喫していた。

と、その時見たことあるシルエットがあった。

「おい、あれって？」

「叶先生？」

そこには担任、富士叶がいた。

叶は誰かの腕を掴んでいた。

「相手は男か……、隠れるー！！」

赤井は何かに気がつき、とっさに出店の陰に隠れる。

「ちょっと、何で隠れるのよ？」

「いや、アイツは……」

その男の姿を見て、すぐに分かった。

「白道、月影じゃねえか……」

く射的で特殊能力を使うのはやめましょう。く(前書き)

昨日は六時から寝てました。

ごめんなさい。

く射的で特殊能力を使うのはやめましょう。く

出店、白道 side。

「白道、射的やろうよ射的!!」

「……俺は太陽ほど上手くないぞ?」

そういいながらも、俺は肩を組まれているので引っ張られるように叶に連れて行かれる。

「よっ、お二人さん。一回二百円で五発だ!!」

「私が出すっ!!」

叶は台に二百円をバンツ、と出した。

「さあ、白道、やっておしまい!!」

「俺は悪の幹部かあ?」

そういいながら銃を構える白道の姿は、誰よりも様になっていた。

パン。

そう言っで一発目が放たれる。

それは見事に小さな人形に当たり、落ちる。

「やったやった、白道。一つ目ゲットだよ!!」

「だがよあ、あれくらいちっちゃいのも落ちるのがやっつと。他のは狙えないぜえ」

ふう、と溜息をつく。

と、白道の耳元で叶があることを呟いた。

「お前も悪い子だなあ」

「子供じゃないもの、大人だものー」

それを聞いて白道はにやりと笑った。

「なあ、兄ちゃん、両手で撃つていいか？」

白道はもう片方の台に置いてある銃を片手に取る。

「んー、兄ちゃんが一人で使うんらいいぜ」

その屋台のお兄ちゃんも、まさか片手でまともに当てられるとは思っていないのだろう。

「OK・交渉成立だ。じゃあ、いくか」

銃を構えると、叶がそこに手を置いた。

「衝撃シヨット、四連」

パン、と音は同時。

「ホワイトアイズ白眼視！！」

その瞬間、最初に撃った弾のほうが景品に当たる前に止まる。ついでに屋台の兄ちゃんも止まる。

そしてまた両手で一発ずつ撃つ。

「解除」

その弾が止まっていた弾の真横に来た瞬間にそう言った。

パン！！

そう音を立てて大きなぬいぐるみが4発同時に弾に当たり、右の

方に縦に1列当たり、回転しながら落ちた。

その時、何か小さな箱のようなものも一緒に落ちた。

「????? そんな馬鹿な!？」

屋台のお兄ちゃんも驚いていた。

「イエイ」

「やったなあ」

俺と叶はハイタッチをかわす。

あの時、叶は“私が弾に衝撃を加えるから、白道は白眼視で弾を4発同時に当てて”と耳打ちしていたのだ。

げんなりした屋台の店主に大きな袋をもらい、それを白道が担ぐ。

「ああ、こいつは俺にはいらねえから」

不意に白道が大きなぬいぐるみを投げた。

「え、良いの？」

「そんなの持っててもしょうがないだろあ？」

叶はぬいぐるみに顔をギュー、と埋めながら小さな声でありがと
う、と言った。

「何かいったか？」

「何にも」

白道にはその眩きは聞こえなかった。

「白道は、いつもそうだった……」

「ん？」

「あつたときから、ずっと……」

叶は、白道と会ったときのことを思い出していた。

く四人の邂逅、それは突然。く（前書き）

ここからは白道、太陽コンビと富士姉妹の出会いの過去編ですっ！！

四人の過去が全て明らかになっ！！

く四人の邂逅、それは突然。く

14年前、とある国のとある町。

「ひでえ、こりゃ酷いなあ」

「まったくだ。この町の人たちは何も関係ないというのに」
白道と太陽はある町を訪れていた。

この町で一度休憩してから、また別の場所に行く予定だった。

だが、その町はこの国の戦乱による被害を受け、いたるところに火が付けられ、血と油と硝煙の臭いが辺りに立ち込めていたようだった。

その火は今降っている雨で鎮火されているが、黒ずんだ周りが全てを物語っている。

「……ここを襲った奴らの生き残りかあ？」

「分かん。だが、気配の消し方も隠れ方も拙い。臆病者の兵が生き残った、ということだろうか。まあ、生きるということはそれだけで良いことだから、否定はしないが」

白道と太陽はこの町に入ったときから、ある気配を感じていた。

殺気。

他のステータスこそ低いものの、二人に向ける殺気だけは本物だった。

憎しみを超えた、いや憎しみを煮詰めたような。

そういう重みの違う殺意。

「面白え、殺るかあ？」

「それがお前の悪い癖だといってるんだ、ツキ」

「その呼び名はやめろよお」

二人はその殺意を意にも介さずにどんどん歩いていく。

敵。

私達の町を焼き尽くした、敵！！

まだ小柄な少女は、隠れながら前方の敵を睨んでいた。

敵は二人。

一人は背に大剣を背負い、腰には六丁もの拳銃を持っていた。

もう一人は白いスーツを着こなす男で、こっちはよく分からない。

だけど、関係ない。

私の、才能があれば。

私は未来を見れる。

ただし、五秒先だけ。

でも、これがあればどんな攻撃だって！！

そうして右手にナイフを握り締め、少女は飛び出した。

「ん？ 危なっかしいお嬢ちゃんだな」

白道のほうに鬼気迫った表情で女の子が飛び込んでくる。

「あなたの動きは、お見通し！！」

私には五秒後、私を殴りかかるのが見えるもの。

「やれやれだ。白眼視」
ホワイトアイズ

その瞬間少女は動きが止まる。一時停止のように。

「じゃあ、牙を抜かないとなあ」

白道はその状態で腕を振りかぶる。

拳が当たる瞬間に才能を解き、殴るつもりだろう。

「おいツキ、やめて」

太陽が止めようとした瞬間、その目の前を凄いスピードで何かが走っていった。

「お姉ちゃんを殴ろうとするなー!!」

それは白道が止めている少女よりも更に小さな女の子で、白道に体当たりした。

「おお!?!」

白道は普段からそれくらいじゃあ倒れないくらいの筋肉はつけていたはずだったのだが。

「ん？ あらあ?」

フラッと倒れてしまう。

「死んじゃえ!!」

白道は小さな女の子に馬乗りになれ、その子が持っていた短剣で首を刺されようとしていた。

その時、パンという銃声が響く。

太陽が拳銃を撃つたのだ。

それは見事に小さな女の子が持っていた短剣に当たり、それは弾き飛ばされる。

「あ!？」

急いで取りに行こうとするが、その首を白道に捕まえられる。

「威勢は良かったけどな、嬢ちゃん。あんなもん嬢ちゃんみたいな子供が持つもんじゃないぜえ?」

く四人の邂逅、それは激動。く

「さてと」

解除、と白道が言うと最初に飛び出した女の子が動き出す。

が、すぐに地面にこけた。

白道は止めている間に女の子を縄で縛っていたのだ。

「え！？ 何で！？」

自分の身に何が起きたのか、理解できないようだ。

「お、お姉ちゃん……」

「どうして！？ いつ出てきたの！？ 隠れてるって言ったじゃない……！」

小さめの女の子も、さっきの間に縛っておいた。

どうやらこの二人、姉妹らしい。

「さて、嬢ちゃん方。どうして俺らを襲ったんだい？」

白道が努めて優しく話しかける。

「どう見たって脅してるようにしか見えないよな……」
だが、白道の姿はチンピラのようなようだった。

「あんた達が、私達の町を襲ったんでしょ……！」

姉の方が急に二人に叫んだ。

「？ 何の話だあ？」

「成程な。その言葉で合点がいったよ。君達は俺達がこの町を襲った一味の仲間だと思ってるんだな？」

太陽が閃く。

そういうことか、と白道も頷いた。

「ふざけないでよ!! それじゃあまるで違うみたいじゃない!!」

「いや、違うから何とも言えないんだがな……」

頭を抱える。

「しょうがねえなあ。調べといてやる」

「……白道？」

「このまま疑われたままってのは嫌なんだなあ。俺はお前よりも意外に情報通だったりするんでなあ。あてはある」

白道はそのまま歩いていく。

「ふう……。まったくアイツは、素直じゃねえんだからよ。嬢ちゃん、しばらく待っていてくれ」

太陽は縄を解いていく。

「太陽、お前は残ってるお」

「何故だ？」

「嬢ちゃん達、ろくなもの食ってないだろお？ 太陽、食わせてやれ」

「食わせてやれって……」

「じゃあなあ」

白道はその町から出て行った。

「……、嬢ちゃんたち、何が食いたい？」

「は？」

「まだ食料とか残ってんのかな……」
太陽はそのあたりを漁ってみた。

「お、あったあった」
探した結果、地下室のようなところに冷蔵庫が生きていた。
どうやら自家発電があるシエルターのような部屋だった。

……だが、この家の者は隠れる前に殺されているようだったが。
「肉と魚、どっちがいい？」
「……アンタもやっぱり泥棒じゃない」
ついてきていた姉の方の女の子が言う。

「誰にも食われずに死んでいく食物を粗末には出来ないだろ。嬢ち
やん、名前は？」
「……無い」
「は？」
「思い、だせないの。町の皆が襲われたのは覚えてる。でも、どん
な風と呼ばれていたのか、何も……」

余りの精神に対する衝撃による記憶障害というのはいりえる。

「そうか。つらいことを聞いたか？ すまない」
「別にアンタに謝られなくてもいいわ。まだアンタを信じてないし」
きつい目をされた。

が、最初よりは会話が出来る。

「肉は、今は食べたくない」
「そうか、じゃあ魚料理にするな」

「ごそごそと調味料などを探す。

「ただ、名前が無いってのは呼びにくいな……」
考えながら、調理を開始していた。

く四人の邂逅、それは変革。く（前書き）

ふつかあーっつう!!!

活動報告にも書きましたが、テストが終了だよー!!!

終わったことは気にしないぜえ!!!

く四人の邂逅、それは変革。く

それから、何日か経ったある日のことだった。

「帰ったぜえ、太陽。飯まだかあ」

白道が帰ってきた。

「俺はお前の女房じゃねえっつの」

と言いながらも、ちゃっかりご飯を作っている。

「マジでえ？」

これには白道も驚いた。

「別に、あれだ。ちょうど飯時だったんでな。お前のためなんかじゃない」

「今流行とかのツンデレってやつじゃねえんだからよあ」

と言いつつも、食卓に着いた。

すでに小さいほうの女の子は料理を待っていた。

フォークを持って食事を待っている。

「あ、白道さんー」

「よあ。……そっぴや嬢ちゃんの名前を聞いてないなあ」

名前を呼ぼうとして、まだ名前を聞いていないことに気づいた。

「……無いんです、名前が」

「はあ？」

言っている意味が分からなかった。

「記憶が、ぶっ飛んじやってるんですよ。襲われているところは覚えてるけど、それより前が」

「……成程なあ、済まなかった」
そう会話していると、太陽と大きいほうの女の子が食事を運んできた。

そして四人で食事。

「白道、結局どうだったんだ？」

太陽が、白道が出かけてどうなったのかを聞いた。

「ああ、何のことは無い。この国の戦乱に乗じて押し入った軍隊くずれのごろつき共だった。始末してきたぜえ」

「え？」

その言葉に太陽以外の二人の食事の手が止まる。

「そ、それって……？」

「ん？ 言葉通りの意味だぜえ？ お前らの復讐を肩代わりしてやっただけさあ」

何の意味も込めず、ただ淡々と言う。

「そ、そんな！？ 相当な人数が居たはずよ！？」

「多分、お前ら二人が思ってるよりも俺達は滅茶苦茶強いと思うぜえ？」

「自分で言うのもなんだがな」
太陽もあわせる。

「だから、お前ら二人は平和に生きると良い。復讐なんてろくな事が無い」

「おいこら太陽。良いセリフだけもって行きやがったな！」
二人は食事しながら話していた。

「本当、だつていうの……」
お姉ちゃんのほうが呟いた。

それから少し間を置いて、ねえ、と話しかけた。

「何だ？」

「私を、あなたたちの仲間にして」

「四人の邂逅、それは提案。」

「何言いやがつてるんだあ？」

その言葉に白道は思わず面食らった。

「その言葉の意味が、分かっているのか？」

太陽の顔も険しくなる。

「もちろん、あなたたちがどんな仕事をしているのか、詳しく知りません。太陽さんの話がある程度聞いただけです。でも、私はあなたに報いたい」

その顔は、決意に満ちていた。

「嬢ちゃんが生き残れるほど甘い世界じゃないと思うぜえ」

「俺達ですら、命の危機っていうのはいつでも訪れてたからな。それは、これから先どんなに強くなってもおそらく変わらないだろう」
白道と太陽が女の子をたしなめる。

「……私達は、才能者です」
Skills

「何？」

その言葉には反応する。

「私は、インフェリアー・フューチャー“一寸先の未来”。五秒先が見える才能です。妹も、才能者ですよ」

「えっ！？ ……あ、そう、です……」

今まで静観していた妹が急に話を振られた。

「私の才能は、インパクト・ギヴァー“衝撃をあなたに”。衝撃を相手に与えるんです」

「そうか、それでちっこい方の嬢ちゃんの体当たりを受けたとき、フラツときて倒れちまったのかあ」

最初の出会いを思い出す。

「それでも、戦力になりませんか？」

「ならないなあ」「ならん」

女の子の問いを、二人は一蹴した。

「どうして!？」

訳が分からない、といった風に叫ぶ。

「だからあ、さっき言っただろうがよお。ただでさえ戦場のイロハを知らねえような嬢ちゃん達が、才能1つもってるだけで勝ち残れるって言うんなら、俺はもつともつと金稼いでるつつうのお」

「君達二人は、まだまだ将来が有望だ。俺は、一応『自分が定めた正義』に基づいて、戦ってはいるが、自分が本当に正義だとは、思っちゃいない。やっぱり俺は、人殺しなんだよ」

白道は呆れたように、太陽はすこしつらい感じで言った。

「でも……、これから先、私達はどうかやって生きていけばいいのよ!?!」

「なら、テストしてみるか？」

「へ？」

太陽のいきなりの提案に変な声を上げる。

「今から一時間、俺に一撃でも与えられたら仲間にしてやっても良い」

「おい、太陽お……」

「二人がかりで掛かって来い。心配するな、俺は無才能者だ」

太陽が食事を早々におえ、立ち上がって廃墟にでる。

「白道、時間計れよ」

「ったくよお……」

そういいながら時計を見る。

「え、一体……」

「どういうことなんですか……」

二人は時計を見ている白道に聞く。

「物好きなアイツのことだ。チャンスをやるってことじゃねえのか？ とにかく、才能でも何でも良いけど、全力で掛かったほうが良いぜえ」

そうアドバイスして、カウントダウンを始めた。

「5お、4、3、2い、1い、0お!!」

白道は手を上げて、戦いが始まった。

く四人の邂逅、それは提案。く（後書き）

提案の意味は二重、仲間にして欲しいっていうのと、テストの提案
って意味です！。

く四人の邂逅、それは不能く（前書き）

昨日はぐっすりでした。

「四人の邂逅、それは不能。」

姉妹は変わらず少しの間止まっていたが、決心したような顔をすると、太陽を睨んだ。

「良い目だ」

太陽は笑顔になる。

「てえい!!」

二人で太陽に突っ込んでいく。

「えっ!?!」

と、思ったが姉のほうが一旦止まる。

「どうしたの!?!」

妹もそれを見て止まる。

「……今のまま行っていたら、五秒後に二人とも倒されてた」

「う、そ!!」

“一寸先の未来” で見た景色は、二人が地面に倒れていたのだ。

「才能も本当か」

「お前、加減する気ゼロじゃねえかよお……」

白道は気がついていた。

人にはそれぞれオーラ、のようなものがある。

例えば、この人は安全そうだな、とかあの人には近づいちゃいけないという風な。

また、そのオーラを隠すことも出来る。

例えば、今まで安全そうに見えた人が急に豹変したり、近づいたりいけない人が実は優しかったりという風な。

気とも呼ばれている。

その気が、隠されていながらも、本気であった。

普通の人間には気づけない小さな挙動。

「心配するな、武器まで使う気は無い」

「いやあ、そういう問題じゃねえんだがなあ……。おい、嬢ちゃんたち。そこで怯えてる場合じゃないだろ？ 一時間しかねえぞ、まぐれ当たりでも狙うつもりでいけよ」

白道が止まっていた姉妹に言う。

「……まずは、私が行く!!」
姉の方が太陽に走っていく。

太陽はそれを見ながら、行動に移る。

まず右手で襟元を掴もうとしたが、それを見透かしたように姉は後ろに一歩下がる。

「読めてま えっ!?!」

だが、急に太陽の腕が伸びた。

そして襟元をつかまれ、後ろへと投げられてしまう。

「お姉ちゃんが……、どうして!?!」
「?????」

姉妹で？を浮かべている。

「簡単だ。さつきは右足を下げて右腕を出してたが、コイツ途中から右足を前に出して移動しやがった」
その説明は白道がした。

「これくらいなら、最近出てきた無才能の最強とか言う“紅鬼”あかおにじやなくなつて出来る」

最近有名になってきつつある男の名前を呟きながら、姉妹を見る。

「諦めて、たまるもんですか!!」

姉妹は立ち上がり始めていた。

「やっぱり私が行くよ!! お姉ちゃんはフォローをお願い!!」
妹が太陽に走っていく。

「分かつたわ!!」
姉は太陽を見据える。

「面白い。ちよつと、本気出してみるか？」
そう太陽が言った瞬間、姉の顔がこわばる。

「よく聞いて!! 右上、左上、中心」
「えっ!?!」

そういつた瞬間、太陽が右上と左下に手を伸ばしてくる。

だが、驚いた顔をしながら妹は華麗に避ける。

その後の中心への打撃も難なく避け、左に回りこんで太陽に拳を撃とうとした瞬間。

「避けてえ!!」

姉がそう叫んだ。

次の瞬間、太陽の左足が服に引っかかり、そのまま蹴る動作で投げられてしまった。

「拳の動作が遅い」

太陽は冷たくそう言い放った。

「本当に、一撃なんて入れられるの……」

く四人の邂逅、それは教育。く

「まったく、言っておくが」

そう言つて太陽は倒れこんだ姉妹に向かって走り出す。

「俺との挑戦を受けた時点で、合格にするつもりなんて無かったんだがな」

そうして固まっていた姉妹の首元を掴んで持ち上げる。

「なっ！？ それってどういう意味ですか！！」

その腕を振りほどこうと暴れながら太陽に聞く。

「お前達には、己の能力の自覚と死の恐怖が無さ過ぎる」

太陽は二人を地面に降ろしてから、話し始めた。

「一つ目だが、二人とも本当に俺に一撃入れられると思ったのか？」

姉妹は顔を見合わせた。

「相手の能力も分からないまま戦場に行くなんて馬鹿だけだ。相手の戦力、状況、自分達の戦力、状況を見極めるってのは第一段階だ。それも分らずに俺の挑戦を受けた。それが駄目だったのが一点」

うっ……、と気まずい顔をする姉妹。

「二つ目、これは本当に重要なことだが。二人とも俺に殺されるなんてことは無いと思ってるだろ？」

そう聞かれて姉妹は首を縦に振る。

次の瞬間、バアンと銃声が響いた。

銃弾は姉妹のすぐ後ろの岩に二つの穴を開けた。
同時に撃つたために銃声の一つに聞こえたようだ。

そして、姉の左腕と妹の右腕に一筋の血が垂れる。

「!？」

二人とも血の暖かさで気がついて見ると、そこが切れたようになっていた。

「今のは俺が撃った」

太陽は両手に銃を持っていた。

そしてそれを、姉妹の額に当てる。

「さて、質問だが。怖いか？」

妹のほうはヒツ、と小さな悲鳴を上げるが。

「ぜ、全然怖くなんかない!!」

と、姉は泣きそうな顔になりながら叫んだ。

(おー、すげえなああのお嬢ちゃん)

白道は観戦しながら、姉の方に驚いていた。

つい前に家族を目の前の銃器、その類で殺されているというのに、あそこまで気丈に振舞える精神。

その精神に驚いたのだ。

(だけど、駄目なんだろうなあ)

白道が少し残念そうな顔をしたとき、乾いたパンという音が響く。

「……？」

姉妹から拳銃を離して腰に戻した後、姉のほうを思い切りビンタしたのだ。

それに姉は思わず啞然としてしまったのだ。

「この大馬鹿者が！！ 死を恐怖しろ！！」

太陽が怒った様に、というよりは叱る様に叫ぶ。

「まったく、白道が最初にあんな言い方をするから、二人とも死ぬ気みたいな感じでかかってきていただろうが」

白道を睨みながら、今度は怒った口調で言った。

「悪い悪い、そんな意図があつたなんてさっきまで気づけなかったんだよお」

白道は平謝りする。

「二人とも、戦場では、いや、傭兵なんて世界はな、自分の身体が資本なんだよ」

太陽は教え諭すようにゆっくりと話し始める。

「それでな、こういう世界では、仲間を庇って勇敢に死んだ戦士は笑いものにされる。仲間を見捨てても敵に背を向けて生き延びる臆病者、そうやって生き残ってきた奴だけが、伝説みたいに話される」

「何が言いたいかって言うなら、死つてのは恐れなければならない。避けようとしなければならぬんだよ。いついかなるときも、生き

残ることだけを考える。敵を倒そうなんてのは二の次だ」

「でも、私達はもうあの時死んだも同然なんです!!」
姉が思わず叫ぶ。

「死んだも同然？ 何を言ってるんだ。生きてるじゃないか。その命をもう一度どぶに捨てるようなまねしてみろ、俺が許さん」

その顔は、確実に怒っていた。

「まったく、しょうがねえ男だなあ」

白道が、ゆっくりと座っていた岩から降り、太陽に近づく。

「……何のつもりだ？」

そして白道は姉妹と太陽の間に立つ。

「今回のことは俺が悪かったとも思ってるわけよお。煽ったりしちまったしなあ」

「だから、何だよ」

太陽は白道が何をしたいのかわからない。

「嬢ちゃんたち、ここからちょっと離れて、大きな岩影にでも隠れてな」

そう言って姉妹を走らせる。

「お前、テストの内容、別に人数は指定して無かったよなあ。二人がかりでかかってこい、って言ったただけだろお？」

「ああ。そうだな」

「だったら、代わりに俺が出て問題ないだろうよお!!」

白道はそう叫びながら、右の拳を太陽に向けて振りかぶった。

く四人の邂逅、それは運命。く（前書き）

今回で過去編終わり！！

……かな？

「四人の邂逅、それは運命。」

だが、白道の拳は太陽の右手に止められていた。

「流石あ」

「手前のやりそうなことくらい、わかるっつもの」

そう一言会話すると、二人ともが後ろに下がり間を取る。

「決着つけてみるかあ!？」

白道は服から手榴弾を取り出し、ピンを引く。

「久しぶりだな」

太陽は腰に手を当てる。

白道が手榴弾を投げると、それはゆっくりと落ち地面に当たる。

それが戦いの合図だった。

太陽は腰から両手で銃を取り出し、手榴弾を撃ち抜く。

その衝撃で空中に跳ね上げられると、そこで起爆した。

「これで、終わりだあ!！」

だが、爆発している間に白道は太陽に思い切り迫っていた。

「ホワイトアイズ
白眼視!！」

その瞬間、太陽の動きが停止する。

白道はその間に腰を思い切りねじり、力を溜め、

「終わりだ、解除」
その瞬間、太陽は動き出すが時既に遅く、白道に殴られてしまっ
た。

「つつう……、手前……。この二人が俺達の仲間になるってのに、
……賛成なのか？」

太陽は殴られた脇腹を押さえながら、うめくように言った。

「賛成に決まってるんだろ？面白そうじゃねえか。今はまだまだ青
いけどよ、いい目をしてるとおもわねえか」

「おもわねえよ……、ったく。しょうがねえ、約束は約束だ」

太陽はそこで姉妹にの方を向いて言う。

「……仲間になるか。ただし、しばらくは基礎的な訓練をしなきゃ
ならんがな」

『やったあ！！』

そんな声が岩陰から響いてきた。

「そうだ太陽、一つ言い忘れてたことがあるんだけどな」

「何だ」

「お前の持ってた才武、あの服状の機関銃でも防げたやつな。ぶっ
壊れたから」

「……はあああ！？おいこら白道！！あれはもう手に入らない
ような代物だからあんまり乱暴に扱うなって言ったよな！！」

実は白道はこの街を出るとき、太陽に才武を借りていたのだ。

「いや、敵の攻撃思いのほか強かったわけよお。いいじゃん、嬢ちやん達の復讐がたった才武一個で済んだと思えば」
「それが謝ってる態度かあ!!!」

『アハハハハ!!!』

その会話を聞いていたのか、姉妹が笑い出した。

それから数日たったある日のこと。

「そつだ。本当に正式に仲間になったんだし。二人にプレゼントをしようか」

太陽は白道の食って掛かる態度を一変して、姉妹に向かう。

「プレゼント、ですか」

「そう、すっごいプレゼントだ」

「俺の件はもう許してくれたのかあ?」

「お前とは後できっちり話つけるからな」

白道にキツと目線を送ってから、また笑顔になる。

「俺は今から、名前をプレゼントしよう」

「え?」

「君は、富士祈^{ふじいのり}。妹ちゃんのほうは、富士叶^{ふじかなえ}だ。日本名だがな。嬢

ちやんたち日本人でも十分大丈夫だろうし」

「富士……祈……」

「富士……叶……」

二人は、いきなりのプレゼントに驚いている。

「言っておくがあ、俺もちゃんとこれ考えるのに一役買ってるからなあ?」

白道も三人の間に入ってくる。

「苗字の富士^{ラストネーム}つてのは、日本にあるでっかい山、富士山のこと。今度写真をもってくるから見ると良い。すっごく綺麗な山さ」

「へえ……」

太陽の説明に、姉は聞き入っていた。

「名前^{ファーストネーム}は俺が考えてなあ。まあ、簡単に言うなら祈りが叶うつてのから取ってきたんだ。嬢ちゃんたちの願いとかも、成就すりゃあいいかと思つてなあ」

「……、ププ」

「おい妹ちゃん、何故そこで口を押さえて笑い出すんだよあ」

「いや、ロマンチックなんだけど全然合わないな……」

「……たまに良い事言つとすぐこれだなあ……。太陽に言つたときも笑われたしよあ」

白道はがっくし（おそらくはそこまでがっかりはしてない）と肩をすくめた。

「……そこまで私たちのことを考えてくださつて、私はとても嬉しいです」

「私も嬉しいよ!!!」

姉妹、富士叶と富士祈は姉妹合わせて感謝の意を露わにする。

「気にするな。俺達はもう」

「仲間だしなあ」

太陽と白道も、声を合わせる。

“^{エウリーセイバー}祈りて叶える月と太陽”は、このとき発足した。

く月は甘く、願いを叶える。く（前書き）

少し遅くなったのは、この話に手間取ったからで。

激甘です。

読めば分かります。

他に書いてる恋愛小説があるんですが、それが影響したのかな……。

く月は甘く、願いを叶える。く

「いつもいつも白道は私の知らないところで凄いことしてるんだよね」

「ん……、いや、そんなことないぜえ？ 想像してるほどじゃねえよお」

「それにその手柄とか、お土産とかも、全部私やお姉ちゃんにくれてた」

「あれは別に、俺がいらなかったからなんだがなあ……」

白道は屋台が並ぶ中で、頭を抱えていた。

「白道」

その言葉は、白道のしどろもどろな言葉を止めるには十分なほど、強い一言だった。

「私はもう、子供じゃない」

昔の約束。

「白道、その、大好きなの……」

まだ幼かったときの、いやそれから変わっていない告白。

白道は、それにちゃんと答えてくれたよね。

いや、はぐらかされたのかな。

「……、驚いたな。青天の霹靂へきれきとはこのことだ」

あのときは思わず白道の口調も鈍^{なま}らなかつたよね。

「なあ、叶。それは」

「本気!!」

生半可な気持ちで告白なんかするはずないもの。

白道は私の目を見て言ったよね。

「……、少し、時間をくれ。それは俺とお前にとって大切な時間だ。叶、お前が大人、28くらいになっても俺のことを好きでいたなら、いや、好きでいれたなら、そんなときは本気で答える」

って、言ってくれたよね。

「子供じゃない、その言葉の意味だって、白道なら分かるでしょ」
「……、俺だって、忘れていたわけじゃねえ」
やっぱり、白道はあの日のことを覚えていてくれたようだ。

「お前、どうしてこんなおっさんに惚れてんだよ、まだ20代だろ？」

「28だもん、もうすぐ三十路よ？ それに、約束までちゃんと好きでいたよ？」

「俺は38だ。ったく、10歳も離れてんだぜ？」

「干支は一回りしてないもの」

「だがよお!!」

「……私は、ずっと本気だよ。白道、ちゃんと答えて。振られたら、」

ちゃんと諦めるから」

その一言は、少し涙が混じっていた。

「ったく。泣くんじゃねえよ。可愛らしい面が台無しになっちまうだろうが」

白道は、叶の目を拭う。

「後悔しないか……………、なんて今更言っても聞かないよなあ」
ふう、と大きな息をつく。

「……………、だ」

「え？」

白道はあまりにも小さい声に、何を言ったのか分からなかった。

「ああもう。好きだつってんだよ馬鹿野郎!! ほら、これ!!」
じれったくなつたのか、白道はそこが祭りの出店の真ん中であるということも忘れて告白を叫んだ。

そして、ある袋から何かの小さな、手に収まるくらいの箱を取り出した。

「さっきのでかいぬいぐるみをとったときに一緒に落ちた箱だ。ほら」

その箱を白道が開けると、そこにはプラスチックの安っぽそうな指輪が。

「今はこんなものしか用意出来ねえが……………」
頭をかきながら、白道も少し赤くなっている。

「……っておい、叶!?!」
返事がないのが気になって箱から視線を上げると、叶は目からポロポロと涙をこぼしていた。

「へ、嘘……。本当に……。夢じゃ、ないの……」
叶は指で頬をつねっている。

「痛い、夢じゃないの、これ……」
そう呟いて、何故か一気に座り込んでしまった。

「どうした!?!」
白道も思わず心配する。

「い、いや……。その、ね……。腰が、抜けちゃった……」
エへへ、とはにかみながら答える。

「昔からこんななんだから……。ったく、後悔するなよ？ 俺とつるんでろくなことないのは知ってるだろ?」
「むしろ断られることばかり考えてたから……」

だってこんなにはぐらかされたんだもん、と少し怒った視線を見せる。

「いや、まだまだ先の長い少女の夢を敵を討かたきってくれたっただけのおっさんなんて幻想でぶち壊すまねは本気でしなくなかったんだよ……」

お前はあの頃から可愛らしかったし、今だって十分に可愛いからな、と後で付け足した。

「そう言ってもらえると嬉しいよ……」
ずっと叶は笑顔が変わらない。

「ところでだな」

「何？」

「こんな公衆の往来でしゃがんだ状態で涙ながらに語られると俺が
まずい」

「へ？」

気がつくのと、周りは二人を避けて円状になっていた。

「おんぶと肩車とお姫様抱っこ、どれがいい？」

「今日くらいはー、お姫様抱っこ……！」

「何の迷いも無く一種の羞恥プレイを選んだなあ……、後悔すんな
よ？」

「もちろん……！」

白道はそのまま叶の身体をひょいと持ち上げる。

「軽いな」

「気を使ってますからー」

そして何事も無かったように円状になっていた人ばかりを抜けて
いった。

く月は甘く、願いを叶える。く（後書き）

……。

甘いな…！

考えていたこととはいえ……、甘い…！

くじらくじらと絡む、愛情の輪。く（前書き）

うーん。

何か展開がそれるよつに変わってきました。

くどくどと絡む、愛情の輪く

「え？ どういう状況なのこれ？」

「白道が、指輪渡してた？」

赤井と紅は出店の陰に隠れて白道と叶の様子を見ていた。

「面白くなってるな」

「……ええええ？」

「おやおや」

「あらあら」

気がつくのと、出店の後ろには藤崎、天音、相馬、篠崎もならんでいた。

「って、お前らー!!」

「どうして!？」

皆に気がついた赤井と紅が、隠れていただけに相当驚く。

「お前らがラブラブで気がつかないのが悪い」

「そんなことより……、こんな状況に樹野君が……、気がついたら大変」

十島が興味深いことを言う。

「樹野……、って確か」

叶先生が好きとか……。

「ってまずいよー!!」

もしもお姫様抱っこなんてしてる姿が見られたら……。

「そのまずいって状況、実際に起きちゃってるね」
赤井の声に、後ろから合わせる声が。

「会長さんまでいたんですか。で、そのまずい状況ってのは？」
「いや、ここから100mほど向こうにその件の樹野君が持っている
たたこ焼きを落として驚愕しているよ」

うわ、惚れた腫れたの修羅場じゃん。

「その上、白道さんを睨んでいるね」

「完璧にチェックメイトじゃねえか!!」

「ア、アンタ、誰なんですか？」

樹野は驚愕したように目の前のカップルを見る。

「樹野？」

「おいおい、大丈夫か？」

樹野の周りに居た友達が思わず息を呑む。

樹野の気迫に。

「ん？ 少年？ どうしたんだい、人を射殺するような目で見て」
「あれ？ 樹野君じゃない？」

叶先生の反応から、想像はしていた。

確かに気は無いと分かっていたけれど。

男として、やらなきゃならないことが出来た。

「叶先生、その男は？」

「よくぞ聞いてくれました！！ 彼が私のフィアンセなんだよ」

富士叶は白道月影のことを追い駆けすぎて、周りからの好意に気がついて、自分に向けてくれていた愛情には全く気がついていなかった。

ピキツ、と空間が割れるような、そんな音が周りに響いた気がした。

その音に気がついたのは、樹野、樹野の友達、白道、周りに居た人々、そしてこの状況を見ていた高原だった。

「あなたが誰なのかは私の知るところではありません」

樹野は白道に指して宣告する。

「今、俺に話してるのかぁ？」

白道は、樹野の身にまとう絶大な覚悟を身体に受けながら、それでも飄々と構える。

「ですが、意地です。ただの。男と男の、決闘をここで申し込む！」

樹野は、白道月影に宣戦布告した。

交じり合うはずの無い、通常の世界で生きてきた男と裏の世界で

生きてきた男。

それが、一人の表と裏を経験した女を前に、絡み合うこととなった。

♪愛情決闘開始！♪（前書き）

更新遅れました……。

後、しばらくこれから更新ペースが遅れます。

「愛情決闘開始！！」

「もう立てるだろ」

「……ばれちゃった？」

白道は、ゆっくりと叶を地面に降ろす。

そして、樹野の方を向いた。

「少年、随分と大層な口を叩いてくれるなあ！！ その言葉がどれだけ重いかちゃんと分かってんのかあ！！」

白道は、樹野と同じように覚悟を身に纏う。

「当たり前です。男が、決闘を申し込んだんですから。ここであなたの気迫にびびって逃げ出すような真似はしませんよ」

樹野も平然とその覚悟を受け流すように立つ。

「そうか。ならかかって来いよ。才能でも何でも使ってなあ。心配するな、殺しやしねえよお」

白道はそう言って構える。

おそらく最後の一言は叶に言ったのだろう。

「いや、樹野君の才能を舐めないほうが良いと思うよ……」
その声が白道に聞こえるか聞こえないかの刹那、樹野が動く。

「アウェイハンター
“遠当破撃”」

樹野はその場で何故か掌底突きを打つ。

「何をしてぶっ！？」

最後の一言を言い終わる前に、白道が仰け反った。

白道は顔面を押さえて、少しよろめく。

「一体何をしやがった……？」

疑問に思っている間に、樹野はその場でまた動く。

樹野はその場で回し蹴りを放つ。

そうすると、また白道がまるで顔面を蹴り飛ばされたかのようによろめいた。

「意外に丈夫ですねっ！！」

「つつ畜生、白眼視が使えりや楽なんだけどなあ……。何が起きてるんだあ？」

白道が樹野を睨むと、樹野はかかと落としを放っていた。

その瞬間、右肩にずしりと重みが走る。

「……そりゃ、何だ？ お前がそこでした攻撃が俺に何故か直撃するって才能かあ？」

「まあ、そんな所。詳しくは教えないけど」

「俺を舐めすぎだなあ」

ドン、と大きな音を立てて白道が突進してくる。

その音に驚いて樹野が一瞬固まる。

「戦い慣れして無さすぎだなあ。その程度で敵から目を逸らすとか、なあ……！」

白道は間を一瞬で詰め、樹野に近づくと右手で樹野の顔面を、左

手で腹部を押すように突く。

「!?!」

その二撃で身体がぐるりと半回転して、地面に叩きつけられる。

「面白い才能なのは認めるし、その覚悟も気に入ったあ」
地面に倒れている樹野を見下ろしながら白道は呟く。

「ただ、俺より弱いのが残念でままならねえなあ」

く愛情決闘集結！く（前書き）

この樹野君、Skills Crossにすこし出てるんですよ？

第二章のくくく二人は学校へ向かい、今度は変人に出会うく（2）
でちよっと出てます。

く愛情決闘集結！く

「悔しいかあ？」

「そりゃ、もちろん……」

樹野は、泣いていた。

顔を地面に向け、決して人には見せず。

「いきなり来た男にとられるなんて……、思っても見ませんでした……」

「ま、俺もお前とは初対面だしなあ。いきなり目の前に男が現れて決闘申し込まれるから俺」

「……そうですね」

少しおかしいのか、ハハツと笑う。

「土台無理な気はしてました。元々人を好きになるような人のタイプじゃない気がしてましたから。でもまさか、ずっと前から心に決めてた人が居たとは、思ってたんですけど」

「言つな。こっ恥ずかしいだろお」

白道は顔を少し赤らめる。

「それに、ただの体術で私が負けるとは思ってませんでした。拳法も習っていたんですがね。それに才能も簡単に凌駕されちゃいましたし……」

「それで蹴りがあんなに綺麗だったわけか。だがな。綺麗であつても重みがねえ。ま、そんなに実戦がほいほい転がってるほど日本は治安が乱れてねえだろうしなあ。あ、才能は面白かったぜえ？ アウェイハンター、だっけかあ？」

「遠当破撃^{アウエイハンター}」のことですか？ あれは自分が見た空間に自分の動きを映す、まあ簡単に言えば見える範囲なら遠距離でも攻撃できる体術の才能って訳です」

樹野は片膝をついて座り込む。

「ところであなた、お名前は？」

「白道月影、白き道に月の影は映える、で白道月影だあ。お前は？」

「樹野孝博。樹に野原の野、親孝行の考に博覧会の博だ」

「覚えとく。気に入ったんだあ。よろしくなあ」

白道は樹野に手を差し出す。

「まったく、その度量の深さは凄い人だと思えますよ」

その手を握り、樹野は立ち上がった。

「意外に上手くまとまったみたいだね」

高原が立ったままで呟く。

「ふう、一時はどうなることかと……」

「本当に怖かったわ」

「いつ見ても修羅場は怖いな」

「……見たこと、あったっけ……？」

赤井、紅、藤崎、天音は肩をなでおろした。

「良かった良かった。おや、もう時間ですね」

「ん？ 何の？」

「いえ。私が競技に出るので」

後ろでは相馬と篠崎が、どうやら相馬がもつすぐ競技に出る時間
帯らしい、という話をしていた。

「何の競技に出るの？」

「いや、来ても面白味は無いと思いますよ？」

「関係ない。何に出るの？」

「ただの……、徒競走ですよ」

♪愛情決闘集結！！♪（後書き）

次からは相馬君。

「相馬は自虐的に、語る。」

「私の才能を生かせる様な競技はあんまり無いのですよ。ま、普通にやっています」

相馬は片手を上げて去って行った。

「……見といてあげるわよ」

その後ろを篠崎が着いて行った。

「才能も使いませんし、本当に面白みの無い、それこそ何十人と走る中の1レーンです。探すのも大変でしょう？」

「そんなの関係ないじゃない。まるで見て欲しくないみたいない草じゃない」

険悪な雰囲気になってきた。

ということ察して、赤井、紅、藤崎、天音はその場から離れた。

高原さんと姫岸さんはもっと前からこの雰囲気察していたようで、もう居なくなっていた。

「どうしてそんなに自分を卑下するの？ アンタはもっと強いはずよ？」

「弱いですよ。ここにいる誰よりも、私は弱い。一ヶ月程前に話しましたよね。私の過去。ほんの少しですが」

「交通事故で亡くなったって言う話？ でも、それはもうどうしようもないじゃない。相馬がそのことで悔やんでるってことだけで、

許してくれると思うわよ」

「少々、違うんですよ。真実は。本当のことを申しますとね。私の心無い一言が彼女を傷つけたんです。その後彼女は走り出しましたね。それを追い駆けたのですが、悪いタイミングでトラックが走ってきていたんです。彼女はそれに気づかず、交差点に飛び出したわけですが……」

「それで、亡くなっちゃったの？」

聞き辛そうな顔をしながらも聞く篠崎。

「私はそれを、本来であれば止められたんです。私もすぐ交差点に辿り着いていて、思わず交差点に飛び出していました。彼女を助けるために」

「もうトラックはすぐそこまで来ていました。そのトラックを見て驚いて彼女は硬直してしまっていたんです。その背を抱えて向こうの端まで走るつもりでした」

「ですがその瞬間、私の手は彼女の身体をすり抜けたんです。分かりますか？　今まで発動もしてこなかった才能、“通行許可証”^{オルパス}が、自分の身に迫った危機に対して彼女を見捨てて発動したんです」

「そのまま彼女はトラックに轢かれました。轢き逃げです。その犯人は今も見つかっていないそうです。私は、トラックをすり抜けるようにして助かりました。当時はそんなことが起きたなんて思っても居ませんでした。これが、事の顛末です。私は、犯人はもちろんですが、自分が何より許せない」

「私はトラックの運転手の顔を覚えています。あの男の顔は愉悦に

歪んでいました。まるで人を撥ねることを分かってやっていたような顔でした。何故あんな顔だったのかは分かりませんが。最初はその男だけを恨んでいました。その頃は、まさか自分に才能があるなんて思っても居ませんでしたから。そして、こういう才能があると分かったときに、気づいたんです。私は、自分の過ちを人のせいに行っている」と

「あのトラックの運転手はもちろん許せませんが、あれだけ好きだった彼女を、自分が助かりたい一新で見捨てた、自分が一番許せない」と

「私は人に祝福されるような人間じゃないですよ。篠崎さん。他人より自分が可愛い、ね」

相馬はそう言ってそこから去って行った。

その背には来るな、と言わんばかりの気が滲み出ていた。

「馬鹿野郎」

篠崎の声が少し響いた。

く篠崎は決意し、消えた桜はここにあり。く（前書き）

更新がドンドン遅れてますー。

ごめんなさい。

「篠崎は決意し、消えた桜はここにあり。」

「……お、終わったのか？」

隠れながらも様子を見ていたが、どうやら相馬は一人で行ってしまっただけらしい。

「珍しいわね、相馬君が女子にあんな態度をとるなんて」と、紅が不思議がる。

「そうだな、とか、珍しい……とかも言いつている。」

「まあ、相馬君にも色々な事情があるってことでしょうよ。覗き魔さんたち」

と、いきなり目の前に篠崎が現れた。

驚いてみんな硬直する。

「高原さんと姫岸さんはこの場から居ない。」

「ああもう！！ どうして私がこんなことで悩まなきゃならないのよ！！ 訳わかんない！！ 私は深窓の令嬢だったはずよ！！」

明らかに深窓の令嬢らしからぬ叫びを繰り返す。

「篠崎、大丈夫？」

「おもわず友達の紅が聞き返す。」

「大丈夫よ、私は」

「口調だけは落ち着いたものになる。」

目はキラキラと光っている。

「それ多分大丈夫じゃないと思う……」

「ちょっと行ってくる。あの馬鹿野郎に」

そのまま篠崎は走り去ってしまった。

「……元気だな」

「元気すぎた気がするけどね」

「あの篠崎が、叫ぶなんて」

「……想像以上……」

篠崎と関係の薄い赤井と藤崎と天音はインパクトを、関係の深い紅は少し落ち着いてきていた。

「どうでもいいけどさ」

「？ 何？」

そこで赤井が口を開いた。

「紅、桜さんは一体どこに行ったんだ？」

「凄いです、桜さん！！ お前ら、礼！！」

『ありがとうございましてあー！！』

桜は、体育会系と思しき集団に思い切り敬意を持って礼をされて

いた。

「つーか、ちょっと手伝いしただけだろ？」

桜は出店に入る直前、その視力で設営に手間取っている人ばかりを発見したのだ。

それで、ひょいっとその問題を解決していたのだ。

すぐに合流できるつもりで何も言わなかったのだが、その後も色々手伝わってしまい、赤井達に合流できずじまいであった。

「いやいや、あの体裁きは一体どうやって鍛えてるんですか!! 2mほどを軽々と飛んでませんでしたか!!」

「あー、努力すれば出来る。……多分」

「それで才能者じゃないなんて……、すごすぎます!!」

「気にするな」

このままではずっと質問攻めにされそうな気配を感じた桜は、その言葉とともに走り去った。

「……、学生つてのは若いな、まったく」

結局出店を一人でぶらぶら回ることになってしまった。

この後、間之崎学園では『桜伝説』とよばれる化物じみた身体能

力を持つ人の話が出るわけだが、それはまた別の話である。

く篠崎と相馬は仮面を放り投げる。く（前書き）

相変わらず久しぶりの投稿です。

「篠崎と相馬は仮面を放り投げる。」

「その馬鹿、止まれ」

相馬の前に、篠崎が立ちふさがった。

「何故か分かりませんが、今の私は機嫌が悪いですよ？」

相馬の目はいつもの穏やかなものではなく、剣呑としたものだった。

「ざけんじゃないわよ、私の機嫌は最悪よ」

「？」

普段では考えられない口調だった。

「手前もちったあ本気で喋ってみなさいよ」

「……何を、言ってるんですか？」

相馬はその迫力に思わずたじろぐ。

「敬語使って上手く接しているように見せかけて、その実周りから少し引いたところで達観して、カッコいいとでも思ってるの？」

「過去に縛られてるのがカッコいいか？ あんたがやってるのは後ろ見ながら立ち止まってるだけよ。進んですら、逃げてすらいない。前向いて自分の足歩いてみなさいよ」

「見ててイライラすんのよ馬鹿野郎！！」

最後に篠崎はそう叫んだ。

「そこまで……、言わせてしまいましたか。深窓の令嬢はどうしたんですか？」

「私はここまで見せたわよ。アンタは、その程度なの?」

「……………」

相馬は沈黙する。

そして、重い口を開いた。

「……よくこれが昔の私の口調からかけ離れているものと分かりましたね」

「だって、似てるもの。私とアンタ」

「似てるとは?」

「周りから一歩引いて、静かにおとなしく、波風立てずに生きていこうとするところとかね。結局、人とのふれあいに少し怖いものを感じてるだけなんだろうけど」

「なるほど、そうですね。いや、そうか。そうだよな」

相馬は一人で頷きながらぼそぼそと言う。

「昔の私……、いや俺は結構不良だったんでな」

その口調は、少しずつ荒くなっていく。

「見せたわね」

「貴女になら、いや、お前にならいいと思ったただけだ」

「少し今の口調が抜けきれてないわね」

「ずっと同じ口調を試してみたら分かりますが……、意外と口調つてのは使い続けると慣れるもんでな。もう身体の一部みたいなものになっってきた」

「……激情にまかせて言う私とは少しタイプが違うわね」

「そうだな。俺もそういう風に、ちゃんと感情を消さずにいれば良かったんだがな。ただまあ、元に戻すとやっぱりすっきりするもんがある」

「ま、そんなことがあったら私も歪みそうだけどね」

「お前激情を溜め込むタイプ、俺は激情を見なかったことにするタイプって訳だ。お互い苦労すんな」

「アンタは何でもかんでも背負いすぎよ。見なかったことになんかしてない」

「褒めても何もでねえよ。ったく、女子にここまで言わせるたあ、俺も空しいもんだな」

「空しくないわよ。元ヤンさん」

「そう呼ぶな。昔はヤンキーつつよりはただのチンピラにすらなれてなかった餓鬼だった。だから言ったる、ただの不良だ」

「今のはジョークよ。あ」

「何だ？」

「徒競走、何レーン目なの？」

「相馬、ファイター!!」

篠崎は相馬が走る5レーンを食い入るように見張っていた。

そして、相馬の番。

「おやおや、どうも目立つのには慣れてないのですよね」

……貴女の目の前には見せましたが、私はこの口調を変えるつもりはありません。篠崎さんの前では少し別かもしれませんが。

篠崎といったん別れる際、相馬はそう言った。

……そう、なら私もいつもどおり深窓の令嬢として生活するわ。相馬の前だと別かもしれないけど。

篠崎はそう返した。

「昔までのこの口調とこれから話すこの口調では、重さが違う」

「過去も現在も、全部受け止めて、逃げない」

「そついう意思表示ですよ」

そして徒競走の空砲が鳴った。

「全員集合、学年種目開催！！」

「赤井、もうすぐ学年種目、クラス対抗の競技の時間よ」
「もうそんな時間か」

出店を回っていると意外に時間が経っていたようで、もうすぐ学年種目の時間だった。

「流石ね、相馬」

「お褒めいただき光荣です」

その時、相馬と篠崎は競技を終えたのか、こっちに向かって歩いてきていた。

「あ、相馬君。どうだったの？」

紅が聞く。

「それがさ、意外に速くてびっくりしたわ。ごぼう抜きで一位とったもの」

「紅さんに比べればそれほどでもありませんよ」

どうやら相馬は徒競走で一位をとったようだ。

「みんな、次は学年種目だから、気合入れていくよ！！」

『おー！！』

紅の掛け声に、皆があわせた。

学年種目：棒倒し。

自分の陣地にある4、5mほどの棒を倒されてしまうと負け。制限時間は10分。棒は三本あり、制限時間までに棒が生き残っていた本数でも勝敗が決まる。

棒を守る人と攻めに行く人のバランスが肝心。

らしい。

種目の説明を受けた後で、ある紙が配られた。

「これは……。配置と役割が決まってんのか」

その紙には戦闘場と棒の位置、そして名前がサッカーよろしく色々な場所に書かれてある。

「赤井は迎撃担当ね。敵の攻撃を防御する」

「そういう紅は遊撃手か」

「まあ、基本は攻撃だけどね」

「俺は防御か、天音は攻撃。ま、頑張れよ」

「……不安……」

「相馬は攻める方なのね」

「篠崎さんは遊撃手パターンですね」

配置と役割について話し合っていると、染山と十島も戻ってきていた。

「やっと俺達の競技か、暇だったじゃんよ」
「頑張るよー」

クラスみんなも徐々に集まり、会場へ出発することになった。

「紅、さっきのマラソンでの借りは返させて貰うぜ!!」
途中で対戦クラスである2ーBと会った。

そこで嵐山が紅に向けて指を指してきた。

「まだ懲りてないみたいだね、私もまだまだ大丈夫よ?」

よく考えたら、さっきマラソンを走ってきたとは思えないほど元気だな、紅。

「流石はあの桜さんの妹ってことなのかな……」

そして俺達は、学年種目、棒倒しへ。

く全員集合、学年種目開催！く（後書き）

次からは棒倒し！！

く棒倒し開戦！〜）（前書き）

テストが終了しました！！

活動報告では説明していましたが、こっちでは説明し忘れてました……。

という訳で、今日からはちゃんと更新できますよ！！

く棒倒し開戦！〜

場所はスタジアムのような場所だった。

……これ高校生の運動会か？

と思えるほどのギャラリーが集まっていた。

世界選手権でも今からやるみたいな燃え上がり方だった。

と気がつく和对戦クラス、つまり2ーBの面子も集まっていた。

「紅い！！」

はい、いつもの嵐山です。

「つーかあいつもあいつで体力馬鹿だな。つい前にマラソンで倒れるほど走ってなかったか？」

「そんなものは関係ないぜ！！」

……これが若さか。

「でわでわ、両チーム配置についてくださいっ！！」

少しテンションが高いのかキャピキャピした司会の声だった。

「今回この棒倒しの司会、及び実況をさせていただきますのわっ！

！ 放送委員中等部三年紫波銚しわかすがいがお送りさせていただきますっ！！」

茶色のツインテールと手に持ったマイクをブンブンと振り回して説明する。

俺達も急いで場所につく。

「でわ用意はいいですか？ 制限時間は十分ですよっ！！」

騒ぎ合っていたスタジアムが、その声で静寂に包まれる。

俺達も必然的に静かになる。

ただ、その静寂はただの静寂ではない。

興奮を内に孕んでいる、そういう異様な雰囲気に包まれる。

思わず汗が流れる。

口から少し笑みが漏れる。

何だこれ、こんな中で紅は競技なんてやってたのか。

こりゃもう祭りだな。

「3、2、1」

どうやらそれは、俺以外の皆も感じているようだった。皆一様に、楽しんでいる。

「スタートッ！！」

ピーッとホイッスルの音が響き渡る。

『行くぜええええ！！！』

俺達のクラスと敵のクラスの突撃兵がぶつかりあう。

てっぽうだま

それは比喻でもなんでもなかった。

俺の頭の上と横を、火の玉やら岩石やらが飛んでいく。

と同時に、相手側からも同じようなものが飛ぶ。

それは両クラスの間で衝突し、轟音を撒き散らしながら派手に碎ける。

その音を合図に、両クラスの先陣にいた生徒、本来の意味での突撃兵が走り出した。

『おおお！！！！』

スタジアムの観客からも大きなどよめき、そして歓声が上がりはじめた。

「俺は、迎撃、かつ！！」

ぶつかり合う攻撃から炎の流れ弾が棒へ向かってきた。

それを触れることで消す。

「流石ね、赤井君」

俺の横に立ったのは篠崎だった。

「いや、あの状況に比べれば……」

目の前の激戦区ではついに、人が飛び始めた。

「ははははは！！」

「アツハハハ！！」

明らかにその笑い声は嵐山と紅のものだ。

「吹っ飛ばえ！！！」

嵐山の“嵐の射出”ジェットストリームで、人が吹き飛ばす。

「アンタこそ！！！」

紅の“超跳躍”ホッパーで、風などものともせず嵐山に突っ込んでいく。

「気のせいかな？ 俺には人が吹っ飛んでる中心に北斗 拳のオーブニングのシルエットみたいなカンフーキックしてる紅が見えるぜ？」

「……これが間之スポよ、とってしまえばそれでおしまいだけれど」

ふう、と溜息をつく。

そのころ、前方の激戦区の戦況は目まぐるしく変化していた。

何故か俺達のクラスの面子の動きが相当遅くなっていたのだ。

「今が勝機、私の重力で遅くしている間に皆行って！！」
見ると、敵のある女子が手をかざしている。

どうやら重力系の才能のようだ。

どどん敵が「っちに迫ってくる。

「やべえやべえ、この量は流石に……」
赤井も思わず後ずさる。

が。

「ふう、私の出番が来たようね」

篠崎は、笑っていた。

く棒倒し激戦！ーく（前書き）

燃える展開です。

く棒倒し激戦！〜

「つて、篠崎っ！？」

篠崎は止まっている味方の生徒に近づく。

「私の才能、忘れたわけじゃないでしょう？」

篠崎の言葉に、向こうで重力をかけているであろう女子が苛立ちを見せる。

「クラフト・イン・シミュレーション重力遮断」

すると、俺達のクラスの面子が見る見るうちに調子を取り戻していく。

篠崎の才能は、重力を無効化する。

つまり、相手が掛けてきた重力に関しても、無効化できるといっわけだ。

「全ての才能を消せる赤井君ほどじゃないけど、重力のみに関してなら、範囲で私は無効化できる」

篠崎は空を飛んでいた。

「あなたも、私の才能は知っていたはずだけれど？」

その声は、重力を掛けていた少女へ。

「はっ！！ 策にはまったのは貴方達のほうよー！！」

その女の子は、馬鹿にしたように笑い出す。

「考えても見なさいよ、貴方達の先兵ははまだスタジアムの中央。かたや私達はさっきの時間稼ぎで貴方達の棒に切迫している。この差があれば、勝てる!!」

言われてから気がついた。

相手の量が多い、これでは守備に回っている数で何とかなるかどうかは分からない。

かといって今からこっちの生徒を守備に戻しても、間に合うのは紅とごく数名だろう。

「攻めろおお!!」

その声は、守備のほうから聞こえた。

「俺達が何とかして守る!! その間に、敵を攻めろ!!」

一理ある。

いまさら防御して何になる。

祭りだ、戦略だ防御だぬかすんじゃない、ノーガードでの殴りあいこそが。

そう思い、赤井は一足先に自軍のほうへと戻った。

「紅、皆!! 敵は任せた!!」

「任せられた!!」

紅が跳ぶように棒へ向かった。

「総員、紅の攻撃に構えろ!!!」
敵も相当紅を警戒していた。

相手は任せただ、俺達も、出来ることをしないとな。

敵の遠距離攻撃を体当たりすることで消去する。

だが、敵の数が多い。

あっという間に敵に囲まれてしまった。

流石にタイムラグがある。まだ俺達の兵は敵陣の棒に到達できていない。

棒に取り掛かられる。

「押し倒せ!!! 俺達の勝利だ!!!」

「ここが踏ん張りどころだぜ!!!」

三角形の頂点に位置するところに置かれている棒、その一番敵に近い所の棒はもう倒れかけていた。

と、その次の瞬間。

ズン、という音が響いた。

その音に気がついたのは、棒に取り掛かっていた者達。

「能力付与、“重化”」
その声は、棒に手を掛けている男から。

「藤崎！！」

「^{グレートアップ}値上昇”。忘れてもらっちゃ困るぜ。さて、重くなった棒をどうやって倒す気だ？」

藤崎の才能、“^{グレートアップ}値上昇”によって棒が重くなり、倒すのが困難になった。

「ちっ！！　だが押し倒せば勝機はあるぞ！！　重いということはその分倒れれば戻しづらくなるということだ！！」

『おお！！』

おそらく今のは気休めだろう。

だがそれでいい。

時間さえ稼げれば。

その瞬間、ガンツ、という音があたりに響き渡った。

その音の方向は、21Bの棒のとある一角。

その一角に紅が、先ほど見せたカンフーキックの要領で棒の頂上付近を蹴り飛ばしていた。

4・5mほどあるはずの棒の頂上付近、相当な跳躍をしたとみえる。

「ちよつ!? 抑えきれねえ!!」

勢いに負けて、棒がバタンと倒れた。

そして皆がそちらに気をとられた瞬間、こちらでバシユツと音が響く。

今度は2-A、俺達の棒の、今抑えている棒とは別のある棒から聞こえてきた。

「な、何これっ!?!」

その守備についていたクラスメイトが悲鳴を上げる。

何かに押されているようだ。

「スバイラルスピア
嵐槍：渦々!!!」

その声は、スタジアムの中央付近から聞こえる。

嵐山だ。

どうやらその嵐の槍で棒を攻撃されらしい。

嵐の槍は次々と直撃し、棒を追い込んでいく。

「ゴメン、皆!!!」

「ちくしょおおお!!!」

その勢いで棒が倒れた。

残り棒、2本VS2本。

く棒倒し激戦！ーく（後書き）

こういう、皆が才能を發揮しあっているいいですね。

く棒倒し拮抗！！く

「おおっとう、ついに両チームとも一本目の棒が倒されましたよお！！」

司会の声がスタジアムに響く。

「紅と違って、俺には攻撃のタイムラグが、無いっ！！」
嵐山がスタジアムの真ん中で叫ぶ。

確かに紅は棒を蹴り飛ばした後、まだ次の棒へ向かおうとしている途中だ。

嵐山は半弧状に右腕を振る。

その瞬間空気の塊が九つ集まる。

「発射」

右手を俺達の方にむけ、手を銃の形にしてバン、と撃つ仕草をした。

バシユバシユバシユ！！ と連続した音が聞こえて、地面の砂を巻き上げながら嵐の槍が発射される。

だが、それは全て棒からは外れてしまった。

「そうか！！ 直撃してしまえば一大事だが、考えてみればスタジアムの中央なんて遠距離から自分で作った嵐の槍なんかを直撃させるなんて困難なんだ！！」

スタジアムの中央、嵐山が立っている場所から俺達が抑えていない三角形の頂点のもうひとつの棒まで、平気で100m以上はある。

「ちつ。下手な鉄砲数撃ちや当たるってな!! 一度直撃してしまえば方向が分かる、そうすりゃ連射で倒せるんだ!!」

また嵐山の周りの空気が集まりだす。

そうして発射された。

しかし、また外れる。

その間に、俺達のクラスメイトも敵軍の棒に取り掛かっていた。

「ぶっ倒してやんよあ!!」

「望むところだあ!!」

ここからは時間との戦いだ。
どちらが速く倒せるか。

「はああああ!!」

また、紅が跳び上がる。

「紅の蹴りが来るぞ!!」

「念波動!!」

「はら?」

だが、紅が跳び上がった蹴ろうとした瞬間、横に吹っ飛ばされた。

紅は空中でバランスを崩されたが、スタジアムの壁に着地して降りる。

「念能力系……？」

「私達を、舐めないことね！！」

数人の女子が、紅に手を向けていた。

「なるほどね、複数の念能力者の合作って訳」

どうやら今は、数人が念能力で紅を弾き飛ばしたらしい。

「……そう簡単には行かしてくれないか……」

紅も紅で頑張ってるわけか。

俺も……。

「爆ぜろ、じゃん」

「やるのは一回だけね」。紫瀬の才能はとかく危ないんだから」

その会話は、敵の棒のある一角。

「才能使うのは、あの“5・01事件”振りじゃん。だから……」

「加減が無くても知らないよ」

染山と十島が、棒のある一角にいた。

「カローラー・コントロール体温自在”……！！」

「……っ馬鹿！！ 染山からは目を逸らすなって言っただろ！！」
敵も気がついたようだが、もう遅い。

「フルスロツトルツ！！ 2000 ！！」

棒倒しの棒は、簡潔に行ってしまえば丸太である。

通常そういう大きな木材に火をつけるのには、順序が必要である。小さな火を少しずつ段階的に大きな火へのし上げていかなければならないのだ。

それは、必要な量の可燃性ガスを放出させるのに必要な量の燃料を熱することができないためである。

木は燃えにくいのだ。

だが、通常火の温度は700〜1000 とされている。

その二倍。

その場合。

ドオン、ともはや爆撃のような音が鳴り響く。

木の中にあつた水分の強制膨張、そして、炭化と着火。

そして棒は染山が触れた所で真っ二つに折れ、折れたほうふわ
りと浮き上がって。

「倒れさせん！！」

敵の生徒の一人が、両手を交差させる。

その瞬間、浮き上がった棒と元々合った方の棒が氷で繋ぎとめら

れる。

「俺と温度で戦う気じゃんか？」

「梁山紫瀬。お前の才能は知っている。そして、負けるわけには行かん!!」

『はああああ!!!!!!』

そしてその棒を中心に、超高温と超低温がぶつかり合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2215t/>

Skills Cross ~ Another Life ~

2011年12月11日20時49分発行